

2021 年度博士学位論文

中国語における因果関係を表す複文に関する
研究
～説明因果文、反事実仮定文及び疑念を表す
推論文を中心に～

お茶の水女子大学大学院
人間文化創成科学研究科
比較社会文化学 専攻

王 芸嬭

令和3年3月

【凡例】

1. 用例及び引用文の傍線、番号などは、特に断らない限り、引用者が付けたものである。
2. 用例の中の？印は、その文が不自然であることを示す。
 - *印は、その文が非文であることを示す。
 - () は、補足内容であることを示す。
 - 二重下線は、焦点マーカであることを示す。
 - []_Fは、その文の焦点であることを示す。
 - 文字は、研究対象とする関連詞であることを示す。
 - 波線部は、重要な文脈であることを示す。
 - 下線部は、研究対象とする複文の中で注目されたい部分であることを示す
3. 用例番号は、本研究で収集したデータ、先行研究などの著書から引用した例文及び自作例、すべてを通し番号にて示した。
4. 本研究で主として使用している略語及びその意味は、次の通りである。

“因为”文	“因为 p, 所以 q”を代表文型とする説明因果複文
“如果”文	“如果 p, 就 q”を代表文型とする仮定因果複文
“既然”文	“既然 p, 就 q”を代表文型とする推論因果複文
“因为……才”文	“因为 p, (所以) 才 q”文
一般“因为”文	q 節を導くのは副詞“才”でない“因为”文
反事実“如果”文	p 節と q 節のどちらかが反事実を表す“如果”文
一般“如果”文	反事実でない“如果”文
疑念を表す“既然”文	p に対する疑念または否定を表す“既然”文
一般“既然”文	p に対する疑念または否定を表さない“既然”文

目次

第1章	序論	1
1.1	本研究の目的と研究対象	1
1.2	理論的枠組み	7
1.2.1	前提・情動的焦点と対比的焦点	7
1.2.2	検証方法	11
1.3	データおよび収集方法	14
1.4	本論文の構成	16
第2章	“因为”文における原因節焦点化について	18
2.1	はじめに	18
2.2	焦点化及び焦点マーカ	20
2.2.1	焦点化の定義及び焦点化手段	20
2.2.2	“因为”文の焦点マーカ	25
2.3	“因为……才”文による焦点化条件分析	32
2.3.1	“因为……才”文の焦点化に関する特徴	32
2.3.2	“因为……才”文の構文に関する特徴	38
2.3.2.1	p、qが提供している情報が前提になる可能性	38
2.3.2.2	$p \rightarrow q$ と会話双方の認知	43
2.4	原因節焦点化の意味的及び語用論的機能	48
2.4.1	“才”の意味的指向	48
2.4.2	“因为……才”文における“才”の意味的指向	52
2.4.3	原因節焦点化の語用論的機能	56
2.5	焦点マーカ	60
2.6	本章のまとめ	67
第3章	反事実“如果”文の焦点と語用論的表現	68
3.1	はじめに	68
3.2	先行研究及び問題点	71
3.2.1	反事実“如果”文の表現形式に関する問題点	71
3.2.2	反事実“如果”文の前提と焦点に関する問題点	74
3.3	“因为……才”文との交替性による焦点分析	79
3.3.1	ライトテストによる前提と情動的焦点に関する考察	80

3.3.1.1	¬pに関する考察	83
3.3.1.2	qに関する考察	86
3.3.2	“否則”テストによる対比的焦点に関する考察	88
3.4	反事実“如果”文の会話の含意から生じる多義性	95
3.4.1	i類とiii類の文における会話の含意	95
3.4.2	反事実“如果”文の多義性	103
3.5	本章のまとめ	109
第4章	疑念を表す“既然”文における焦点及び語用論的特徴	112
4.1	はじめに	112
4.2	先行研究及び問題点	115
4.2.1	疑念を表す“既然”文の表現形式に関する先行研究及び問題点	115
4.2.2	“因为”文、“如果”文との比較に関する先行研究及び問題点	119
4.3	疑念を表す“既然”文の特徴及び前提と焦点	122
4.3.1	ライテストによる考察	123
4.3.1.1	qがpの推論と正反対な内容を表す文に関する考察	124
4.3.1.2	qがpの推論と一致する内容を表す文に関する考察	129
4.3.2	「“否則”テスト」による考察	132
4.3.2.1	qがpの推論と正反対な内容を表す文に関する考察	133
4.3.2.2	qがpの推論と一致する内容を表す文	136
4.3.2.3	一般“既然”文に関する考察	139
4.3.3	疑念を表す“既然”文と一般“既然”文に関する理解のずれ	141
4.4	“如果”文との比較	145
4.5	“因为”文との比較	153
4.6	本章のまとめ	159
第5章	結論	161
5.1	本研究の要約	161
5.2	本研究の意義と今後の展望	164
	参考文献	166

表目次

【表 1】 研究対象のまとめ	6
【表 2】 検索条件のまとめ	15
【表 3】 “因为”文の構文形式	19
【表 4】 語彙による原因節焦点化の表現形式（新田 2013:p.137）	23
【表 5】 各類の副詞の性質	28
【表 6】 反事実“如果”文の分類及び前提・焦点・会話の含意のまとめ.....	111
【表 7】 “既然”に対応する日本語表現(熊 2015:p.16)	114

図目次

【図 1】「複文二分系統」説と「複文三分系統」説における因果関係を表す複文の 範囲と位置づけ	4
【図 2】朱斌等(2013)による焦点マーカ―と構文形式による焦点化の併用	31
【図 3】原因節焦点化の比率	36
【図 4】焦点マーカ―の解釈装置 ((126) を例として)	55
【図 5】原因節を焦点化しない文の p、q の関係((132) を例として).....	60
【図 6】原因節を焦点化した文の p、q の関係((134) を例として).....	60
【図 7】(142) の焦点化過程と意味.....	65
【図 8】(139) の焦点化過程と意味.....	65
【図 9】(210) の対比的焦点である $\neg p$ の排他性の意味解釈	90
【図 10】(213) の対比的焦点である q の排他性の意味解釈.....	92
【図 11】iii類の文の意味解釈その 1 ((241) を例として)	101
【図 12】iii類の文の意味解釈その 2 ((243) を例として)	102
【図 13】(275) ~ (280) のライテスト結果に関する調査.....	129
【図 14】(285) の対比的焦点である $\neg q$ の排他性の意味解釈	136
【図 15】(289) の対比的焦点である q の排他性の意味解釈.....	138
【図 16】(296) の対比的焦点である q の排他性の意味解釈.....	141

第1章 序論

1.1 本研究の目的と研究対象

本研究は、中国語の因果関係を表す複文¹の情報構造の特徴について考察を行うものである。

文の情報構造の理論によると、自然な情報の流れは、旧情報から新情報或いは話し手と聞き手の間で共有された情報から聞き手にとっては未知の情報という流れである。しかし、複文の場合、文脈の展開に関する機能を担う接続詞などの影響によって、情報の流れも単文より複雑になる。即ち、情報の新旧と節順は完全に一致するとは限らない。

中国語の複文においては、説明因果複文（以下、“因为”文とする）はその代表例である。黄文龙（1998）、徐阳春（2002）、刘月华・潘文娣・故韡（2004）などの先行研究では、“因为”文の原因節である p が新情報を表すと主張されている。さらに、それを“因为 p”が単独に質問の答えになったり、否定詞により否定されたり、焦点マーカー²により強調されたりすることが可能であるという現象が生じる理由として解釈されている。钟小勇・张霖（2013）はこの現象を“因为”文の原因節の疑問化・否定化・焦点化と名付けている。(1)～(3)はその例である。

- (1) 为什么人们常常拒绝怜悯蔑视恩赐？就因为人们有尊严，需要平等的对待！（钟小勇・张霖 2013:p.39）

なぜ人々はいつも同情を拒否したり恩恵を軽蔑したりするのか。人々には尊厳があり、平等な待遇が必要だからなのだ。(拙訳)

¹ 複文の定義

二個あるいは二個以上の単文が結合して<複句（複文）>となる（鳥井 2004:p.76）。

² 焦点マーカーについて、2.2 を参照。

- (2) 祁老人的喜欢李四爷，倒不是因为李四爷不是个无产无业的游民，而是因为李四爷的为人好。(钟小勇・张霖 2013:p.39)

祁老人が李四爺に好感を抱いた理由は、李四爺が財産を持っていて、放浪者ではないからではなく、李さんの人柄がよいからなのだ。(拙訳)

- (3) 王掌柜！老大敢作那么不体面的事，是因为有洋人给他撑腰。(钟小勇・张霖 2013:p.39)

王オーナー！ボスがあんな不名誉なことをする勇氣があるのは、外国人が彼をサポートしているからなのだ。(拙訳)

しかし、節が表す情報の新旧だけで、“因为”文の原因節焦点化という現象を解釈するのは無理がある。まず、上述の結論を支持している郭继愁(2008)、钟小勇・张霖(2013)も、(4)のような、文脈(波線部に示す)から p が会話双方の既知情報であると判断される用例の存在を認めている。また、(4)の“因为 p”は単独に質問の答えになることが可能である。そうすると、“因为”文の原因節が焦点化される理由を再検討する必要があると考え、本研究の出発点となった。

- (4) 就是那个个儿特别矮，穿一双皮鞋，后跟儿特别高的那个。她可横了，从来都是板着脸，瞪着眼，胆小的能让她吓哭了的。姐姐插嘴说，你知道那是为什么吗？就因为她个儿矮。(日中:《活动变人形》)

背の低い、すごくかかとの高い皮鞋はいているあの先生、いばってんだ。いつも怖い顔して目むいて、臆病な子は泣いちゃうくらい。すると姉ちやまが口をはさみ、なぜか分かる？先生、背が低いからよ。(日中:『応報』・修正あり³)

³ コーパスによる訳文は「背の低い、すごくかかとの高い皮鞋はいた。あの先生、えばってんだ。」である。

“因为”文の原因節焦点化に対する研究の本質は、話し手の強調したい部分及びその部分の移動条件の確定である。即ち、焦点マーカ－との共起の有無により、文の焦点の変化に対する研究である。しかし、钟小勇・张霖(2013)など、情報構造の観点から“因为”文の焦点及び原因節焦点化の条件に関する先行研究は、主に情動的焦点に注目しているため、節が表す情報の新旧に注目している従来の研究との結論はほぼ一致し、焦点の移動条件として不十分ではないかと考えうる。

そこで、本研究は情報の新旧に注目している情動的焦点ではなく、情報の排他性の有無に注目している対比的焦点に着目することにする。研究対象について、上述の“因为”文のほかに、推論因果複文（以下、“既然”文とする）及び因果類複文の下位分類である「假定文」（以下、“如果”文とする）も取り上げ、対照分析を行う。その理由は以下に述べる。

中国語の因果関係を表す複文の範囲及び位置付けについて、先行研究では、「複文二分系統」説及び「複文三分系統」説という二つの分類方法によって分けられている。「複文二分系統」説（黎锦熙 1924、胡裕树 1979、陈中干 1995、徐阳春 2002 など）では、複文を節と節が対等な関係で結合した「連合複文」といずれかの節が主要で、他の節が付属的な関係で結合した「主従複文」にまず大きく分類されている。「因果複文」は「假定複文」、「条件複文」、「逆接複文」と「目的複文」と同じく、主従複文に属す⁴。(5) のような“因为”文と (6) のような“既然”文は共に「因果複文」に分類されている。

(5) 因为我去, 所以他去。(鳥井 2004:p.80)

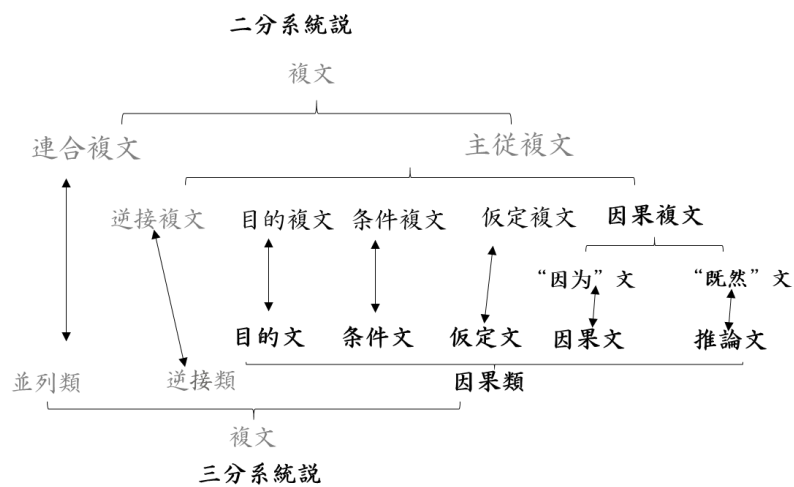
私が行ったので、彼は行った。(鳥井 2004:p.80)

(6) 既然我去, 他就会去。(鳥井 2004: p.80)

⁴ 「讓歩複文」、「時間複文」なども主従関係に属すと主張している研究も散見される。王(2010)、徐阳春(2002)などを参照。

私が行ったからには、彼も行ったはずだ。(鳥井 2004:p.80)

一方、邢福义(2001)が提唱している「複文三分系統」(邢福义 2001、吕叔湘 2002)では、(5)と(6)のような「因果文」と「推論文」のほかに、(7)～(9)のような「假定文」・「条件文」と「目的文」も「因果類複文」の下位分類として認識されている。二つの分類方法の異なる点について、具体的には【図 1】に示される。



【図 1】「複文二分系統」説と「複文三分系統」説における因果関係を表す複文の範囲と位置づけ

(7) 如果我去，他就会去。(鳥井 2004: p.80)

もし私が行ったら、彼は行くだろう。(鳥井 2004:p.80)

(8) 只要我去，他就会去。(鳥井 2004: p.80)

私が行きさえすれば、彼は行くだろう。(鳥井 2004:p.80)

(9) 你先把材料准备好，以便小组开会研究。(吕叔湘 1999:p.614)

グループディスカッションのために、資料を先に用意しなさい。(拙訳)

本研究で「複文三分系統」説に従い、“如果”文も研究対象とする理由は、“如果”文が“因为”文、“既然”文とそれぞれ交替可能であるためである。(10)～(13)に示されるように、“因为”文は“既然”文と言い換えられない一方、“因为”文と“如果”文には p 節の内容を否定に変えるなどをすれば、交替可能である。(11)と(12)のような“如果”文は、p 節が反事実を表しているため、以降反事実“如果”文と呼ぶ。

- (10) 丁丁低着头说：“榔头大伯，王小铁因为/*既然缺少铁，才没心思好好读书，可我没缺少铁……”（语料：孟侯《咪咪找铁记》）

「ハンマー爺ちゃん、王小鉄は鉄が足りないせいで、ちゃんと勉強する気がないのだが、僕は鉄が足りなくはないけど…」と丁丁が頭を下げて言った。(拙訳)

- (11) 丁丁低着头说：“榔头大伯，王小铁如果不是缺少铁，就能好好读书了。可我没缺少铁……。”

「ハンマー爺ちゃん、王小鉄は鉄が足りれば、ちゃんと勉強できるのと思う。けど、僕は鉄が足りなくはないよ…」と丁丁が頭を下げて言った。

- (12) 如果莺莺真是出身望族，张生和她的私通未必就这般容易……（语料：张铨锡《试论王实甫的〈西厢记〉》）

もし鶯鶯が本当に名家の出身であれば、張生とはそう簡単に私通することができるはずがない。(拙訳)

- (13) 因为莺莺不是出身望族，所以张生和她私通才这般容易。

鶯鶯は名家の出身ではなかったため、張生といとも簡単に私通することができたのだ。

また、“既然”文も p 節に対する疑念を表すなら、“如果”文に言い換えることができる。例えば (14) は (15) に言い換えられる。(14) のような“既然”文を以降、疑念を表す“既然”文と呼ぶ。

(14) 既然读过大学, 为什么却认不得几个字? (邢福义 2001:p.369)

大学に通ったことがあるのに, どうしてほとんど文字が読めないの? (拙訳)

(15) 如果读过大学, 为什么认不得几个字?

大学に通ったことがあるのなら, どうしてほとんど文字が読めないの?

交替可能であれば、話者が強調したい部分はほとんど変わらず、焦点も一致する可能性が高いため、本論文は反事実“如果”文及びそれと交替可能な原因節が焦点化された“因为”文と疑念を表す“既然”文を研究对象とし、対照研究を行いながら、以下の 3 つの課題を解明する。

- ① 上述の 3 種の複文の焦点の確定
- ② 焦点を移動させる条件
- ③ 焦点移動による文の意味変化

【表 1】研究对象のまとめ

研究对象とする複文	特殊形式	一般形式
“因为”文	“因为……才”文	一般“因为”文
“如果”文	反事実“如果”文	一般“如果”文
“既然”文	疑念を表す“既然”文	一般“既然”文

さらに、原因節が副詞“才”により焦点化されない“因为”文⁵（以下、「一般“因为”文」とする）、反事実でない“如果”文（以下、「一般“如果”文」とする）及び p に対する疑念を表さない“既然”文（以下、「一般“既然”文」とする）⁶との対照を通して、因果類複文の特殊形式だけでなく、一般形式の焦点についても言及し、上述の3種の複文の情報構造の全体像を把握する。研究対象を簡単に整理すると、【表 1】に示す。

1.2 理論的枠組み

本論に入る前に、本研究が対比的焦点に着目する理由を簡単に述べた後、情報の焦点及び対比的焦点の検証方法について論じる。

1.2.1 前提・情報の焦点と対比的焦点

情報の焦点と対比的焦点は共に焦点の下位分類である。焦点は前提 (presupposition) と共に情報構造上の概念であり、相対的な概念と見なされている。

前提と焦点の関係について、『新英語学辞典』では次のように記述されている (冨永 2012:p.4~5)。

文が伝える情報は、通常、聞き手がある程度知っていることについての新情報である。文の意味は、旧情報 (old information) と新情報 (new information) とから成り、旧情報を前提といい、新情報を断定⁷ (assertion)、また、文の中で断定を表す部分を焦点という。

⁵ 焦点マーカーのうち、“才”を主として研究する理由について、第2章を参照。

⁶ 本研究での略称と定義について、凡例を参照。

⁷ 一般的に「前提」と「断定」は相反する意味論的概念である。機能論的視点から言い換えるならば、前者は談話の流れの中で、話し手が聞き手にも共有

また、袁毓林(2012)では、焦点は前提との関係において捉えられる概念であり、単独では機能しないと指摘している。それゆえ、複文の焦点に対する検証研究を行う際に、前提に対する検証も不可欠である。

前提は、Frege(1892)が最初に指摘した概念であり、その後、研究分野によって意味論的前提 (semantic presupposition) と語用論的前提 (pragmatic presupposition) の 2 種類に分けて研究が進められているが、意味論的前提は文の真理値に注目しているもの⁸であり、語用論的前提は文の情報が会話双方にとって共有知識であるか否に注目しているものである。従って、焦点と相対的な概念はさらに明確に限定すると、語用論的前提であると考えられる。

Levinson(1983)では、語用論的前提の概念を次のように定義されている (Levinson1983:p.205)。

発話 A は、B が会話参加者の間でお互いに知られている (mutually known) ときにのみ A が適切である (appropriate) といえる場合、そしてその場合に限り、命題 B を語用論的に前提する。

例えば、(17) の “the speaker has a car” が会話参加者の間の共有情報であるときにのみ、(16) の “my car broke down” が言える。

(16) I'm sorry I'm late, I'm afraid my car broke down. (Levinson1983: p.205)

されていると仮定する旧情報を、後者は話し手が聞き手にとって未知であるとする新情報を構成する (奥坊 1990:p. 243)。

⁸ Levinson(1983)では、意味論的前提が次のように定義されている (Levinson1983:p.202)。

文 P が別の文 Q を意味論的に前提とするのは、次の条件のもとにおいてのみである。

P が真であるあらゆる状況で、Q が真である。

P が偽であるあらゆる状況で、Q が真である。

(17) The speaker has a car. (Levinson1983: p.205)

ただし、実際の会話の際に、聞き手が“the speaker has a car”を知らなかったとしても、この情報を受け入れ、文を自然に解釈することもある。このとき、聞き手は話し手に車があるという前提を補って文を解釈している。このように前提に補って解釈することは、前提調節(presupposition accommodation)と呼ばれている (Stalnaker1972,1973, Karttunen1974 など)。

即ち、語用論的前提は、話し手が聞き手から反論されないと想定できる情報であり、旧情報（既知情報とも言える）及び聞き手が旧情報として補うことができるかと想定される情報（＝前提調節）の2種を含む概念である。つまり、語用論的前提は、聞き手側が旧情報とみなし得るという特徴を持っている⁹。

一方、焦点は前提と対になる概念であり、Halliday (1967)、Jackendoff(1972)、田窪(1987)では、新情報であると定義されている。だが、焦点には、もう一つの側面があり、②に示すように、排他的情報でもある。

- ① 新情報であるもの。Halliday(1967)は、「焦点は新情報を反映する」と主張し、Jackendoff(1972)は、「焦点は話し手が聞き手にも共有されていないと仮定する情報」と主張し、田窪(1987)は「文は前提部分（旧情報）と焦点部分（新情報）とに大きく分けることができることは、よく知られている」と述べている。
- ② 排他的であるもの。Rooth(1985)は「焦点があれば、必ず選択がある。一つを選択し、他を排除した場合は焦点となる」と主張している。

⁹ 「前提-焦点」に関する研究と「旧情報-新情報」に関する研究は、別々に発展しているため、異なる概念の体系に属するものである。しかし、これまでの中国語複文に関する研究においては、旧情報（＝会話双方の共有知識）を前提と見なし、新情報を（情動的）焦点と見なししているのが一般的である（新田 2013、钟小勇・张霖 2013 など）。先行研究に基づいて複文研究を行うため、本研究でも、旧情報を前提の機能を果たしており、新情報を（情動的）焦点の機能を果たしていると認識する。

即ち、焦点は話し手が強調したい部分であるが、強調する手段により①新情報を表すことにより強調するものと②他の要素を排除することにより強調するものの二つの側面があるが、話し手が中国語学の伝統では、焦点の①の側面に注目した定義を「情報的焦点¹⁰⁾」、②の側面に注目した定義を「対比的焦点」と呼んでいる¹¹⁾。情報的焦点は文中における際立てられた部分ではなく、新情報になっているものである。一方、対比的焦点は、語順の変化や焦点マーカーなどの作用を受けて、排他的であることを明確にしているものである。簡単にまとめると、初めて提示される情報は情報的焦点であり、何らかの対立項目との対比を示すのは対比的焦点である¹²⁾。

また、情報的焦点と対比的焦点の区別について、袁毓林(2003、2012)は、一つの文には、情報的焦点は必ずあるが、対比的焦点は必ずあるとは限らないと指摘している。

福本(2020)では、情報的焦点と対比的焦点の相違点は排他性 (exclusiveness) の有無と指摘され、以下の(18)と(19)を例として挙げられている。(18)のBの発話においては、小説以外に、雑誌を読んでもその発話の真理値は真であるので、“看小说(小説を読みました)”は情報的焦点である。一方、(19)では彼と知り合った場所は大学以外の場所であってはならず、そうでなければ、文の真理値は偽となる。そのため、“在大学里(大学で)”は文の対比的焦点である。

(18) A:你今天做了什么?

B:我[看小说了]_F。(福本 2020:p.186)

¹⁰⁾ 「自然焦点」、「通常焦点」や「提示的焦点」とも言える。

¹¹⁾ Gundel(1999)では、「情報的焦点」と「対比的焦点」のほかに、「心理的焦点」もあると指摘されている。その定義は「会話双方が目下注意を集中させる成分」である。この「心理的焦点」は心理学の範囲に属すべきなので、本研究では触れないことにする (Gundel1999:p. 293)。

¹²⁾ 福本(2020:p. 186)を参照。

A:君は今日何をしましたか。

B:小説を読みました。(福本 2020:p.186)

(19) 我是[在大学里]_F认识他的。(福本 2020:p.186)

私は彼と知り合ったのは大学でだ。(福本 2020:p.186)

さらに、方梅(1995)は、情報的焦点と対比的焦点の前提について、以下のよ
うにまとめた。

情報的焦点の前提は「Xがある」である。文はXについて説明するものであ
る。対比的焦点の前提は「聞き手がBだと思っている」である。文はBではな
くAだと主張する目的で述べられる¹³。

以上をまとめると、対比的焦点は焦点でありながら、情報の新旧に関わらな
いものである。そのため、節の情報の新旧(=情報的焦点)により解釈できな
い“因为”文の原因節焦点化について、対比的焦点の方向で解釈するのが適切な
可能性が高いと考える。

1.2.2 検証方法

次に、前提、情報的焦点及び対比的焦点を検証する方法について説明する。

上述のように、語用論的前提は文が誠実に発話されるための条件の一つとさ
れ、話し手が会話双方の共有知識として見なしている文である¹⁴。従って、命題
を否定しても影響を受けないという特徴がある。そのため、文Bが文Aの前提
であるか否かを検証する時、文Aを否定し、Bの真理値に対する影響により判
断する。この検証方法は「否定テスト」と呼ばれ、前提を検証する時最もよく
使われている方法である。例えば、以下の(20)を否定すると、(20)から得ら
れた二つの推論B1が偽になるが、B2は否定の影響を受けずに、真のままであ
る。そのため、B2のみが文の前提であると判断しうる。

¹³ 方梅(1995:p. 279)を参照。

¹⁴ Karttunen(1973:p. 169~170)を参照。

- (20) John managed to stop in time.
B1:约翰停了下来。
B2:约翰试图停下来。(沈家煊 1986:p.31)

B1:ジョンは止まった。
B2:ジョンは止まろうとした。(拙訳)

- (21) John didn't manage to stop in time. (沈家煊 1986:p.31)

しかし、複文の構文形式が複雑であり、否定すると成立しない文が多く見られるため、「否定テスト」が適用されない¹⁵。そのため、本研究では、前提が文の否定に影響を受けないという性質を用いるが複文にも適用可能な「ライテスト」を用い、前提部分と前提でない部分(=情報的焦点)を推定する。このテスト法を提唱している Erteshik-Shir & Lappin(1979)は、(22)、(23)を挙げて、ライテストにより前提を推定する方法について説明している。

- (22) John believes that Orcutt is a spy.
a. He doesn't. b. He isn't. (Erteshik-Shir & Lappin 1979:p.46)
- (23) John carefully considered the possibility that Orcutt is a spy.
a. He doesn't (consider it carefully). b. *He isn't (a spy). (Erteshik-Shir & Lappin 1979:p.46)

(22) では、文を否定する際に、主節の「John believes」に対する否定も補文内容の「Orcutt is a spy」に対する否定も成立するので、主節と補文内容のどちらも前提でないことがわかる。一方(23)では、文を否定する際に、主節である「John considers it carefully」に対する否定は成立するが、補文内容である「Orcutt is a spy」に対する否定文は成立しない。即ち、主節は前提ではない一方、補文内容は前提であると判断することができる。

¹⁵ 石安石(1986:p.30)を参照。

このテスト法は、中国語の複文にも当てはまる。例えば、“既然”文では、p が前提とされるのが郭继愁(2008)、钟小勇·张霖(2013)で指摘されている¹⁶が、钟小勇·张霖(2013)は(24)のように、ライテストで“既然”文の前提を検証した結果、この結論と符合する。钟小勇·张霖(2013)によると、(24)を否定すると、B1のように、p に対する否定ではなく、B2のような q に対する否定であると認識されることが、文の意味から判断できる。即ち、文を否定しても、p が否定されない情報であるので、文の前提と判断できる。一方、文全体を否定する時、実は q に対する否定であるので、q は文の情動的焦点であると判断しうる。

(24) A:小兴兴**既然**姓金,**就**不能叫她二姨。

B:不是这样的。(钟小勇·张霖 2013:p.36)

B1: *不是这样的。小兴兴不姓金。

B2:不是这样的。(虽然小兴兴姓金,但)可以叫她二姨。

A:興興ちゃんの苗字は金**た**から、興興ちゃんを「2 番目のおばさん」と呼ぶことができないのだ。

B:違う。(拙訳)

B1:*違う。興興ちゃんの苗字は金ではない。

B2:違う。(興興ちゃんの苗字が金であっても,)興興ちゃんを「2 番目のおばさん」と呼ぶことができるの。

一方、対比的焦点を検証する方法について、郑郁汀(2012)及び朱斌等(2013)が提唱している「“否则(さもなければ)”テスト」を用いる。

郑郁汀(2012)及び朱斌等(2013)では、“因为 p, 所以 q, 否则 $\neg q$ (p だから q、さもなければ $\neg q$)”という構文形式を用いて、“因为”文の原因節が焦点であるか否かについて検証している。これらの研究では、このテストによって検証した焦点が対比的焦点とは明確に言っていないが、このテストの本質は、

¹⁶ “既然”文の前提と焦点に関する研究について、第4章で具体的に述べる。

原因節 p の排他性の有無について検証しているものである。例えば、(25) を「“否則”テスト」で検証すると、(26) のようになり、焦点マーカー“正是”と共に起している原因節 p が排他性を持つことがわかる。

- (25) 正是^{因为}根本没有正确消息，谣言反倒能立竿见影。(朱斌等 2013:p.222)

*まさしく正確な情報がまったくないからこそ、噂は逆に一気に広がるのだ。
(拙訳)*

- (26) 关于战争的，正是因为根本没有正确消息，谣言反倒能立竿见影，否则大家也不会都去相信了。(朱斌等 2013:p.222)

戦争に関しては、まさしく正確な情報がまったくないからこそ、噂は逆に一気に広がるのだ。さもないと、みんな信じるわけがない。(拙訳)

本研究においても、钟小勇・张霖(2013)と同じ方法を用いて、ライテストで複文の前提及び情報的焦点を見分ける。さらに、「“否則”テスト」を用いて、対比的焦点の有無を検証する。

1.3 データおよび収集方法

本研究は主に三つの観点からデータを収集した。具体的には以下の通りである。

① 下記のコーパスに収録された例文

(ア)「日中对訳コーパス」(第一版)(2003、北京日本学研究中心) (以下、「日中」と略す)

(イ)「語料庫在線」(<http://corpus.zhonghuayuwen.org/>) (教育部語言文字応用研究所) (以下、「語料」と略す)

(ウ)「CCL 語料庫」

(http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai) (北京
大学中国語学研究中心) (以下、「CCL」と略す)

(エ)「BCC 語料庫」(<http://bcc.blcu.edu.cn/>) (北京語言大学語言智能研
究院) (以下、「BCC」と略す)

コーパスから収集した例文は実例であり、文脈も確認することが可能であるため、主に実例検証のために用いる。収集方法は、手順 i) 検索条件①によって各コーパスから最大 500 例ずつ¹⁷収集し、その中から、必要な例文を選択し抽出する。手順 ii) 手順 i) の結果から、検索条件②によって必要な用例数を研究データとして選択する。手順 i) と ii) はどちらもランダムに行う。検索条件及び実際に使用する研究データ数を【表 2】にまとめる。

【表 2】 検索条件のまとめ

検索条件①	検索条件②	研究データ数
因为	“才”を除外する	200
	因为&才	200
	是因为&“才”を除外する	50
	正因为&“才”を除外する	50
如果 (その中から反事実“如果”文と判断する例を抽出する)		200
既然 (その中から疑念を表す“既然”文と判断する例を抽出する)		100 ¹⁸

② 先行研究から引用した例文

主として先行研究及びその問題点を把握するために用いる。そのうち、実例の一部も分析のデータとして用いる¹⁹。例文の後ろに出典を明記した。

¹⁷ コーパスからの用例数が 500 例未満の場合、全例を収集した。

¹⁸ 疑念を表す“既然”文の用例数が少ないため、100 例を収集した。

¹⁹ 用例数を統計する時は算入しない。

③ 筆者による自作例

出典を記していない例文は筆者の作例である。

本研究の自作例は、①と②の例文と対照するために作成したものであり、変量を最小限に絞ることにより、焦点移動などの変化を観察することができる。10人の母語話者のうち6人以上に不自然と判断された場合、不自然な文と見なし、「?」「*」などの印を付ける。

本研究は、①と②から該当する用例を抽出し、傾向を観察する。すべての中国語の用例に日本語訳文を提示する。そのうち、「日中対訳コーパス」と一部の先行研究から取った例文は訳者の翻訳をそのまま付ける。語料庫在線、CCL、BCCや作例など訳文が付いていない例文を使用する際に、筆者による訳文を付ける。

なお、「日中対訳コーパス」から取った例文は文学作品であるため、訳者個人の習慣や文脈などにより、訳文に不自然さを感じるものもあるが、それを補うために拙訳も採用することがある。その都度、注釈に補足説明を入れる。

1.4 本論文の構成

本論文の構成を述べておく。本研究は、序論から終論まで、全5章からなっている。第2章からの各章の主な内容を以下に示す。

第2章では、“因为”文の原因節を焦点化する条件を考察する。まず、“因为”文の原因節を焦点化する焦点マーカーについて再考察し、“因为”文と共起する焦点マーカーの特徴をまとめる。次に、“因为”文と焦点マーカー²⁰“才”との共起に注目する。“因为……才”文の特徴を分析することにより、“因为”文の焦点化条件を絞り込む。なお、“因为”文と焦点マーカーを共起する際の焦点移動について考察し、その焦点移動により生じる文の多義性及び焦点化の語用論的機能について分析する。最後に、“因为”文と共起する焦点マーカーのそれぞれの特徴及び使い分けについてまとめる。

²⁰ 焦点マーカーについて、2.2を参照。

続く第3章では、反事実“如果”文の前提と焦点を考察し、対比的焦点の排他性の有無による文の多義性について分析を行う。まず、中国語における反事実“如果”文に関する先行研究を概観し、表現形式及び情報構造による分類上の問題点についてまとめる。次に、“因为……才”文との交替可能性により、反事実“如果”文を3種類に分類し、それぞれの前提と焦点を分析する。最後に、焦点と会話の含意のずれによる文の多義性について述べる。

第4章では、疑念を表す“既然”文の前提と焦点を考察する。まず、先行研究を概観する上で、疑念を表す“既然”文の定義を明らかにする。次に、一般“既然”文と比較しながら、疑念を表す“既然”文の前提と焦点を明らかにし、その焦点の違いによる多義性と解消方法について述べる。最後に、疑念を表す“因为”文及び反事実“如果”文との比較分析により、疑念を表す“既然”文の情報構造においての特徴について考察する。

第5章では、本研究のまとめ、研究意義及び今後の課題について述べる。

第2章 “因为”文における原因節焦点化について²¹

本章では、因果関係を表す最も代表的な複文である“因为”文の原因節焦点化を受け条件及びその原因節焦点化の語用論的機能について考察する。そのうち、“因为……才”文という、形式上すでに焦点マーカーが付いてある文を取り上げ、一般“因为”文との対照分析により、焦点化を受け条件に関する特徴を絞り込む。また、その焦点化条件に基づき、“因为”文全体を分類し、焦点移動による意味変更について検討する。

2.1 はじめに

“因为”文は、中国語における因果関係を表す代表的な複文であり、代表的な構文形式は“因为 p, 所以 q”である²²。(27) に示されたように、“因为”文は一般的に、原因となる節 p、結果となる節 q 及び関連詞により構成されている。p は原因を説明し、q はそれによって生じた結果を説明する。原因節 p を導く関連詞は“因为”、“由于”などがあり、結果節 q を導く関連詞は“所以”、“因此”、“因而”、“故”、“以致”などがある。

- (27)

因为	你不让他去,	所以	他没去。
	p		q

 (邢福义 1993:p.357)
君が彼を行かせないから、彼は行かなかった。(拙訳)

また、“因为”文は、(27) と (28) のような「原因→結果」順の「順行型」構文以外に、(29) のような「結果→原因」順の「逆行型」構文もある。【表 3】にその構文形式を示す。

- (28)

因为	今天进城要办的事情多,	所以	天刚亮他就出门了。

 (胡裕树 1979:p.366)

²¹ 本章は王芸嫒(2019)を加筆修正したものである。

²² 邢福义(1993)、王维贤(1997)、黄伯荣等(2002)、徐阳春(2002)、刘月华等(2004)などを参照。

今日は都市でやることがたくさんあるので、夜明けに出かけた。(拙訳)

- (29) 他之所以这么开心, 是因为小萃提到“他们”的小孩。(徐阳春 2002: p.107)

あの人がこんなに喜んでいるのは、萃ちゃんが「彼ら」の子供に言及したからだ。(拙訳)

【表 3】“因为”文の構文形式

順行 型	因为	今天进城要办的事情多	所以	天刚亮他就出门了。
	関連詞	p	関連詞	q
逆行 型	之所以	他这么开心	是因为	小萃提到“他们”的小孩
	関連詞	q	関連詞	p

そのうち、「逆行型」構文は節の順序を変えることによって、原因節が文末焦点位置に移動され、焦点が置かれるというのは、一般的に認識されている(朱斌等 2013、新田 2013 など)。新田(2013)は、このような焦点化手段を構文形式による焦点化とした。

一方、「順行型」構文の原因節は“是”、“正”、“才”など焦点マーカーにより焦点化されるのが一般的である。新田(2013)は、このような焦点化手段を語彙による焦点化とした。後述もするが、焦点マーカーとの共起の有無によって、文の意味が大きく変わったり、非文になったりする用例も散見される。本章では「順行型」構文の原因節焦点化による意味変更に注目して考察を行う。具体的な考察方法は、以下の4点がある。

- ① 焦点マーカーの再考察によって、“因为”文と共起する焦点マーカーの特徴を把握すること
- ② 「順行型」の“因为”文の特殊形式である“因为……才”文を取り上げ、“因为”文の原因節が焦点化される必要条件を絞り込むこと

- ③ 焦点マーカ―“才”の考察を行った上で、複文と単文の交替可能性により、“因为”文の原因節が焦点化された際の焦点移動について分析すること
- ④ よく使われている焦点マーカ―“是”、“正”、“才”の使い分けとそれぞれの語用論的機能をまとめること

なお、刘月华・潘文娛・故韡(2004)には、「順行型」の“因为”文の構文形式として、①関連詞を用いない文、②“因为 p, 所以 q”文、③“由于 p, 所以 q”文、④“p, 因而 q”文などが挙げられている²³が、本論文は原因節を導く接続詞“因为”を用いる文、即ち“因为 p, (所以) q”文²⁴のみを研究対象とする。

2.2 焦点化及び焦点マーカ―

次に、焦点化の定義をまとめる上で、“因为”文における原因節焦点化の表現形式について再検討を行う。

2.2.1 焦点化の定義及び焦点化手段

田子内・足立(2005)は焦点の定義について、①発話において最も強く発音される要素である、②発話内で最も重要な情報を担う要素であるという2点を指摘している。そのうち、①は音声によるものであり、発話時、ストレスやイントネーションによって表現されている。②は新田(2013)によれば、語彙または構文形式によって、焦点を際立たせられるのが一般である。田子内・足立(2005)は、このような、焦点 F²⁵を特定的手段で表現することを、「焦点化 (focusing / focalization)」と定義している (田子内・足立 2005:p.3)。

神郡(1990)によれば、伝統的な研究において「視点」または「視像」という名のもとに論じられてきた問題を焦点化と呼び直すことを主張したのは

²³ 刘月华等(2004:p. 889)を参照。

²⁴ 自然な発話では、q 節を導く接続詞“所以”がよく省略されるので、省略可能な意味で“(所以)”と表記する。

²⁵ 田子内・足立(2005)では X を用いるが、以下の q を成立させる集合 X と混乱しないように、本稿では F を用いる。

(Genette 1972)である。その後、飯島(1983)、刘鑫民(1995)、田子内・足立(2005)、稲田(2010)など、英語、日本語、中国語などの自然言語における焦点化の現象に関する研究が多く見られる。

さらに、田子内・足立(2005)は英語に基づき、焦点化手段を以下の3つにまとめ、この三つの焦点化手段を併用する複合的な手段も散見されると指摘している(田子内・足立 2005:p.3~4)。

① 線形順序に基づく焦点化 (=右方移動)

Fを文中の特定の位置に置く。

(30) A letter arrived for you [from England]_F.(田子内・足立 2005:p.3)

② 特定構文に基づく焦点化(=分裂文化)

Fを特定の構文枠に当てはめる。

(31) It was [the tone of his voice]_F that surprised me.(田子内・足立 2005:p.4)

③ 分析的標示に基づく焦点化 (=焦点マーカーとの連合)

Fと共に並べて特定の語を使用する。

(32) I only [kissed]_F your sister last night.(田子内・足立 2005:p.4)

“因为”文の原因節に対する焦点化は、前述のように、主に構文形式によるもの(=逆行型)と語彙によるもの(=順行型)の2種類がある。田子内・足立(2005)で指摘されている焦点化手段と合わせて、次のように整理できる。

① 構文形式によるもの=線形順序に基づく焦点化

原因節 p の右方移動によって焦点化すること。(33) と (34) のように、構文順序を変えることによって、p を文末焦点位置に移動し、焦点化されることになっている。中国語においては、“(之所以) q, 是因为 p”という構文がよく使われている。

- (33) 正像许多重大发现是因了偶然性、是因了恶作剧一样，我家的高粱酒之所以独具特色，是因为[我爷爷往酒甕里撒了一泡尿]_F。(日中：《红高粱》)

多くの発見が偶然性や悪ふざけに端を発しているのと同様に、うちの高粱酒の特異さも祖父が原酒を入れた酒甕に小便をしたことにはじまる。
(日中：『赤い高粱』)

- (34) 他们跟着跑，是因为[还不知道那包袱里兜的是什玩艺儿]_F。(日中：《金光大道》)

村長にくっついていくのは、あのフロシキの中にどんな仕掛けがしてあるか知らないせいだ。(日中：『輝ける道』・修正あり²⁶)

② 語彙によるもの＝分析的標示に基づく焦点化

焦点マーカーと連合させて焦点化すること。

“因为”文においては、(35)と(36)に示したように、“是”、“正”などがよく焦点マーカーとして使われている。

- (35) 正是因为[好多年听不到这样的痛骂]_F，我才变成今天这个样子。
(日中：《人啊，人》)

長年、そういうふうに痛罵してくれる者がいなかったために、こんなありさまになってしまった。(日中：『ああ、人間よ』)

- (36) 仅仅是因为[缺钱]_F才干这个的吗？(日中：《人啊，人》)

こんなことやってたのは、懐具合のためだけかい。(日中：『ああ、人間よ』)

²⁶ 原訳文の「知らねえ」を標準語表現である「知らない」に書き直した。以下も同じ。

焦点マーカー (focusing maker) ²⁷は、文中の一部の語句と結びついて、意味上その語句を特に際立たせるような一群の副詞であると田子内・足立(2005)が定義している。田子内・足立(2005)は、英語を主として研究を行っているため、「焦点化副詞」という表現を使っているが、中国語では“是”のような副詞ではない「焦点化詞」があるので、本研究では「焦点マーカー」と称する。

田子内・足立(2005)では、Quirk et al.(1985)の副詞分類に従って、焦点マーカーを限定的なものと同追加的なものの2種類に分けられている。限定的な焦点マーカーはさらに「排他詞」と「特定化詞」の2つに区分されている。排他詞は only のような、文の焦点 F と結びついた場合、その文の表す状況が F だけについて成立するものであって、それ以外のものについては成立しない副詞である。特定化詞は、especially などのような、その状況が主に (特に) F について成立し、他のものについては (さほど) 当てはまらないという副詞である。この2種の副詞はいずれも、F を含む文の状況が成立する範囲を狭め、限定するという働きを持つ。一方、追加的焦点マーカーは、even などのような、「(他のものに加えて) F も」という意味であり、F を含む文の表す状況が他の文の表す状況と並んで成立することを示す副詞である²⁸。

【表 4】 語彙による原因節焦点化の表現形式 (新田 2013:p.137)

	表現形式	焦点の位置	焦点マーカーの位置
語彙によるもの	正 (是)・(就) 是 p, q	p	p
	p, 才 q	p	q
	正 (是) p, 才 q	p	p と q
語彙+構文形式	是 (因为) p, (才) q……的	p	p と q

²⁷田林(2010)では、「焦点因子」とも呼ばれているが、焦点マーカーと同じものであると考える。

²⁸ 田子内・足立(2005:p. 161~162)を参照。

“因为”文の原因節を焦点化する焦点マーカーについて、これまでの研究は、田子内・足立(2005)が指摘している「排他詞」と認識するのが一般的である。例えば、新田(2013)は p における“正(是)・(就)是”と q 節における“才”を焦点と認識し、【表 4】にまとめている。後述もするが、“是”、“正”、“才”のいずれかも〔+排他〕という特徴を持つ。

一方、特定化詞や「追加的」の意味を表す副詞も“因为”文の焦点マーカーと認識する研究は、郑郁汀(2012)と朱斌等(2013)がある。二者とも、焦点マーカーを①評価性副詞“正”・“正是”・“就”・“只”など、②全称量化(universal quantification)副詞“全”・“完全”・“都”など、③確定を表す語気副詞“一定”・“的确”など、④推測を表す語気副詞“大约”・“大概”・“也许”など、⑤程度副詞“特别”・“尤其”などの5つに分類している。(37)～(41)はその例である。

- (37) (= (25)) 正是 因为 根本没有正确消息, 谣言反倒能立竿见影。(朱斌等 2013:p.222)

まさしく正確な情報がまったくない から こそ, 噂は逆に一気に広がるのだ。(拙訳)

- (38) 全 因为 爱书, 三年风风雨雨, 总算挺了过来。(朱斌等 2013:p.222)

すべては本を愛する から こそ, 三年に渡る艱難辛苦を何とか乗り越えられたのだ。(拙訳)

- (39) 我本来的确 因为 怕闹, 所以 不打牌。(朱斌等 2013:p.223)

私は確かに賑やかな雰囲気^が苦手だから, トランプをしないのだ。(拙訳)

- (40) 船夫大约 因为 要赶第二趟生意, 催着我们回去; 我们无可无不可的答应了。(朱斌等 2013:p.223)

船頭は次のお客さんを迎えたかったからかもしれないが、私たちに戻るよう催促した。私たちはどちらでも構わないと思って、同意した。(拙訳)

- (41) 尤其因为节约照明用电属于终端节电, 照明用电又多是峰时用电,
所以, 提高照明效率具有节约电量和电力的双重作用……。 (朱斌等
2013:p.224)

特に照明用具の省エネは、終端装置の節電に属し、照明もラッシュ時
でより多く使われるため、照明用具のエネルギー効率をアップすることは、
電気量と電力の両方に省エネ効果があるのだ……。 (拙訳)

朱斌等(2013)では、以上の5類の副詞を原因節の前に置くと、“因为”文の焦点が原因節に移動すると指摘されている。

しかし、③確定を表す語気副詞、④推測を表す語気副詞及び⑤程度副詞は焦点マーカーより、モダリティ（心的態度）表現を表すモダール副詞に分類すべきではないかという意見もあり、焦点マーカーの範囲を明確にしていなかったため、次の2.2.2では再考察し、“因为”文の原因節を焦点する焦点マーカーを絞り込む。

2.2.2 “因为”文の焦点マーカーの再考察

郑郁汀(2012)、朱斌等(2013)と新田(2013)による焦点マーカーの分類についての問題点は、主に以下の2点がある。

- ① “是……的”を「語彙+構文形式による焦点化」として認識されるべきか。
- ② 確定を表す語気副詞、推測を表す語気副詞及び程度副詞を焦点マーカーとして認識されるべきか。

まず、新田(2013)は(42)のような文を構文形式“是……的”により焦点化される文と認識している。しかし、この例を“是因为 p, 所以 q”構文(= (43))または“因为 p, 才 q”構文(= (44))に言い換えても文が成立し、意味的な変更もほとんどない。

(42) 是因为[没带钥匙]_F, 她才在外面过夜的的。

鍵を持っていなかったから、外で泊まったのだ。(新田 2013:p.128)

(43) 是因为没带钥匙, 所以²⁹她在外面过夜。

(44) 因为没带钥匙, 她才在外面过夜。

一方、中国語における「対比的焦点を強調する」代表的な構文と認識されている³⁰“是……的”構文では、“是”を省略しても文が成立し、意味も変わらないのが一般的である。(45) と (46) はその例である。

(45) (是)[谁]_F 给你起的名字, 这么好听!(刘月华·潘文娱·故 韓 2004:p.766)

[誰]_Fがあなたの名前をつけたのか。とてもいい名前だ!(拙訳)

(46) 他(是)[上星期]_F 去的, 我(是)[这星期]_F 去的。(刘月华·潘文娱·故 韓 2004:p.768)

[先週]_F行ったのは彼で, [今週]_F行ったのは私だ。(拙訳)

さらに、董(2016)は、“是……的”構文が原因を表すことができると指摘し、(47) と (49) の 2 例を挙げている。この 2 例も (48) と (50) のように、“是”を省略することが可能である。

(47) 手指黄了, 是抽烟抽_F的的。(董 2016:p.192)

指が黄色になった。[たばこを吸いすぎた]_Fのだ。(董 2016:p.192)

²⁹ q 節を導く副詞“才”が焦点マーカールの役割も果たしているため、ここで“是”のみで焦点マーカールの役割が果たせることを説明するため、“才”を削除した。q を導く関連詞が欠かせると自然言語として若干違和感があるため、焦点マーカールでない関連詞“所以”を補完する。

³⁰ 刘月华等 (2004:p.763~764)、方梅(1995:p.281)などを参照。

(48) 手指黄了。〔抽烟抽〕F的。

(49) A: “那个妇女怎么晕倒了?”

B: “是〔饿〕F的。”(董 2016:p.193)

A: 「あの婦人はどうして倒れたのか。」

B: 「〔空腹〕Fだから。」(董 2016:p.193)

(50) A: “那个妇女怎么晕倒了?”

B: “〔饿〕F的。”

一方、“因为”文の場合、(42)、(51) と (52)、(53) に示すように、他の焦点マーカーを用いず、“是”も省略し、“的”のみを用いると、文が成立しない。

(51) *因为没带钥匙, 所以她在外面过夜的。

(52) 他是因为光吃老秧南瓜, 所以才又苍白又虚胖的。

あの人はうらなりの唐茄子ばかり食べるから、蒼くふくれるんです。(新田 2013:p.133)

(53) *他因为光吃老秧南瓜, 所以又苍白又虚胖的。

他の諸例からみても、“是……的”構文により“因为”文の原因節を焦点化する場合、“是”が不可欠であることがわかる。そのため、本研究は、“是因为 p, (所以) q 的”構文を“是……的”構文による焦点化ではなく、焦点マーカー“是”による焦点化と見なし、「語彙+構文形式」の手段ではなく、今回の研究対象である焦点マーカー(=語彙のみ)による焦点化に属すると主張する。

次に、郑郁汀(2012)、朱斌等(2013)による5種の焦点マーカーを再考察するため、本研究では、まず田子内・足立(2005)による焦点マーカーの分類に基づき、朱斌(2013)が指摘している5種の副詞を分類する。分類の根拠は、吕叔湘(1999)による各類の副詞の意味であり、それぞれの意味から分かる特徴を【表

5】にまとめる。【表 5】からみると、この 5 種の副詞のどちらも〔-追加〕であり、追加的焦点マーカ―ではないことがわかる。

また、評価性副詞及び全称量化副詞は〔+強調；+排他〕という特徴を表し、「排他詞」に属することがわかる。特に〔+排他〕について、(54)、(55) または (56)、(57) のように、排他性を表す文脈を付与しても、文が成立する。

【表 5】各類の副詞の性質

分類	副詞	意味（呂叔湘 1999 による）	強調	排他	追加
評価性副詞	正	確定語気を強める（呂叔湘 1999:p.670）	+	+	-
全称量化副詞	全	程度に関して 100% である（呂叔湘 1999:p.457）	+	+	-
語気副詞 （確定）	一定	十分確定する（呂叔湘 1999:p.604）	+	-	-
語気副詞 （推測）	大約	状況を推測する（呂叔湘 1999:p.142）	-	-	-
程度副詞	尤其	全体的またはほかのものと比べると程度が大きいことを強調する（呂叔湘 1999:p.627）	+	-	-

(54) 問題正在这里。(呂叔湘 1999:p.670)

問題点はまさしくここにあるのだ。(拙訳)

(55) 問題正在这里，而绝非在其他地方。

問題点は絶対ほかのところでなく、まさしくここにあるのだ。

(56) 这里陈列的全是新出的书刊。(呂叔湘 1999:p.457)

ここに置いてあるものはすべて新刊の本や雑誌だ。(拙訳)

(57) 这里陈列的全是新出的书刊，而绝不是别的。

ここに置いているものは他ならぬ、すべて新刊の本や雑誌なのだ。

一方、程度副詞と 2 種の語気副詞の排他性について、(58)、(60)、(63) にそれぞれ排他的な文脈捉えて (59)、(61)、(63) になると、文が成立しないことから、〔-排他〕と認識しうる。

(58) 多喝酒对身体不好，尤其影响心脏。(吕叔湘 1999:p.627)

酒を飲みすぎることは体によくない。特に心臓に悪い影響を与えるのだ。
(拙訳)

(59) *多喝酒对身体不好，尤其影响心脏，而非身体其他部位。

*酒を飲みすぎることは体によくない。特に体の他の部分ではなく、心臓に悪い影響を与えるのだ。

(60) 这种材料一定结实。(吕叔湘 1999:p.604)

この素材はきっと丈夫だ。(拙訳)

(61) *这种材料一定结实，而不是便宜。

*この素材はきっと丈夫だ。安くはないが。

(62) 此事大约已成定局。(吕叔湘 1999:p.142)

このことはもう決まったかもしれない。(拙訳)

(63) *此事大约已成定局，而绝非变成其他结果。

このことはもう決まったかもしれない。その他の結果はあり得ない。

また、「特定化詞」の定義にある「他のものについては（さほど）当てはまらない」という意味の文脈と捉えると、文が成立するが、(64)のように、話し手が“多喝酒对其他部位没有那么大影响(酒を飲みすぎることは他のところに対する影響はそれほど大きくない)”という意味を表したいのかについては疑問が残る。即ち、特定化詞はある程度の排他性を表しているが、中国語における程度副詞“尤其”は必ずしもある程度の排他性を表すという発話意図があるとは限らない。

(64) ?多喝酒对身体不好, 尤其影响心脏, 对其他部位的影响没有那么大。

?酒を飲みすぎることは体によくない。特に心臓に悪い影響を与えるのだ。他のところに対する影響はそれほど大きくない。

なお、推測を表す副詞により焦点化された(40)を「“否则”テスト」³¹により検証した結果、(65)のようになる。非文にはならないが、(40)とのニュアンスの違いがある。(40)の“我们无可无不可的答应了(私たちはどちらでも構わないと思って、同意した)”という後続文からみれば、船頭の行動の理由ではなく、行動自体を表すqである“催我们回去(私たちに戻るよう催促した)”に重点を置くことがわかる。一方、(65)では、船頭が私たちに催促する理由に重点を置いている。それは、(40)の原因節pが“大约”と共起しても、排他性がない証拠の一つとして見られる。

(65) 船夫大约因为要赶第二趟生意, 催着我们回去, 否则应该会让我们再留些时候的。(朱斌等 2013:p.224)

船頭は次のお客さんを迎えたからかもしれないが、私たちに戻るよう催促した。さもなければ、もっと長く滞在させるはずだ。(拙訳)

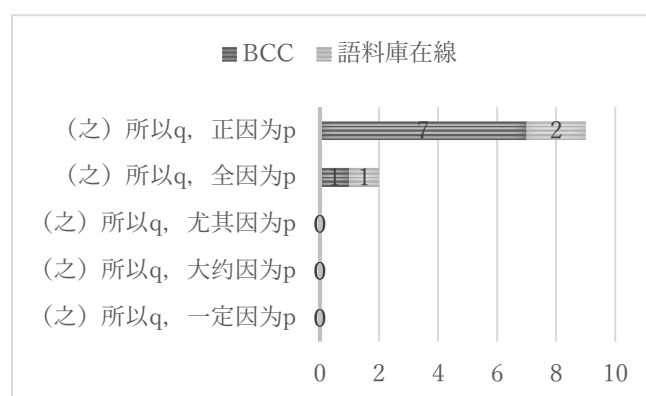
³¹ 1.2 を参照。

さらに、“是”、評価性副詞及び全称量化副詞を“因为”の前に置く場合、原因節の右方移動によって、構文形式による焦点化手段との併用も可能である一方、程度副詞と2種の語気副詞が“因为”の前に置かれる場合、原因節の右方移動をすると非文になる。BCCと語料庫在線に収録している用例からみると、【図2】に示すように、“(之)所以q, 正因为p”及び“(之)所以q, 全因为p”の形式で原因節を右方に移動する用例数はそれぞれ9、2であるが、“(之)所以q, 尤其/大约/一定因为p”の用例は1例もない。

以上から、確定を表す語気副詞、推測を表す語気副詞及び程度副詞は田子内・足立(2005)による焦点マーカークラシフィケーションに当てはまらず、焦点マーカークラシフィケーションと認識されにくいと本研究で主張する。

以上のことにより、焦点化、焦点マーカークラシフィケーションの一般概念及び“因为”文の原因節を焦点化する手段、“因为”文と共起する焦点マーカークラシフィケーションをまとめ、“因为”文と共起する焦点マーカークラシフィケーションを再考察した。

その結論として、本研究では新田(2013)が指摘している“是”、“才”及び郑郁汀(2012)、朱斌等(2013)が指摘している評価性副詞及び全称量化副詞を焦点マーカークラシフィケーションとして認める。これらの焦点マーカークラシフィケーションはすべて田子内・足立(2005)が指摘している「排他詞」に属し、〔+強調; +排他〕という共通的な特徴を持っている。



【図2】朱斌等(2013)による焦点マーカークラシフィケーションと構文形式による焦点化の併用

本研究では、上述の焦点マーカーの中で多くの研究で認められ、最も一般的である“是”、“正”、“才”を取り上げ、“因为”文の焦点化に関する研究を行う。次の2.3節では、まず焦点マーカー“才”により焦点化された“因为”文(=“因为…才”文)に関する考察を行い、原因節焦点化の必要条件について分析を行う。

2.3 “因为……才”文による焦点化条件分析

本節では、焦点マーカー“才”により原因節を焦点化した“因为”文、即ち“因为……才”文を取り上げ、p、q及びp、qの関係である $p \rightarrow q$ の特徴を分析し、原因節焦点化の必要条件をまとめる。

2.3.1 “因为……才”文の焦点化に関する特徴

“因为”文に関する研究は、その代表文型である“因为 p, 所以 q”を中心に研究することが一般的である。一方、呂叔湘(1999)で指摘されているように、副詞“才”が“因为/由于”など説明因果関係を表す関連詞と併用する例も散見される。その際、q節における関連詞“所以”を省略することも可能である。(66)はその一例である。

(66) 正因为有困难, 才派我们去。(呂叔湘 1999:p.107)

まさしく困難があるから, 私たちを行かせるのだ。(拙訳)

本研究が、2.2.2で述べた焦点マーカーの中で、“才”を絞り込む理由について、先行研究の問題点をまとめながら具体的に述べる。

“因为”文の原因節焦点化に関する研究は、管見の限り、郑郁汀(2012)、钟小勇・张霖(2013)、新田(2013)、朱斌等(2013)のみである。しかし前述のように、“因为”の前に副詞“是”、“正”などを置いたり、“不是”、“没有”などの否定詞を付いたり、或いは単独で質問の答えになったりするという他の複文に滅多にない

特徴を持つことが、すでに多くの研究で注目されている。钟小勇・张霖(2013)は、このような特徴を“因为”文の焦点化、疑問化、否定化と名付けている³²。

しかし、従来の研究では、このような特徴が生じる理由について、上述の特徴を持っていない“既然”文と比較し、情報の新旧(=未知/既知)という視点から解釈している³³。例えば、刘月华・潘文娉・故韡(2004)は、“推断因果句(=“既然”文)中，由‘既然’引导的分句(=p)对听说双方来说是已知信息……而说明因果复句(=“因为”文)，由‘因为’引导的分句(=p)对听话人来说不是已知信息(“既然”文では、“既然”に導かれる節 p は会話参与者にとって既知情報である一方、“因为”文では、“因为”に導かれる節 p は会話参与者にとって既知情報ではない)”³⁴と指摘し、それを“因为”文の原因節が焦点化・疑問化・否定化される理由と見なしている。(67)と(68)は刘月华・潘文娉・故韡(2004)が挙げている対照例である。

(67) 学生：老师我头疼。

老师：既然你头疼，就不要上课了，回家去吧。(刘月华・潘文娉・故韡 2004:p.871)

学生：先生、私は頭が痛いです。

先生：頭が痛いのなら、授業を休んで、家に帰りなさい。(拙訳)

(68) 老师：你昨天为什么没来上课？

学生：因为我昨天头疼得很厉害，所以没来上课。(刘月华・潘文娉・故韡 2004:p.187)

先生：昨日どうして登校しなかったの？

³² 1.1 を参照。

³³ 刘月华・潘文娉・故韡(2004:p.871)及び郭继愁(2008:p.26)を参照。

³⁴ 刘月华・潘文娉・故韡(2004:p.871)を参照。括弧の中の訳文は筆者によるものである。

学生：昨日頭がすごく痛かったので、登校しなかったのです。(拙訳)

钟小勇・张霖(2013)、朱斌等(2013)、新田(2013)などは情報の新旧を前提ではない/前提としているが、p が既知であるか未知であるかにより原因節の焦点化可否を決定するという結論は変わらない。

しかし、先行研究には、問題点が2つある。

まず、p が旧情報であっても原因節の焦点化が可能である。

郭继愁(2008)は、刘月华・潘文娉・故韡(2004)の結論を支持しつつも、“因为”文における p が新情報とは限らず、(69) のような旧情報を表す文もあり、さらに実例調査の結果によると、p が旧情報を表す“因为”文は圧倒的に多く、全体の79%を占めると指摘している。

- (69) 梦莲姑娘永远不抹口红，不烫发，不擦胭脂，不穿鲜艳的衣服。因为她素丽，所以有时候倒愿意看别人的身上穿着大红大绿。(郭继愁 2008:p.23)

夢蓮さんは口紅をつけたり、パーマをかけたり、パウダーを塗ったり、明るい服を着たりしない。彼女はシンプルな格好をするので、時々派手な服装をする人を見ることが好きだ。(拙訳)

それにもかかわらず、実例によれば、“因为”文の p が旧情報を表す場合、原因節を焦点化することも可能である。(70) はその例である。この用例の中で、p である“这样健忘（この健忘症）”はすでに文脈から知られている旧情報であるが、“正”、“才”により原因節が焦点化されている。

- (70) 他想，人原来是这样健忘的，同样的一个人在短短的时间内竟然变换了两个面目。过后他又想，大概正因为这样健忘，所以才能够在痛苦中生活下去罢。(日中:《家》)

人間というものは元来これほど健忘症なものか。同じ一人の人間が、短時間の中に二様に姿を換えてみせる。きつとこの健忘症のために、苦しい環境の中でも生活して行くことができるのだろう。(日中:『家』)

钟小勇・张霖(2013)も、「“因为”文の p は絶対に前提ではない」ではなく、「“因为”文の p は文の前提とは限らない」と述べている³⁵。

従って、“因为”文における原因節焦点化の条件は、先行研究が指摘しているような p の既知/未知ではない可能性が高い。

次に、すべての“因为”文が焦点マーカールと共起することができるわけではない。

これまでの先行研究では、原因節焦点化を“因为”文が他の複文と区別する一つの特徴と見なされている。しかし、実例分析によれば、焦点マーカール“是”または“正”を“因为 p”の前に置くと、(71)のように文が非文になったり、(72)のように複文自体は非文ではないが、文の意味が大きく変わり、文脈とつながりにくくなったりする例が散見される。

- (71) 他短不了来，不过没到我们那儿，我夫妇不认识。(*正/*是)因为他跟我女儿认识，所以就怎么样？(CCL:《1982年北京话调查资料》)

アイツはよく来たけど、俺たちのところまで来ていないから、俺と妻はアイツのことを知らない。アイツがうちの娘の知り合いたから、それで何(*なんだ)？(拙訳)

- (72) 困难是有的，(?正?是)因为粤汉路常受轰炸，货运不便，弄得学校里的图书仪器无法征集和购备，所以做学问很感觉不便。(语料：胡嘉《国立西南大学》)

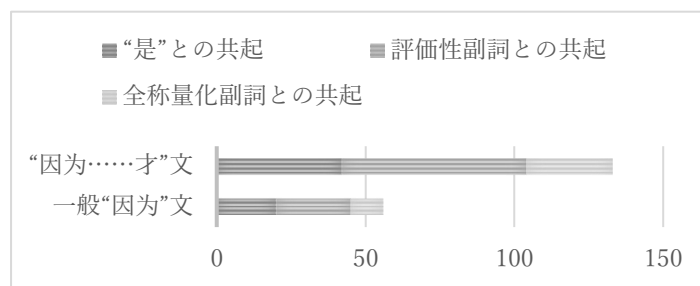
³⁵ 郭继愁(2008:p.23)と钟小勇等(2013:p.37)を参照。

困難は確かにある。広東-武漢線鉄道はよく爆撃され、貨物運送は不便なので、学校の図書や備品を買うことができないから、学問をすることが非常に不便だ(?のだ)。(拙訳)

特に(72)では、“因为”文の原因節を焦点化しても、文自体が成立する。しかし、波線部の文脈とのつながりが悪い。なぜなら、文脈から判断すると、この文は話し手が“困难(困難)”について説明しようとする文であるが、原因節の焦点化により、具体的な困難を述べる q は文の焦点から外れるからではないかと考えられる。

実例からみると、今回収集した一般“因为”文 200 例のうち、焦点マーカールと共起している用例はわずか 34% であり、焦点マーカールと併用しても文の意味がほぼ変わらない文と合わせても、43.5% に止まる。

それに対し、“因为……才”文の 200 例のうち、77.5% の用例は p 節における焦点マーカールと併用し、一般“因为”文より大幅に上回る。具体的には【図 3】に示される。



【図 3】原因節焦点化の比率

さらに、(73) のような p 節における焦点マーカールと併用しない“因为……才”文を、p 節における焦点マーカールと併用しても、文が成立し、意味もほとんど変わらない。なお、(73) を (74) のように、“焦点マーカール + 因为 p, 所以 q”文に言い換えても、文の意味はほぼ変わりはない。

(73) 不过, 老伯, 你找我是不是有事? (是/正) 因为有事才一大清早特意打电话来的吧? (BCC:村上春树《海边的卡夫卡》)

でさ、おじさん、用事があるよね? なんか用事があるから(こそ)朝早くから電話してきたのよね。(拙訳)

(74) 不过, 老伯, 你找我是不是有事? 是/正 因为有事, 所以一大清早特意打电话来的吧?

今回収集したデータのうち、すべての“因为……才”文は“是”または“正”と併用することができ、“是/正”により原因節を焦点化する文に言い換えられる。

一方、“是因为 p”と“正因为 p”がお互いに言い換えられない用例は多くある。

(75) はその一例である。

(75) 他站起身把桌上的东西卷成一卷, 往床上一扔, 严肃地看着我问: “仅仅是 (/*正) 因为缺钱才干这个的吗?” (日中:《人啊, 人》)

彼は立ち上がり、テーブルの上の物をまるめてベッドに放り投げ、真剣なまなざしでおれを見た。「こんなことやってたのは、懐ぐあいのためだけかい」(日中:『ああ、人間よ』)

従って、“因为……才”文は①一般“因为”文より、“是/正”などの p 節における焦点マーカと併用しやすい、②“是”、“正”との共起が可能であるという 2 点の特徴からみると、“因为……才”文と“是”、“正”により焦点化された文では、話し手が強調する部分が一致する。即ち、“因为……才”文は“是”、“正”により原因節を焦点化する際の必要条件が揃い、“是”、“正”による原因節焦点化の焦点が一致する可能性が高いという結論が得られる。

それゆえ、“因为……才”文の焦点を確定することができたら、“是”、“正”など“因为 p”の前に置く焦点マーカにより焦点化された“因为”文の焦点もわかると考えられる。これは、本研究では“因为……才”文に注目する理由である。

2.3.2 “因为……才”文の構文に関する特徴

次に、“因为……才”文における p、q 及び $p \rightarrow q$ を観察し、それぞれの特徴について分析を行う。

2.3.2.1 p、q が提供している情報が前提になる可能性

郭继慈(2008)、钟小勇・张霖(2013)などの先行研究は、すでに p の特徴に注目し、p が提供している情報は前提であることもあり、前提でないこともあると指摘している。本研究も先行研究の結論を支持し、q の特徴に重点を置くことにする。

q がすべて会話双方の共有知識、即ち前提であることは、“因为……才”文の大きな特徴の一つである。例えば、(76) では、ディケンズが世界的に有名な作家であるため、q である“(狄更斯) 搞起写作来 (ディケンズは作家になった)”は一般常識であることがわかる。また、(77) では、q に含まれる“这样 (このような)”などの言葉により、前文で言及された事実を提示している内容を表すことがわかる。

(76) 狄更斯是因为踢足球伤了腿，才改行搞起写作来的。(日中:《活动变人形》)

ディケンズはサッカーで足を傷めたから作家になった。(日中:『応報』)

(77) 张金发不高兴了：“我认为一条一条，一字一字，挺妥当，挺全面。”
高大泉不客气地指出：“因为你思想已经落后，一脑瓜子奔个人小日子的巧打算，钻到旮旯里出不来，才这样认为。”(日中:『金光大道』)

張金發は面白くない。「おれはどれもこれも、適当だし、全面的だと思うがな」高大泉は遠慮しなかった。「あんたは思想が遅れて、個人のちっぽけな暮らしにうつつをぬかし、片隅にばかり頭を突っこんでるからそう思うんだよ」(日中:『輝ける道』)

このような一般常識や前文ですでに提示している内容、または“你来了(あなたは来た)”など文の意味から会話双方の共有知識と判断できる内容は、文の前提と認識される。今回、コーパスから検出した 200 例の“因为……才”文の中で、q が前提である用例数は 200 (100%) である。

一般“因为”文も、q が前提である例のほとんどは“是”、“正”などの焦点マーカーと共起することが可能である。今回収集した 200 例の中で、q が前提である例は 57 例 (28.5%) のみであるが、そのうちの 51 例が (78) のような“是”、“正”などの焦点マーカーと共起する例または (79) のように焦点マーカーと共起しても意味がほとんど変わらない例である。

- (78) 但倪吾诚没有死。他满面红光，身体健康。也许正是因为静宜骂誓的时候和骂誓以后不那么坚决，心里的仇恨攒得还是不够足也不够决绝，因而使他们的“誓”失去了效力，因而保住了倪吾诚的一条命吧？ (日中:《活动变人形》)

ところで当の倪吾誠だが、死ぬどころか元気でピンピンしている。願かけした静宜の心にためらいがあり、憎み不足で「呪咀」の効力が削がれ、今だに生き長らえているのだろうか。 (日中:『応報』)

- (79) 皮肤是“长疥、长疔、长牛皮癣、长烂疮”，然后是“一层层的疙瘩，一层层地烂，一层层的血水，一层层的脓，一层层地脱皮”，骂得细致入微，入木三分，而且不无根据。(是) 因为倪吾诚脖子后面长牛皮癣，这是姜赵氏知道的，所以她的骂着重在皮肤方面。 (日中:《活动变人形》)

皮膚については「おだき、カイセン、面疔、エン、潰よう」「ポロポロ皮剥げ、ジクジクただれ、ジョクジョク血膿」と微に入り細を穿った罵倒ぶり。それには根拠がなくはなく、倪吾誠の首の後ろにできたカイセンに当てこすってことさら強調したのだ。 (日中:『応報』・修正あり)

なお、このような文は“因为……才”文に言い換え、“才”により焦点化されることもできる。例えば、(78)と(79)は(80)と(81)に言い換えることが可能である。

- (80) 但倪吾诚没有死。他满面红光，身体健康。也许因为静宜骂誓的时候和骂誓以后不那么坚决，心里的仇恨攒得还是不够足也不够决绝，因而才使他们的“誓”失去了效力，因而才保住了倪吾诚的一条命吧？
- (81) 皮肤是“长疥、长疔、长牛皮癣、长烂疮”，然后是“一层层的疙瘩，一层层地烂，一层层的血水，一层层的脓，一层层地脱皮”，骂得细致入微，入木三分，而且不无根据。因为倪吾诚脖子后面长牛皮癣，这是姜赵氏知道的，所以她的骂才着重在皮肤方面。

逆に、q が前提でない一般“因为”文の 143 例の中で、原因節が焦点化されない文は 107 例あり、焦点化される文が 36 例ある。どちらも一定数の例が見られたが、焦点化されない例の割合が大きい。例えば、(82) の q である“她们的锐利无比的语言相互听起来大大减少了刺激力（鋭利無双の罵言も相殺作用を起こして効果は半減）”は一般常識ではない上で、文脈内容である“任何人听到这母女三人骂的说的哭的声音，听到这些话的内容都会吓晕过去的（母娘三人が泣きながら毒づき呪う声を聞くと誰しも卒倒しかねない）”と逆の意味を表すため、前提でないと認識される。この例は、焦点マーカー“是”、“正”により焦点化されると“因为”文自体は非文にはならないが、文脈とつながりにくくなる用例である。

- (82) 任何人听到这母女三人骂的说的哭的声音，听到这些话的内容都会吓晕过去的。但（？是/？正）因为她们三个人这样一起骂倪吾诚并不是第一次，所以她们的锐利无比的语言相互听起来大大减少了刺激力。（日中：《活动变人形》）

母娘三人が泣きながら毒づき呪う声を聞くと誰も卒倒しかねない。惜しむらくは三女一丸となつての倪吾誠こき卸しもこれが始めてでないことか
ら、鋭利無双の罵言も相殺作用を起こして効果は半減。 (日中:『応報』)

さらに、焦点マーカーと併用できない“因为”文は q が前提でない部分から前提部分に変更されると、焦点マーカーと併用できる文になることも散見される。例えば、(83) は“他(彼)”の困難な状況について述べている文であるため、q である“一上大学还把工资免了(大学に進学すると給料まで止められる)”は前提でなく、文の重点であることがわかる。しかし、(84) のように、波線部の文脈により、q を前提に変更すると、文が焦点マーカー“是”との併用が可能になる。

- (83) 三十好几了，老婆喊孩子哭，屁股大的一间房，只好蹲到路灯底下去背书，(*是/*正)因为工龄不够，一上大学还把工资免了。(日中:《插队的故事》)

三十過ぎの年になって、女房が怒鳴るは子どもが泣くはで、額がくっつくような狭いひと間だけの部屋にいられるはずがなく、仕方なく街路灯の下へ行って本の暗記をしなくてはならない。勤続年数が足りないから大学に進学すると給料まで止められる(*のだ)。(日中:『遙かなる大地』)

- (84) 三十好几了，老婆喊孩子哭，屁股大的一间房，只好蹲到路灯底下去背书。而且你知道为什么一上大学还把他工资免了吗？(是)因为工龄不够，所以一上大学把工资免了。

三十過ぎの年になって、女房が怒鳴るは子どもが泣くはで、額がくっつくような狭いひと間だけの部屋にいられるはずがなく、仕方なく街路灯の下へ行って本の暗記をしなくてはならない。そう言えばなぜ大学に進学してから給料まで止められたのか知っているか。勤続年数が足りないから大学に進学すると給料まで止められるのだ。

以上の考察からみると、q が前提である場合、“因为”文の原因節が焦点化されやすいという結論が得られる。しかし q が前提であることは、原因節が焦点化される十分条件でも必要条件でもない。

まず、少ないながらも、q が前提であっても、原因節が焦点化されない文が 6 例収集された。(85) と (86) はその例である。例えば、(86) では、q である“(听话者) 被勒令退学 (聞き手は退学処分を受けた)”は、聞き手にとって当然知っている情報である。話し手も q を知った上で、この質問をしている。即ち、q が会話双方にとって文の前提であるが、この文の原因節を“是”、“正”などの焦点マーカーにより焦点化されることもできず、“因为……才”文に言い換えても違和感がある。

- (85) 你现在心里矛盾吧? ……(*正/*是)因为这个你就不行了。你就这么脆弱吗? (BCC)

君の心、矛盾しているよね。…これだけでももうあきらめた(*のだ)。あなたはこんなにも弱いのか。(拙訳)

- (86) 上中学的时候您曾经(?正/?是)因为写了一篇文章, 取笑训导主任, 被勒令退学啊? (CCL:杨澜对话热点人物:《杨澜访谈录 II》)

中学生の頃、あなたは文章を書いて、教頭先生を笑いものにしたので、退学処分を受けました(*のだ)よね。(拙訳)

- (87) ?上中学的时候您曾经因为写了一篇文章, 取笑训导主任, 才被勒令退学啊?

次に、前文ですでに述べたが、q が前提ではなくても原因節が焦点化される例も 36 例ある。この場合、“正”を用いるのが一般的である。(88) はその例である。

- (88) 我知道我若有了这一切，我就会很快乐的消失在里面去——但正因为，我知道自己太清楚了，我就不愿结婚，而至今没有结婚！”(日中：《关于女人》)

そのすべてが手に入れば、喜んでそのなかにこの身をとけこませるでしょう。けれど私は自分がどんな人間かはっきりとわかっているので、結婚したいとは思いませんでした。それでずっと結婚しなかったのです”(日中：『女の人について』)

従って、q が前提であることは、“因为”文の原因節焦点化条件ではない、或いは“因为”文の原因節焦点化条件になるために、他の条件と併用する必要があると考えられる。

2.3.2.2 p→q と会話双方の認知

次に、“因为……才”文の p、q の関係を表す p→q の特徴について観察する。p→q (=p が q を成立させること) について、話し手の態度により、①支持する³⁶、②反論するという 2 種の関係を表す可能性がある。今回収集した“因为……才”文における p→q はすべて①支持する関係を表すものである。例えば、(89) の p→q である“‘不好好上班’可以使‘得不到姑娘的爱情’成立(「仕事をちゃんとしない」は「女性が相手にしてくれない」を成立させることができる)”と(90) の p→q である“‘电视剧失败’可以使‘下定决心回去’成立(「ドラマが失敗する」は「帰ると決意する」を成立させることができる)”はどちらも話し手が提示するものであると文脈から判断できる。

- (89) 现在他看到，和他同班的工人都找到了合适的对象，而自己因为不好好上班才得不到姑娘的爱情。(BCC:《人民日报》)

³⁶ 話し手が自ら提示する p→q も、p→q を支持すると見なす。

彼は今発見した。仕事場の従業員たち、みんないい相手を見つけた。
一方、自分だけは仕事をちゃんとしなかったから、女性が相手にしてく
れないのだ。(拙訳)

- (90) “江浪，你可是因为这次电视剧的失败，才下定决心回去？”庄岩问。
(BCC:严沁《当爱来时》)

「江浪さん、あなたは今回のドラマが失敗したせいで、帰ると決意したの
か。」と庄岩が聞いた。(拙訳)

このような話し手が自ら提示するまたは支持し、かつ聞き手が反論しないと
想定している内容は、1.2 で述べた前提の定義と一致しているので、 $p \rightarrow q$ は文
の前提であると認識しうる。

一方、2.3.2.1 で述べた (91)、(93) のような q が前提であっても、原因節が
焦点化されない文は、 $p \rightarrow q$ が②話し手が反論したい内容を表すものであること
が、それに対応する“因为……才”文である (92)、(94) を比較してみるとはっ
きりわかる。この場合、話し手が $p \rightarrow q$ を支持しないため、 $p \rightarrow q$ を文の前提で
あると認識しにくい。

- (91) (= (85)) 你现在心里矛盾吧？……(? 正 / ? 是) 因为 这个 你就不行了
了。你就这么脆弱吗？

君の心、矛盾しているね？…これだけでもうあきらめた(*のだ)。あなたは
こんなにも弱いのか。

- (92) (正 / 是) 因为 这个 你才不行了。

こんなことのせいで、あなたはあきらめたのだ。

- (93) (= (86)) 上中学的时候您曾经(? 正 / ? 是) 因为 写了一篇文章，取
笑训导主任，被勒令退学啊？

中学生の頃、あなたは文章を書いて、教頭先生を笑いものにしたので、退学処分を受けました(*のだ)よね。

- (94) 上中学的时候您曾经(正/是)因为写了一篇文章，取笑训导主任，才被勒令退学啊？

中学生の頃、あなたは文章を書いて、教頭先生を笑いものにしたので、退学処分を受けたのだよね。

具体的に、(95)のように文脈をつけて比較してみれば、一般“因为”文の場合、話し手は聞き手が提示している $p \rightarrow q$ “‘这个’可以使‘我不行了’成立（「これ」は「あきらめる」を成立させることができる）”に反論し、 p は q を成立させるはずがないことを主張している。一方、“因为……才”文の場合、話し手が $p \rightarrow q$ を支持し、 p を q の成立理由として強調している。

- (95) 甲:你为什么不行了？
乙:因为太难了, 所以我不行了。
甲 1: 因为这个你就不行了。你就这么脆弱吗?
甲 2: 因为这个你才不行了。确实很难。

甲: どうしてあきらめたの？
乙: 難しすぎるから、あきらめた。
甲 1: これだけでもうあきらめた。あなたはこんなにも弱いのか。
甲 2: このため、あきらめたのだ。確かに難しいよね。

また、(96)～(99)の比較からも、原因節が焦点化されない(93)の場合、話し手が $p \rightarrow q$ である“写了一篇文章取笑训导主任”可能使“被勒令退学”成立（「文章を書いて教頭先生を笑いものにする」は「退学処分をうけた」を成立させることができる）”に反論したい一方、“因为……才”文である(94)なら、話し手はそれを支持することがわかる。

- (96) 上中学的时候您曾经因为写了一篇文章取笑训导主任，被勒令退学啊？学校不应该因为这点事就让学生退学。

中学生の頃、あなたは文章を書いて、教頭先生を笑いものにしたので、退学処分を受けたよね。学校はこれだけで生徒さんに退学させるべきではないよ。

- (97) *上中学的时候您曾经因为写了一篇文章取笑训导主任，被勒令退学啊？那您确实做得不对，应该被退学。

*中学生の頃、あなたは文章を書いて、教頭先生を笑いものにしたので、退学処分を受けたよね。確かにあなたのせいだから、退学処分を受けても文句が言えないね。

- (98) *上中学的时候您曾经因为写了一篇文章取笑训导主任，才被勒令退学啊？学校不应该因为这点事就让学生退学。

*中学生の頃、あなたは文章を書いて、教頭先生を笑いものにしたからこそ、退学処分を受けたのだよね。学校はこれだけで生徒さんに退学させるべきではないよ。

- (99) 上中学的时候您曾经因为写了一篇文章取笑训导主任，才被勒令退学啊？那您确实做得不对，应该被退学。

中学生の頃、あなたは文章を書いて、教頭先生を笑いものにしたからこそ、退学処分を受けたのだよね。確かにあなたのせいだから、退学処分を受けても文句が言えないね。

“因为……才”文と同じく、“是”、“正”などの焦点マーカーと共起できる一般“因为”文の用例は、すべて話し手が $p \rightarrow q$ を支持する態度を持つ例である。(100)はその例である。

- (100) “在今天的社会里, 爱情还属稀世珍品, 我是凡夫俗子, 不敢存此奢望。不过, 也正因为这样, 我的生活倒可能是幸福的。”(日中:《人啊, 人》)

「今の世の中じゃ、愛情は世にも稀なる珍宝だ。ぼくみたいな凡夫がそんな大それた望みを持ってるものか。もっとも、だからこそ幸福に暮らしていけるかもしれんがね」。(日中:『ああ、人間よ』)

一方、原因節が焦点化されない文では、q の情報の新旧にかかわらず、 $p \rightarrow q$ が話し手にとって反論したい用例が多くみられる。上述の q が前提である(85)、(86)のほか、q が前提でない(101)、(102)もその例である。

- (101) (= (71)) 他短不了来, 不过没到我们那儿, 我夫妇不认识。(*正/*是)
因为他跟我女儿认识, 所以就怎么样?

アイツはよく来たけど、俺たちのところまで来ていないから、俺と妻がアイツのことを知らない。アイツがうちの娘と知り合ったから、それで何(*なんだ)?

- (102) 在惯于扮演“民主”装饰的英国, 也经常违反“秘密投票”的原则……一个保守党的地主, (? 正 / ? 是)因为听到他的工人说不喜欢丘吉尔, 就把这几位工人辞退了。(語料:李光灿《评资产阶级民主制》)

「民主主義」と宣伝しているイギリスでも、「秘密選挙」の原則を違反することがよくある。ある保守党の地主はチャーチルを支持しない従業員がいると聞いたから、彼らを解雇してしまった(?のだ)。

従って、話し手が $p \rightarrow q$ を支持こと、即ち $p \rightarrow q$ は文の前提であることは“因为”文の原因節焦点化の必要条件であるという結論を得た。

以上をまとめると、“因为……才”文及び“是”、“正”などの焦点マーカールと共に起できる一般“因为”文の共通的な特徴は、話し手が $p \rightarrow q$ に対して支持する態

度を持つことである。即ち、原因節が焦点化された“因为”文または原因節を焦点化することができる“因为”文のすべてが前提 $p \rightarrow q$ を持っている。それは“因为”文における原因節焦点化の条件とも認識される。

次の 2.4 節では、“因为……才”文の焦点を考察した上で、 $p \rightarrow q$ を文の前提とする必要性についても分析する。

2.4 原因節焦点化の意味的及び語用論的機能

本節では、“因为……才”文の焦点を考察する上で、①焦点マーカ―を付ける、文の焦点の変化、②原因節焦点化による焦点移動は文の意味に対する影響の 2 点を解明することを目的とする。

2.4.1 “才”の意味的指向³⁷

まず、副詞“才”の意味から、焦点マーカ―としての役割を見に行く。

呂叔湘(1999)では、副詞“才”の意味について、以下の 5 項が挙げられている。

- ① 刚刚，表示事情在前不久发生。(○○をしたばかりである。)

(103) 他才走。(呂叔湘 1999:p.107)

彼は行つたばかりだ。(拙訳)

- ② 表示事情发生或结束得晚。(時間的・時期的に遅い時に使用され、「やっと○○をした」を表す)

(104) 他明天才能到。(呂叔湘 1999:p.107)

彼は明日まで来られない。/彼は明日やっと来られる。(拙訳)

- ③ 表数量少，程度低(数量が少ないこと、または程度が低いことを表す)

³⁷ 本研究は焦点化副詞の役割をより明確に示すため、「焦点指向」という言い方も使用する。「意味的指向」と同義であるとみなす。

(105) 他才是个中学生,你不能要求太高。(吕叔湘 1999:p.107)

彼はまだ中学生だから、あまりにも厳しく要求してはいけない。(拙訳)

- ④ 表示在某种条件下,或由于某种原因、目的,然后怎么样。用于后一小句,前一小句常有“只有、必须、要;因为、由于;为了”配合。(ある条件のもとに、またはある原因・目的のため、あることが発生したという意味を表す。“只有/必须/要/因为/由于/为了”などの関連詞とよく併用する。)

(106) (= (66))正因为有困难,才派我们去。

まさしく困難があるから、私たちを行かせるのだ。

- ⑤ 强调确定语气。(確定の語気を表す。)

(107) 你才撒谎!(吕叔湘 1999:p.108)

あなたこそ嘘をついているのだ!(拙訳)

以上の各項のうち、①～③項は時間の早さ・数量の多さを表すため、“因为”文の原因節焦点化に関係ないことが判断され、今回の研究対象としないことにする³⁸。

(106)に示された通り、複文で用いられる用法④は本章の研究対象である“因为……才”文に当てはまる。しかし残念ながら、吕叔湘(1999)にはこの文の焦点に触れず、意味解釈から文の焦点を判断することも難しい。

一方、単文で用いられる用法⑤についても、文の焦点には触れていないが、意味から焦点が判断できる。特に(108)と(109)のような“才+(是)”構文について、吕叔湘(1999)は“含有‘别的不是’的意味(「他ではない」という意味が含まれている)”と指摘しているので、〔+排除〕という意味的な特徴を表し、その前の部分が文の対比的焦点である可能性が極めて高いことがわかる。

³⁸ さらに、後述するが、①～③項は“因为 p, 才 q”との交替ができない。

(108) [这]_F才是名副其实的英雄！(吕叔湘 1999:p.108)

[これ]_Fこそが正真正銘のヒーローなのだ！(拙訳)

(109) [你]_F才(是)撒谎！(我没撒谎)。(吕叔湘 1999:p.108)

[あなた]_Fこそが嘘をついたのだ！(私は嘘をついていないよ。)(拙訳)

また、王群(2005)も、以下の(110)、(111)を“才”の意味指向核心(=焦点)が左側になる例として挙げている³⁹。

(110) [昨天那场球]_F才精彩呢！(王群 2005:p.22)

[昨日の試合]_Fこそ素晴らしかったのだよ！(拙訳)

(111) [你]_F才瞎说。(王群 2005:p.22)

[あなた]_Fこそでたらめを言っているのだ。(拙訳)

王群(2005)では、この“才”の用法について、他の選択肢と比較し、排除する表現と見なされている⁴⁰。

王群(2005)に基づき、この“才”の用法を以下のように解釈することが可能である：“才”より前の部分を変数 x とし、 $x_1, x_2, x_3 \dots x_n$ は一つの集合 X を構成する。さらに、話し手がその集合から、一つの項を選択し、他の項との区別をつける。以下、(111)を(112)のように、“ x 才 y ”構文を言い換え、さらに、集合 X を(113)のように定義する。話し手は、ある人物がでたらめを言っている

³⁹ 王群(2005)では、“才”の意味的指向が左側になる場合と右側になる場合に分けられると指摘されている。そのうち、①-③項の意味的指向は右側になり、⑤の意味的指向は左側になる。“才”が複文の中にある場合の意味的指向性(=④項)については言及されていないが、本稿では、⑤と同じく左側にあるとみなしている。

⁴⁰ (王群 2005:p. 22)を参照。

ることがわかり、この人物が集合 X の要素であると想定している。さらに、X から他の項を排除し、“你（あなた）”を選択して文の焦点とする。

(112) x 瞎说。

*x*がでたらめを言っている。

(113) 集合 X:{你, 我, 他, 她, 小李, 老王, ……}

集合 X:{あなた, 私, 彼, 彼女, 李ちゃん, 王さん, ……}

(114) 你=X- {我, 他, 她, 小李, 老王, ……}

あなた=X- {私, 彼, 彼女, 李ちゃん, 王さん, ……}

刘勋宁(2018)は、文法関係を示す新しい演算子を定義している時、接尾辞の付加関係をマイナス記号「-」で表すべきであり、「文法関係の引き算を表す」と指摘している⁴¹。例えば、(115)では、「椅子」という概念には「椅子の上、下、背、中」など各部位が含まれているが、(116)のように、他の不要の部分を書いて注目すべき「上」だけを残して限定する。

(115) 椅子-上(刘勋宁 2018:p.88)

椅子-の上

(116) 椅子上={椅子上, 椅子下, 椅子背, 椅子上, ……}- {椅子下, 椅子背, 椅子上, ……}

*椅子の上={椅子の上, 椅子の下, 椅子の背もたれ, 椅子の中, ……}-
{椅子の下, 椅子の背もたれ, 椅子の中, ……}*

⁴¹ 2019年行った「東京現代中国語研究会」での刘勋宁先生の発表も参考しまとめるものである。

上述の(111)のような“x才y”文は接尾辞ではないが、この理論を用い、(112)～(114)のように分析することが可能であるため、本研究は「文法関係の引き算関係」に当てはまると主張する。即ち、“才”による焦点指向性の本質は、「x(是)y」を成立させることが可能である集合Xの中から、不要な部分を引いて、注目すべき要素だけを残すことである。この「文法関係の引き算」はRooth(1985)が指摘している「一つを選択し、他を排除した場合は焦点となる」という焦点の定義と一致する。Rooth(1985)は焦点の種類について論じていないが、情報の新旧に関わらず、情報の排他性を強調するのは、対比的焦点の特徴であるという福本(2020)などの焦点分類条件によると、“才”の前の部分是对比的焦点であると判断しうる。

以上、副詞“才”の焦点指向に関する分析をまとめると、“x才y”文における“才”は〔+排他〕という意味的な特徴を持ち、焦点指向は左側であり、その本質は焦点を集合Xから抽出する行為であることがわかる。

2.4.2 では、複文である“因为……才”文においても、“才”は同じ役割を担うことを証明する。

2.4.2 “因为……才”文における“才”の意味的指向

2.4.1 では、吕叔湘(1999)が指摘している用法⑤に当てはまる副詞“才”の意味的指向について分析した。吕叔湘(1999)、王群(2005)などの先行研究では、この用法に関する分析は単文である“x才y”に限られているが、本研究は“因为……才”文のような複文の場合も適用されると主張する。その理由は、(117)、(118)に示されるように、“x才y”文を“因为……才”文に言い換えられるからである⁴²。

⁴² 一方、用法①②③など、時間や数量の多さを表す例は、“才”の前後部分であるxとyが因果関係を表していないため、“因为……才”文に言い換えることが難しい。

(1) 都十二点了，他才睡觉。(吕叔湘 1999:p.107)

(117) 这才是好样的！（吕叔湘 1999:p.108）

これこそが見上げた人だ。（拙訳）

(118) 因为你做了这（件事），才是好样的！

あなたがこれを行っているからこそ、見上げた人と評価したのだ。

また、“因为……才”文は“p才q”文に言い換えることも可能である。

(119) 卢嘉川在最后一次见面时就告诉过她，因为出了叛徒，许多同志才被捕的。（日中：《青春之歌》）

卢嘉川と最後に会ったとき、裏切者が出たために、多くの同志が捕またのだといわれたつけ。（日中：『青春の歌』）

(120) 卢嘉川在最后一次见面时就告诉过她，出了叛徒，才使许多同志被捕。

卢嘉川と最後に会ったとき、裏切者が出たことで、多くの同志を逮捕させたのだといわれた。

従って、単文である（117）、（120）と複文である（118）、（119）は同じ論理関係を表しているのではないかと考えられる。即ち、“才”の前後部分である x と y の間に、“因为……才”文の p と q と同じく因果関係を表しているので、交

もう 12 時になって、彼はやっと寝た。（拙訳）

(2) *因为都十二点了，他才睡觉。

*もう十二時になったから、彼はやっと寝たのだ。

替可能である。それゆえ、“因为……才”文における“才”の焦点指向を“x 才 y”文のように、(121) のように表記する。

(121) [p]_F, 才 q

さらに、刘林(2013)も、副詞“才”は因果関係を表すことができると指摘している。(122)はその例である。この例は、“因为……才”文にも言い換えられる。

(122) (因为)这一阵她生病了,才每天在家。(刘林 2013:p.236)

従って、p が“因为……才”文の焦点であるという結論を得た。しかしここで得た結論は、2.3.1 で述べた刘月华·潘文娱·故鞞(2004)、郭继愁(2008)などの主張と以下の2点で大きく異なる。

① p が情報的焦点でなく、対比的焦点と見なすこと

前述のように、情報的焦点は新情報/未知情報に相当すると見なされているが、対比的焦点は情報の新旧に関わらず、他の要素を排除して選択された情報である。

2.4.1 ですでに述べたが、“x 才 y”文の中の x は焦点であるが、その本質は y を成立させることができる要素の集合 X から不要な部分を引いて、注目すべき要素だけを残す行為である。即ち、x は対比的焦点である。それと相応する“因为……才”文も、p は対比的焦点であると認識され、情報の新旧ではなく、q を成立させるか否かに重点を置くべきである。

例えば、(119) では、p である“出了叛徒（裏切者が出た）”は会話双方の共有知識であるか否かに関わらず、話し手にとって、“x_p可以使‘许多同志被捕’成立(x_pは「多くの同志が捕まった」を成立させることができる)”の集合 X_pの中から、他の要素を排除して残したのは p である場合、p は文の焦点であると認識される。たとえこの p は事実でなくても、文の焦点になることは変わらない。

(123) 因为 x_p, 许多同志才被捕的。

x_p のため、多くの同志が捕まったのだといわれた。

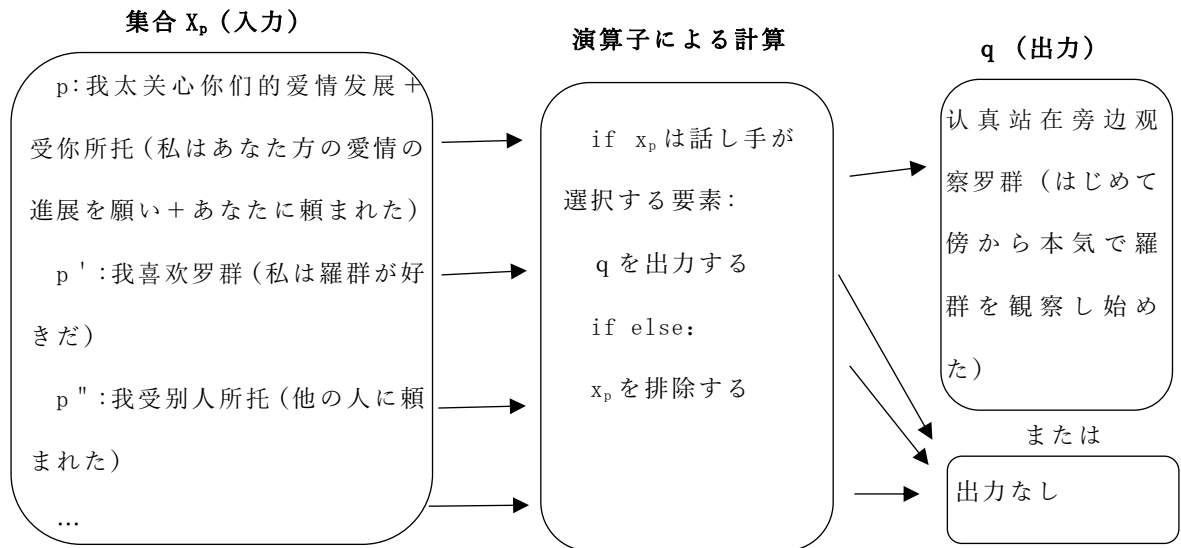
(124) 集合 X_p : {出た叛徒, 敌人太狡猾, 敌人太强大, ……}

集合 X_p : {裏切者が出た, 敵がずるすぎる, 敵が強すぎる, ……}

(125) p = 集合 X_p - {敌人太狡猾, 敌人太强大, ……}

p = 集合 X_p - {敵がずるすぎる, 敵が強すぎる, ……}

② p の情報の新旧は原因節焦点化の条件と認めないこと



【図 4】焦点マーカ－の解釈装置 ((126) を例として)

また、钟小勇・张霖(2013)などは、 p の情報の新旧により、“因为”文の原因節の焦点化可否を決めると主張していることが、2.3.1 ですでに述べた。しかし、2.3 節ですでに分析した通り、“因为”文の原因節を焦点化することができる必要条件是話し手が $p \rightarrow q$ に対する態度であり、 p の情報の新旧とは関係ない。

その理由について、 $p \rightarrow q$ が表しているのは、話し手自らが焦点マーカ－という演算子を用いて、 X_p から p を選択する行為であるため、話し手の賛成的な

態度が必須であると解釈しうる。(126) を例として分析すると、【図 4】のようなアルゴリズムで表現することが可能である。

(126) 我记得我是因为[我太关心你们的爱情发展, 而且是受你委托]_F, 才认真站在旁边观察罗群的。(日中:《天云山传奇》)

[私はあなた方の愛情の進展を願ひ、またあなたに頼まれもした]_F ので、はじめて傍から本気で羅群を観察し始めたことを覚えています。(日中:『天雲山伝奇』)

具体的に解釈すると、話し手が集合 X_p ($=q$ を成立させることが可能である集合) から選択する要素のみ、 q を出力することができ、他の要素は入力しても、“才”などの焦点マーカーにより排除される。このアルゴリズムにより、 p を対比的焦点になることは“才”などの焦点マーカーの意味的機能であると見なされうる。

2.4.3 原因節焦点化の語用論的機能

本節の最後に、焦点マーカーによる原因節焦点化の語用論的機能及びその語用論的機能による文の意味変更について論じる。

まず、2.4.2 で以下の結論を得た。

(127) “因为”文の原因節焦点化の本質は焦点マーカーによって引き算を行い、 p を対比的焦点とすることである。

“因为……才”文の特徴を分析する際に軽く触れたが、“因为”文は原因節の焦点化可否により、①焦点マーカーと共起している文または共起しても文の意味がほとんど変わらない文、②焦点マーカーと共起すると非文になる文、③焦点マーカーと共起すると非文にはならないが文の意味が大きく変更する文の3種類に分けることが可能である。(128) ~ (130) はそれぞれ3種の例である。

その3種の複文は(127)の結論により解釈すると、焦点移動の有無により分類されるものであると理解しうる。

- (128) 凜子只要他“暂时忍耐”，却不多说理由，或许她和先生之间有些纠纷。正因为他自己也在为这件事情忧虑，就在意起刚才衣川略显神秘的口气。(BCC:渡边淳一《失乐园》)

凜子はその理由については触れずに「しばらく我慢する」とだけ言った。夫との間にはなにかあるのかもしれない。彼自身もこの問題を心配していたからこそ、今、衣川のちょっと神妙な口ぶりが気になった。(拙訳)

- (129) 难道这一切都能(*正/*是)因为吴荪甫的「不赞成」就取消了么？(语料:茅盾《子夜》)

吳孫甫が「賛成しない」って言った(*こそ)だけで、これらすべてをキャンセルしてもいいのか。(拙訳)

- (130) 当人们问艾奇逊，他在担任总统期间干了些什么时，他说(？正/？是)因为国会的工作已使他精疲力尽了，所以，他在担任总统期间一直在睡大觉。(语料:《羊城晚报》)

アチソンは大統領の任期中に何をしていたかと尋ねられた時、議会の仕事でもう精魂尽き果てたため、大統領の任期中にずっと寝ていた(*のだ)と言った。(拙訳)

具体的に言うと、①は文の意味や文脈から、pが対比的焦点であることが決まり、焦点マーカーと共起するか否かによる焦点移動がない文である。②はpが対比的焦点として強調すると、文の意味がおかしくなる文である。(129)の場合、qに対する疑いは話し手の真意であると文の意味から判断できるが、原因節焦点化により、焦点をpになると、pのみでqを成立させることに対する

疑いに変更してしまう。③は p が対比的焦点として強調すると、“因为”文自体の意味から解釈可能であるが、q を強調する文脈とつながりにくくなる。

なお、③類の文は原因節が焦点化されたら意味が大きく変わる原因も解釈できるようになった。即ち、原因節を焦点化すると、文の焦点は p に移動し、q を成立させる他の可能性を排除することになる。そのため、③類の文の焦点移動による意味変更は主に以下の 2 点がある。

① 話し手の態度による意味変化

2.3.2.2 で論じたように、原因節焦点化により、焦点を移動される。それによって、話し手が p→q に対する態度を変更し、p が q を成立させることに反論する態度から、支持する態度に変わる。

② p の排他性による意味変化

原因節焦点化により、p を対比的焦点になるため、排他性が生じる。対比的焦点は、排他性という解釈上の条件が満たされる必要がある。すなわち、“因为”文の原因節が焦点化され、p が対比的焦点になると、p が q を成立させる唯一の要素になり、そうでなければ、文の真理値は偽となる。

p の排他性の有無により、以下の (131) は“你是贤内助(あなたはいい妻だ)”のような妻をほめることを強調する文と“我不能干才娶你(私はやり手であればあなたと結婚しない)”のような妻と結婚したくないことを強調する文に分ける。

(131) 因为我不能干, 所以娶你这一位贤内助呀!

私はやり手ではない から、あなたのようないい妻と結婚したよ。

(132) 因为我不能干, 所以娶你这一位贤内助呀! 否则我的日子要怎么过呢? (朱斌等 2013:p.238)

私はやり手ではない から、あなたのようないい妻と結婚したよ。さもなければ私はどうすればいいのか。 (拙訳)

(133) *因为我不能干, 所以娶你这一位贤内助呀! 否则我娶你干嘛呢?

*私はやり手ではないから、あなたのようないい妻と結婚したよ。さもなければなぜあなたと結婚するの？

(134) 正因为我不能干，所以娶你这一位贤内助呀！否则我娶你干嘛呢？

私はやり手ではないからこそ、あなたのようないい妻と結婚したのよ。さもなければなぜあなたと結婚するの？

(135) *正因为我不能干，所以娶你这一位贤内助呀！否则我的日子要怎么过呢？

*私はやり手ではないからこそ、あなたのようないい妻と結婚したのよ。さもなければ私はどうすればいいのか。

(132) ~ (135) の「否则」テスト」による対照例では、焦点マーカールと共起しない文 (132)、(133) と共起する文 (134)、(135) に、p の排他性を強調する文脈と p の排他性を強調しない (q を強調する) 文脈をそれぞれつける。その結果、原因節焦点化の文は原因の排他性を強調することにより、他の原因が q を導く可能性を取り消すという語用論的機能を果たすことがわかる。具体的には、【図 5】と【図 6】に示される。しかしこのような例では、他の原因を取り消すことにより、誤解が生じ、聞き手に怒らせる可能性もある。実際に“因为”文を言う際に、原因節 p を排他的な理由として強調したくない場合、原因節焦点化が用いられず、さもなければコミュニケーションのずれを生む可能性がある。

以上をまとめると、本節では、“因为”文の原因節が焦点化された際の焦点移動について考察した。

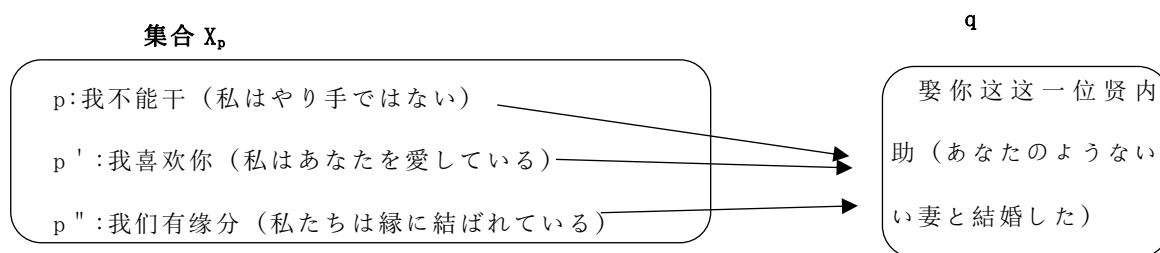
まず、単文である“x 才 y”形式の焦点は“才”の左側にあるという結論を得た。

次に、“因为……才”複文と単文形式である“p 才 q”構文に交替することができるため、単文である“p 才 q”と同じく、焦点は“才”の左側にあると主張した。さらに、“才”の左側にある焦点 p は情報的焦点でなく、対比的焦点であるため、①情報の新旧に関わらず、焦点になれること、②〔+排他〕の 2 点の特徴を持つ

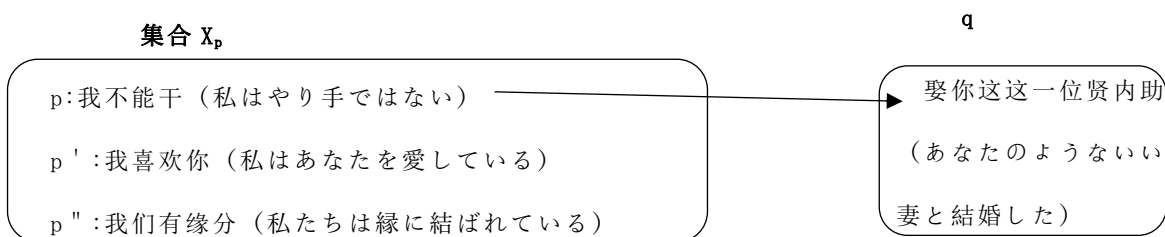
と主張した。そのため、“因为”文の原因節を焦点化する焦点マーカ―の意味的機能を「話し手が集合 X_p (= q を成立させる集合) から選択する要素のみ、 q を出力することができ、他の要素は入力しても、“才”などの焦点マーカ―より排除する」とまとめた。

最後に、原因節焦点化の本質は p を対比的焦点とするため、焦点移動により、 $p \rightarrow q$ が文の前提になる及び p に [+排他] の性質が付くという2点の変化が生じる。それは“因为”文の原因節焦点化有無による意味変化の理由と見なされた。

しかし前も触れたが、焦点マーカ―は本節で論じた必要条件以外に、それぞれの“因为”文との共起条件及び意味的または語用論的機能を持っている。次の2.5では、代表的な焦点マーカ―である“是”、“正”、“才”を考察し、それぞれの特徴と使い分けを明らかにする。



【図 5】原因節を焦点化しない文の p 、 q の関係((132) を例として)



【図 6】原因節を焦点化した文の p 、 q の関係((134) を例として)

2.5 焦点マーカ―の特徴と使い分け

最後に、焦点マーカ―“才”、“是”、“正”のそれぞれの特徴及び使い分けについて論じる。

各焦点マーカ―の焦点移動に対する役割は、ほぼ同じであるが、それぞれの特徴によって併用できない場合や交替不可の場合も散見される。実例によれば、“是”と“才”の共起性がよく、全例共起でき交替も可能である。一方、“正”の場合、全例で“是”と交替できず、“才”と共起できる文とできない文に分けられる。以下、“才”、“是”、“正”における p、q の特徴をそれぞれ分析する。

① “才”の特徴

まず、“因为……才”文に対する観察により、焦点マーカ―“才”の特徴は、ほぼ絞られる。即ち、p が新旧情報に関わらず、p→q が文の前提であるという必要条件を満たし、かつ q が前提である場合、焦点マーカ―“才”が用いられる。

(136)は“正”と共起され、文脈から p、q 共に旧情報であることがわかる。(137)は“是”と共起され、文脈から p が話し手による新情報であることがわかる。

- (136) 董亮也说，“你跟人家还挺好的，背后还总埋汰人家，这样多不好。”
“关系好就不能说说这些事儿了？”赵巧茹理直气壮地辩解道，“正
因为关系好我才这么说她呢。关系要不好想让我说我还不说呢。”
(BCC:高杨《红尘世界》)

「あなたは彼女と仲がいいのに、裏でよく彼女の悪口を言う。それはよくないよ」と董亮が言った。「彼女との仲がいいと悪口は言えないのか。仲がいいからこそ、私はそういったのよ。仲がよくなければ私に言わせても何も言わないよ。」と趙巧如が反論した。(拙訳)

- (137) 虽然他们从未说出口，但我心知肚明，他们是因为你不在，才逼不得已、退而求其次的把总裁宝座传给我。(BCC:左晴雯《就爱你的坏》)

彼らは口に出したことがないが、僕にはわかる。彼らは君がないから、仕方なく、社長の座を僕に譲ったのだ。(拙訳)

② “是”⁴³の特徴

次に、“是”の特徴を観察すると、全例が“因为……才”文に言い換えられ、焦点マーカー“才”と併用することができるため、“才”を用いる必要条件とは同じであると考えうる。今回収集した“是”により原因節を焦点化した“因为”文 50 例のうち、すべての例における q は旧情報を表している。

さらに、“才”と違って、“是”により原因節を焦点化する“因为”文では、p がすべて話し手から提示される新情報である。(138)～(140)はその例である。

- (138) 现在他看到，和他同班的工人都找到了合适的对象，而自己是因为不好好上班，所以得不到姑娘的爱情。(BCC:《人民日报》)

彼は今発見した。仕事場の同僚たちは、みんないい相手を見つけた。
一方、自分は仕事をちゃんとしなかったから、女性が相手にしてくれないのだ。(拙訳)

- (139) 先前，我也曾问过赵太爷的儿子茂才先生，谁料博雅如此公，竟也茫然，但据结论说，是因为陈独秀办了《新青年》提倡洋字，所以国粹沦亡，无可查考了。(日中:《呐喊》)

以前私は、趙旦那の息子の茂才先生(茂才は秀才の別称)に問い合わせてみたことがある。ところがあの博識高雅なお方にさえ、結局見当がつかなかった。ただそのときの結論によると、陳独秀が『新青年』を出して、外国の文字を奨励したために、国粹は亡びてしまって、考証のしようもない、ということだった。(日中:『呐喊』)

- (140) 那是因为当年有座庞大的地安门，五十年代初将它拆除了，修成十字路口，所以成了这样。(日中:《钟鼓楼》)

⁴³ 本研究では、“正是”、“就是”など、「他の焦点化副詞+是」のような形式を“是”による焦点化と認めない。“是”のみを用いる文を研究対象とする。

地安門の交叉点のところは、なんとなく、だだっぴろい。もと、そこには大きな構えの地安門があった。五〇年代のはじめ、それをとりこわして十字路にしたのだ。(日中:『鐘鼓楼』)

“是不是因为”、“是因为……吗”など q を成立させる要素を話し手から持ち出し、質問する構文形式も散見される。これも“是”が話し手から持ち出された内容であるから、成立すると考えうる。

(141) “可是妈妈并不十分爱我。……叔叔，是不是因为妈妈讨厌爸爸，也就不喜欢我了呢？……”(日中:《人啊，人》)

「だけど、お母さんはあたしを心から愛してくれていないわ。…おじさん、お母さんはお父さんが嫌いだから、それであたしも好きでなくなったのね？…」(日中:『ああ、人間よ』)

③ “正”の特徴

また、“正”により焦点化された用例を考察すると、焦点マーカ―“才”と併用される文と併用されない文はそれぞれ 27 と 23 あり、どちらも一定数が見受けられる。p、q が表す情報の新旧からみると、“才”と併用される文の q はすべて既知であり、併用されない文の q はすべて未知である。一方、“才”との併用可否に関わらず、全例における p は既知情報を表す。(142) と (143) はそれぞれ“才”と併用される例と併用されない例である。

(142) 她只会在我面前撒娇，真正遇到事儿，什么有用的主意也拿不出来。这一点，孙悦比她强多了。也正因为这一点，她才会成为我的妻子。(日中:《人啊，人》)

彼女はわしの前でしなを作ることは知っているが、肝心な時になんの知恵もはたらかぬ。その点、孫悦に遠く及ばぬ。また、だからこそわしの妻になったのだ。(日中:『ああ、人間よ』)

- (143) 我羡慕你们这一代年轻人……可是也正因为你们和历史的联系不多的缘故吧，你们(？才)不大懂得历史的真实的分量，你们有点看轻它了！(日中：《人啊，人》)

ぼくは君ら若い世代がうらやましい。…しかし一方では、歴史との関係がうすいからだろう、歴史のほんとうの重みがよく分からず、軽視するくらいがある(？のだ)。(日中：『ああ、人間よ』)

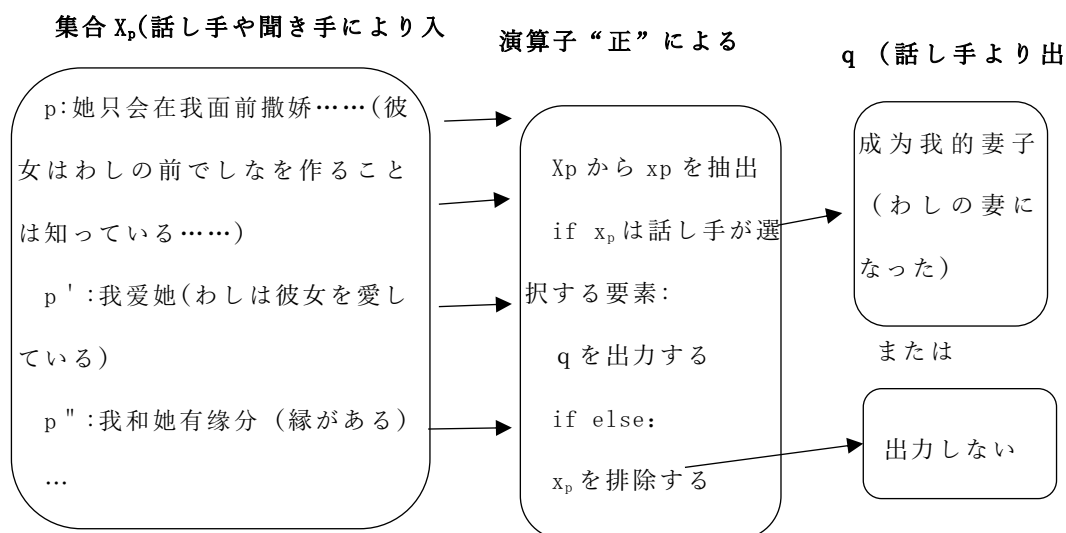
さらに、“是”との交替可否について、基本的には、“是”に言い換えられない。その理由は前述のように、“是”と共起する“因为”文における p は話し手が新しく提示する新情報を表す一方、“正”と共起する“因为”文における p は必ず文脈による旧情報や一般常識を表すためである。そのため、(144) に示すように、“是”と共起する“因为”文は聞き手が提示する理由に対する反論を表すことができるが、“正”と共起する“因为”文はこのような用法がない。

- (144) (= (77)) 张金发不高兴了：“我认为一条一条，一字一字，挺妥当，挺全面。”高大泉不客气地指出：“(是/？正)因为你思想已经落后，一脑瓜子奔个人小日子的巧打算，钻到旮旯里出不来，才这样认为。”
(日中：『金光大道』)

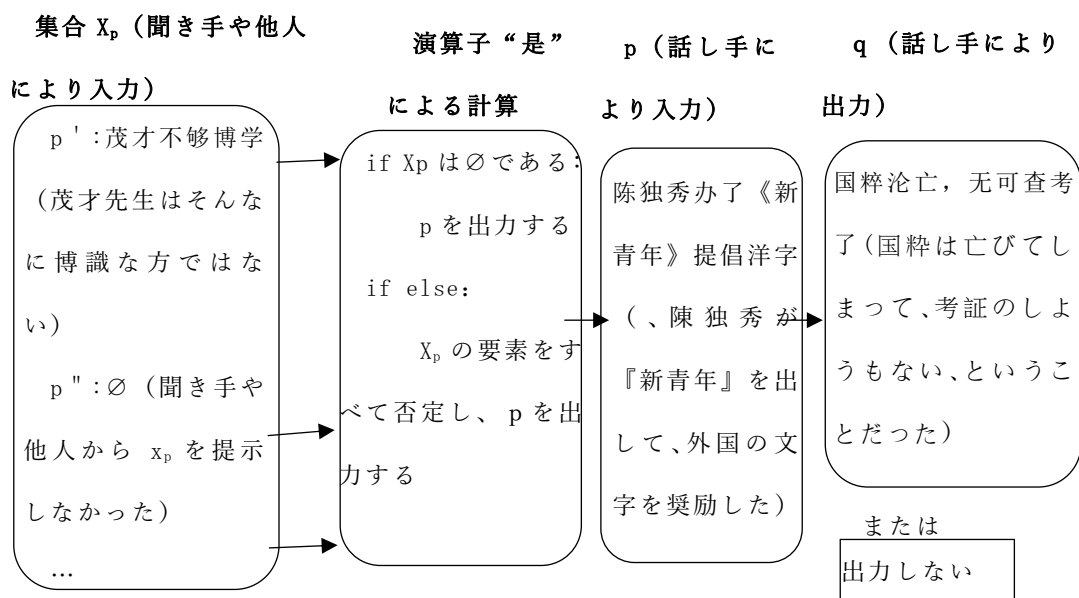
張金發は面白くない。「おれはどれもこれも、適当だし、全面的だと思うがな」高大泉は遠慮しなかった。「あんたは思想が遅れて、個人のちっぽけな暮らしにうつつをぬかし、片隅にばかり頭を突っこんでるからそう思うんだよ」(日中：『輝ける道』)

“是”と“正”の区別について、【図 7】、【図 8】に示されたように、“正”は、話し手が聞き手から提示される x_p を認めた上で、それを対比的焦点とし、排他性を付与する計算過程を示す。一方、“是”の場合、話し手が聞き手や一般常識な

ど他の人が提示する X_p をすべて否定した上で、自ら p を対比的焦点として提示する。



【図 7】(142) の焦点化過程と意味



【図 8】(139) の焦点化過程と意味

特に、相手は自分の観点を提示しなかった場合、“是”を用いることもできる。そのため、“因为 p”が“为什么（なぜ）”の答えになる時、“是”により焦点化することが一般的である。

なお、“正是因为”というような“正”、“是”が共起する用法もあるが、本研究ではそれを“正因为 p”構文と同じ意味を表すと見なすべきであると主張する。その理由は、以下の(145)を(146)、(147)のようにそれぞれ“正”、“是”と共起する文に言い換えると、(146)のみが成立するためである。

(145) 我爱孩子, 我爱孩子, 我爱孩子! 正是因为爱, 我才必须和她离婚。
(日中:《活动变人形》)

子供は可愛い、愛してますとも!たからこそ、私は妻と離婚するんです。
(日中:『応報』)

(146) 我爱孩子, 我爱孩子, 我爱孩子! 正因为爱, 我才必须和她离婚。

(147) *我爱孩子, 我爱孩子, 我爱孩子! 是因为爱, 我才必须和她离婚。

本節の分析をまとめると、“因为”文の原因節を焦点化する焦点マーカ―“才”、“是”、“正”の使用条件について、以下の4点をまとめる。

- ① 焦点マーカ―“才”、“是”、“正”を使用する共通的な条件は、 $p \rightarrow q$ が文の前提となることである。
- ② 焦点マーカ―“才”を共起する“因为”文のすべてはqが前提となる文である。
- ③ 焦点マーカ―“是”を共起する“因为”文のすべてはqが前提となる文であり、さらにpは話し手が提示する内容に限られる。
- ④ 焦点マーカ―“正”を共起する“因为”文のすべてはpが聞き手や文脈により既に提示した内容に限られる。

2.6 本章のまとめ

本章では、“因为”文の原因節焦点化について考察し、①“因为”文の原因節を焦点化する条件、②“因为”文の原因節焦点化による焦点移動及び③焦点マーカ－の使い分けの3点を解釈した。

具体的に、2.2 では、“因为”文の原因節を焦点化する焦点マーカ－を絞り込み、研究対象を確定した。

2.3 では、①の問題点を解決するため、焦点マーカ－“才”により焦点化された文“因为……才”文を中心に、 p 、 q または $p \rightarrow q$ の特徴を考察し、“因为”文の原因節が焦点化される条件は $p \rightarrow q$ が文の前提であるとまとめた。

2.4 では、②の問題点を解決するため、焦点マーカ－“才”の意味的指向を考察した上で、複文である“因为……才”文を単文形式の“ p 才 q ”文に言い換え、 p が対比的焦点であり、原因節焦点化の本質は q を成立させることが可能である集合 X_p の中で p を抽出し、対比的焦点となることであるという結論を得た。そのため、一般“因为”文のうち、原因節焦点化により、 p が対比的焦点になる文の意味変化が生じ、コミュニケーションのずれを生むことも解釈できた。

2.5 では、③の問題点を解決するため、焦点マーカ－“才”、“是”、“正”と“因为”文を共起するそれぞれの必要条件を分析し、特に“是”と“正”の区別を明らかにした。

なお、第1章でもすでに触れたが、“因为……才”文は反事実“如果”文と交替可能であるので、“因为……才”文の焦点を明らかにしたのは、反事実“如果”文の焦点確定にも役に立つと考える。具体的な分析は第3章にする。

第3章 反事実“如果”文の焦点と語用論的表現⁴⁴

本章では、第2章で考察した“因为……才”文との対照分析を行いながら、反事実“如果”文の焦点について考察を行う。なお、各種の反事実“如果”文の焦点及び会話の含意の違いによる文の多義性についても分析する。

3.1 はじめに

“如果”文は、中国語における假定複文の代表的な文型であり、代表的な構文形式は“如果 p, 就 q”である。(148) に示されたように、“如果”文は一般的に、ある種の状況を假定する前節 p、假定された状況が実現された際の結果を述べる後節 q 及び関連詞により構成されている。p は仮定的な原因を説明し、q はそれによって生じた結果を説明する。假定節 p を導く関連詞は“如果”、“要是”などがあり、結果節 q を導く関連詞は“就”、“那么”などがある(鳥井 2004、王 2010 など)。

(148) 如果 我去, 他就 会去。(鳥井 2004:p.80)
| 関連詞 | | p | | 関連詞 | | q | |
もし私が行ったら、彼は行くだろう。(鳥井 2004:p.80)

“如果”文の位置付けについて、第1章ですでに述べたが、「複文二分系統」説と「複文三分系統」説に分けられている。本研究では、「複文三分系統」説に従って、“如果”文を“因为”文、“既然”文と同じ上位分類に分類し、「因果文」の1種とする。なお、黎錦熙(1924)、鳥井(2004)など「複文二分系統」説を支持している研究も、“如果”文の p、q の意味的關係が仮定的な因果關係を表していると指摘している⁴⁵。

“如果”文の分類について、(149) と (150) のように、「事実文」と「反事実文」の2種類がある。そのうち、反事実文は、前節 p が偽であることを話し手

⁴⁴ 本章は王芸嫻(2017)を加筆修正したものである。

⁴⁵ 黎錦熙(1924:p. 248)、鳥井(2004:p. 89)を参照。

に認識された文である。例えば、(150) では、話し手は p である“她真的坐了火车（彼女は本当に電車に乗った）”が偽であると主張している。

(149) 如果她坐火车, 那么她就会准时到达。(袁毓林等 2016:p.130)

もし彼女が電車に乗ったら, 時間通りに到着するだろう。(拙訳)

(150) 如果她真的坐了火车, 那么她就不会迟到了。(袁毓林等 2016:p.130)

もし彼女が本当に電車に乗っていたら, 遅刻しなかったのに。(拙訳)

英語の反事実条件文に関する研究の影響を受け、中国語における反事実仮定文（以降は反事実“如果”文とする）に関する研究では、 \neg ⁴⁶ p を文の前提とされているのが一般的である（藍純 1999、丁爱群 2006、李艳洵 2006 など）。例えば、(150) では、 \neg p である“她没坐火车（彼女は電車に乗っていなかった）”はすでに発生した事実であり、会話双方の共有知識であるとされている。

しかしながら、反事実“如果”文の中で、(151) と (152) のような、 \neg p が前提でない例も散見される。

(151) 要是他能当班长, 母猪也能上树！（李艳洵 2006:p.154）

もし彼が班長になれば, 雌の豚も木に登ることができるだろう。(拙訳)

(152) 没啥意思, 说说罢了。如果我的每条微博都有用意, 那就该去死。

(BCC)

別に何の意味もないよ。もしすべてのつぶやきに意味があるのなら, 私は死ぬべきだろう。(拙訳)

⁴⁶ 本稿では、「 \neg 」は否定記号とし、p が偽であること（＝話し手の Reality のスペースにおいて命題 p が成立しないこと）を示す。樋口(1989:p. 1)を参照。

なお、第1章で触れたように、(153)、(154)のような反事実“如果”文が“因为……才”文と言い換えることが可能であるが、それができるのは一部の反事実“如果”文に限られている。

(153) 如果不是在 19 世纪中期发现了电磁感应现象, 就不会有发电机、电动机。(李晋霞 2010:p.53)

もし電磁誘導が 19 世紀半ばに発見されなかつたら、発電機も電動機もないだろう。(拙訳)

(154) 正因为在 19 世纪中期发现了电磁感应现象, 才有发电机、电动机。(李晋霞 2010:p.53)

電磁誘導が 19 世紀半ばに発見されたからこそ、発電機も電動機も発明されたのだ。(拙訳)

(152) のような交替できない例も存在する。

(155) *没啥意思, 说说罢了。正因为不是我的每条微博都有用意, 我才不该去死。

*別に何の意味もないよ。すべてのつぶやきに意味があるわけではないから、私は死ぬべきでないのだ。

本研究では、反事実“如果”文と“因为……才”文の交替可否は前提と焦点に影響されるという仮説を提示する。その仮説が成立すると、反事実“如果”文は焦点の位置により少なくとも2種に分けられるべきである。さらに、焦点の位置の相違により、一つの文に対する解釈が異なることもあると考えられる。

そこで、反事実“如果”文の前提と焦点を明らかにするために、本章では、第2章で得られた結論に基づき、“因为……才”文と比較しながら反事実“如果”文の前提と焦点を確定し、その前提と焦点の差異に生まれる文の多義性について分析する。

次の各節では、まず先行研究をまとめた上で反事実“如果”文の定義と特徴を再考察し、問題点を提示する。また、“因为……才”文と比較しながら反事実“如果”文の前提と焦点に関する分析を行い、最後に反事実“如果”文の意味における多義性について触れる。

3.2 先行研究及び問題点

反事実“如果”文の前提と焦点を分析する前に、まず中国語における反事実“如果”文の定義及び特徴についてまとめ、前提と焦点に関する先行研究の問題点を示す。

3.2.1 反事実“如果”文の表現形式に関する問題点

中国語における反事実仮定文は、李萌(2013)、袁毓林(2015)、王芳(2015)などに示されるように、反事実的な条件を示す仮定節 p とそれに相応する結果節 q に構成される複文であると定義されている。

例えば、(156) は、“如果”文でありながら、p で表されている内容“没有抗菌素”（薬の助けがなかった）を話し手が偽であると認識しているものである。このような文は、反事実“如果”文と認識されている。

(156) 如果没有抗菌素, 或许我的生命就不会延续到今天。(日中:《轮椅上的梦》)

薬の助けがなければ, 私の命は今日まで持たなかったのではないだろうか?(日中:『車椅子の上の夢』)

反事実“如果”文は、英語の反事実条件文「If p, q」とよく対訳されているので、先行研究において「反事実条件句（反事実条件文）」と呼ばれることもよく見られる(陈国华 1988、蒋严 2000、王芳 2015、章敏 2016 など)。

しかし、反事実“如果”文と英語の反事実条件文は反事実を示すマーカーについて、大きな相違点が存在する。

反事実を示す英語においては、(157)と(158)に示すように、時制をずらして反事実文であることを表すのが一般的である。即ち、pでは過去形を用いて現在を表し、過去完了形を用いて過去を表す。それに相応し、qではそれぞれ過去未来形、過去未来完了形を用いる。

(157) If she *had taken* the train, she *would have arrived* on time. (袁毓林等 2016:p.130)

(158) If I *were* a bird, I *could fly* to you. (坂口 2014:p.77)

一方、中国語においては、時制がないため、英語のような反事実文を表す手段もない。そのため、Bloom(1981)は、中国語に反事実であることを示すマーカーが存在しないと主張している⁴⁷。本研究でも、中国語には、「事実文」と「反事実文」において形態的区別がないため、語用論的に理解のずれがあると主張している。その理由について、以下、具体的に分析する。

中国語における反事実を示すマーカーの存在を主張している先行研究は陈国华(1988)、袁毓林(2015)などがある。陈国华(1988)は、q節の文末における“了”やp節の中に現れ、時間を表す副詞“早”、“当时”などが、反事実を示すマーカーの役割を担うと主張している。

(159) 早听我的话, 你就不会出这么多错了。(陈国华 1988:p.11)

もっと早く私の言葉を聞いていたら、こんなに間違ったことをせずに済んだのに。(拙訳)

(160) 要是他们当时问我, 我就得说了。(陈国华 1988:p.12)

その時彼らが私に尋ねていたら、ちゃんと自分の意見を言ったのに。
(拙訳)

⁴⁷ Bloom(1981:p. 16)を参照。

また、袁毓林(2015)では、中国語の古文の中に、反事実表現と反事実を示すマーカーはすでに存在すると指摘している。(161)の“微”はその一例である。

(161) 吳王曰：“微子之言，吾亦疑之。”(袁毓林 2015:《史记·伍子胥列传》)

あなたが言わなければ、私も疑ってしまっただろうと呉王が言った。(拙訳)

現代文について、袁毓林(2015)は、“如果(不是)”、“要(不)是”、“若(不)是(因为)”など、反事実文によくみられる「仮定を表す関連語句+(不)是」という構文形式が反事実を示すマーカーであると述べている。

ところが、時制をずらすという英語における手段より、中国語におけるマーカーは反事実を示す能力が弱く、なくても文を反事実として認識することが可能な例が散見される。例えば(159)のマーカーである“早”と“了”を省略しても、文の意味がほとんど変わらず、反事実文と判断される。

(162) 听我的话，你就不会出这么多错。

私の言葉を聞いていたら、こんなに間違ったことをせずに済んだのに。

そのため、中国語では、文脈がなければ、一つの文を事実文としても、反事実文としても解釈可能な例が散見される。例えば、(163)の場合、すでにペナルティキックを外したと考えられるし、ペナルティキックを蹴ろうとする時の話としても理解できる。前者は反事実文であり、後者は事実文である。

(163) 如果巴治奥踢进了那个点球，意大利队就可以进入半决赛。(蒋严 2000:p.267)

もしバジジョ選手がああのペナルティキックを決めていたら、イタリア代表が準決勝まで進出したのに。もしバジジョ選手がああのペナルティキックを決めたら、イタリア代表が準決勝に進出することができる。(拙訳)

さらに、明確な反事実を示すマーカーがないため、p、qが反事実の内容を表すか否かに対する判断は、文脈や意味による推論に頼るものになる。その推論により、文が反事実であるか否かだけでなく、反事実“如果”文でありながら、p、qのどちらが強調されるかなど、言い換えれば反事実“如果”文の前提、焦点などの相違も生じ、詳しく分析する必要がある。

3.2.2 反事実“如果”文の前提と焦点に関する問題点

3.1ですでに述べたように、反事実“如果”文は、明確な反事実マーカーがないため、前提と焦点に対する判断は英語の反事実文より難しい。具体的に言うと、Levinson(1983)などの英語研究者が英語の反事実条件文「If p, q」を前提トリガー (presupposition-trigger) ⁴⁸と認識し、時制により、pが偽であることを会話双方に共有され、それを反事実条件文の前提とすると指摘している⁴⁹。例えば、(164)の前提が $\neg p$ (=pが偽であること)の“Madame Bovary did not have married a better man (ボヴァリー夫人はもっといい人と結婚しなかった)”である。

- (164) If only Madame Bovary had married a better man, she would have been happier. (袁毓林等 2016:p.3)

反事実“如果”文は「If p, q」文とよく対訳されているため、藍纯(1999)、丁爱群(2006)、李艳洵(2006)など、数多くの中国語の先行研究は反事実“如果”文の前提も $\neg p$ であると主張している。例えば(165)の前提は $\neg p$ の“当时没有打起来(あの時は戦っていなかった)”である。

- (165) 如果当时真的打起来, 还不知是谁的天下。(李艳洵 2006:p.153)

⁴⁸ 前提を引き起こす単語や構文構造は、前提トリガーと呼ばれている。(富永 2012:p.9)

⁴⁹ Levinson(1983)、何兆熊(2000)、富永(2012)などを参照。

あの時本当に戦って**いたら**、今では誰の天下になっていたのかはわからない。(拙訳)

しかし、前述のように、(166) と (167) のような反例が散見される。

(166) (= (151)) **要是**他能当班长, 母猪也能上树!

もし彼が**班長**になれば、**雌**の豚も木に登ることができるだろう。(拙訳)

(167) (= (152)) 没啥意思, 说说罢了。 **如果**我的每条微博都有用意, **那**就该去死。

別に何の意味もないよ。**もし**すべてのつぶやきに意味があるの**なら**、私は死ぬべきだろう。(拙訳)

(166) と (167) において、 $\neg p$ はそれぞれ“他不能当班长 (彼は班長にならない)”と“不是我的每条微博都有用意 (私のすべてのつぶやきに意味があるのではない)”である。文の意味や“没啥意思 (別に何の意味もないよ)”のような文脈から、 $\neg p$ は会話双方の共有知識ではなく、話し手が強調したいものであると判断されやすい。即ち、このような反事実“如果”文の $\neg p$ は前提でなく、焦点である可能性が高い。従って、反事実“如果”文は少なくとも英語の反事実条件文と同じく $\neg p$ を前提とする文と (166)、(167) のような $\neg p$ は前提でない文に分けられる。

李晋霞(2010)も、強調部分の相違に注目し、反事実“如果”文を以下の3種類に分けている⁵⁰。

I. $\neg p$ を強調する文

⁵⁰ 李晋霞(2010)では、反事実“如果”文を「論理的な推論を表す類」と「論理的な推論を表さない類」に分けられているが、「論理的な推論を表さない類」は反事実“如果”文に属すべきか否かに関して、まだ論争が存在するため、今回の研究対象から外すことにした。

- (168) (= (153)) 如果不是在 19 世纪中期发现了电磁感应现象, 就不会有发电机、电动机。(李晋霞 2010:p.53)

もし電磁誘導が 19 世紀半ばに発見されなかつたら、発電機も電動機もないだろう。(拙訳)

II. $\neg p$ を肯定する文

- (169) 如果他能通过, 太阳就从西边出来了。(李晋霞 2010:p.54)

もしあの人が合格できるのなら、太陽も西から昇るだろう。(拙訳)

III. q を否定する文

- (170) 如果太阳从西边出来, 我就答应你。(李晋霞 2010:p.54)

もし太陽が西から昇れば、私はあなたと約束するよ。(拙訳)

また、I 類に属する (168) は、(171) のような“因为……才”文に言い換えられると指摘している。

- (171) (= (154)) 正因为 19 世纪中期发现了电磁感应现象, 才有发电机、电动机。

電磁誘導が 19 世紀半ばに発見されたからこそ、発電機も電動機もあるのだ。(拙訳)

しかし、この分類について、以下の 2 つの問題点がある。

まず、I 類「 $\neg p$ を強調する文」と II 類「 $\neg p$ を肯定する文」の区別がわかりにくい。

李晋霞(2010)は、II 類について、(169) のほかに、(172) と (173) の 2 例も挙げている。文の意味から判断すると、(169) では、 $\neg p$ である“他不能通过(あの人は合格できない)”を主張するのは話し手の目的であるが、(172) と

(173) では、p である“（朱升）有伯乐，有知遇之人（〔朱昇は〕伯楽のような人から知遇を受けた）”と“作者（孫武）有上述思维能力（著者〔の孫武〕が上記の論理的思考力を持っている）”は一般常識と見なされるため、話し手の主張ではなく、会話双方の共有知識として認識されやすい。

(172) 如果没有伯乐、没有知遇之人，那么，历史上也就没有“高筑墙、广积粮、缓称王”这句话了。（李晋霞 2010:p.54）

もし伯楽のような人から知遇を受けなければ、歴史上に「城壁を高く設け、食糧を広く集め、ゆっくり王を称するように」という言葉もなくなってしまうだろう。（拙訳）

(173) 如果作者没有上述逻辑思维能力，《孙子》的产生和传播是不可想象的。（李晋霞 2010:p.54）

著者が上記の論理的思考力を持っていなければ、『孫子』の誕生と普及は想像できないだろう。（拙訳）

また、“因为……才”文との交替性からみると、(172)、(173) は I 類に属する(168)と同様に、“因为才”文に言い換えることができ、(174)、(175)になる。一方、(169)は、(176)に示した通り、“因为……才”文に言い換えると非文になる。即ち、(169)と(172)、(173)は前提と焦点が一致せず、別々の種類に属す可能性が高い。

(174) 正因为有伯乐、有知遇之人，历史上才有“高筑墙、广积粮、缓称王”这句话。

伯楽のような人から知遇を受けたからこそ、歴史上「城壁を高く設け、食糧を広く集め、ゆっくり王を称するように」という言葉が存在するのだ。

(175) 正因为作者有上述逻辑思维能力，《孙子》才能够产生和传播。

著者が上記の論理的思考力を持っているからこそ、『孫子』の誕生も普及もできたのだ。

(176) *正因为他不能通过, 太阳才不从西边出来。

*あの人が合格できないからこそ、太陽は西から昇らないのだ。

さらに、(168) の $\neg p$ である“19 世纪中期发现了电磁感应现象 (19 世紀半ばに電磁誘導が発見された)”が一般常識であるため、会話双方の共有知識と認識されやすい。話し手がその共有知識である $\neg p$ を強調する理由も再検討する必要がある。

なお、“因为……才”文との交替可否について、反事実“如果”文は上述の i) 交替することもでき、言い換えても文の意味もほとんど変わらない文 (例 (168)) と ii) 言い換えれば非文になる文 (例 (169)) のほかに、iii) 言い換えても非文にはならないが、意味が大きく変わり、文脈や常識からみるとやや不自然感が生じる文も散見される。(177) はその例である。

(177) 你要是踩上去, 准会滑倒。(伊藤 2007:p.37)

もし(その石を)踏んだら、きっと滑って転ぶだろう。(伊藤 2007:p.37)

(178) ?正因为你没有踩上去, 才没有滑倒。

? (その石を)踏んでいなかったからこそ、滑って転んでいないのだ。

語感からみると、(177) は「もう少しで滑って転ぶところだった」という q の可能性を強調する文である一方、(178) は (177) の $\neg p$ である「没有踩上去 (踏んでいなかった)」が $\neg q$ である“没有滑倒 (滑って転んでいなかった)”を成立させる重要性を強調する文である。このような文は、 q の可能性を強調する意味と $\neg p$ が $\neg q$ を成立させる重要条件であることを強調する意味に理解されることによって、文の意味の多義性が生じてくる。この多義性が生じる理由

についても、本章では前提、焦点の違い及びそれに生じる会話の含意⁵¹によって解釈する。

以上をまとめると、中国語は形態的に乏しいので、明確な反事実を示すマーカーがなく、p、q が反事実の内容を表すか否かについて判断しにくいいため、文脈や文の意味に対する判断により、理解のずれが生じる。その理解のずれを回避または活用するために、反事実文の分類と各種の反事実文の前提と焦点を明確にする必要がある。

さらに、李晋霞(2010)による反事実“如果”文の分類に基づき、“因为……才”文との交替可能性により、反事実“如果”文を3種に分け、その分類は焦点の位置の違いによるものであるという仮説を提示した。

次節から、“因为……才”文との交替により分類された反事実“如果”文の前提と焦点に関する考察を行う。

3.3 “因为……才”文との交替性による焦点分析

本節では、“因为……才”文との交替性によって、反事実“如果”文を以下の3種類に分けて、前提と焦点について論じる。

i) “因为……才”文に言い換えられても、文の意味はほとんど変わらない文
即ち、“如果 p, 就 q”=“因为 \neg p, 才 \neg q”

ii) “因为……才”文に言い換えられると、非文になる文
即ち、“如果 p, 就 q” \Rightarrow *“因为 \neg p, 才 \neg q”

iii) “因为……才”文に言い換えられると、非文にはならないが、意味が大きく変わり、文脈や常識によりやや不自然になる文

即ち、“如果 p, 就 q” \neq “因为 \neg p, 才 \neg q”

先行研究や BCC などのコーパスから収集した実例 200 例を考察すると、i 類～iii 類の用例数はそれぞれ 78、59、63 であり、どちらも一定数がある。

⁵¹ 会話の含意という概念について、3.4.1 を参照。

なお、3.2.2でも少し触れたが、“因为……才”との交替性による分類は文の意味や文脈からの判断による分類とほぼ一致する。その理由について、本論文は反事実“如果”文と“因为……才”文の交替可能性が焦点の位置によって決定され、焦点が一致する文が交替できるという仮説を提案し、次の節で検証する。

“因为……才”文との対照分析を行う理由は、李晋霞(2010)が指摘している両複文の交替可能性のほか、第2章ですでに論じたように、“因为……才”文は必ず p という対比的焦点を持ち、対照分析を行いやすいという特徴も一つの要因とする。

3.3.1 ライテストによる前提と情報的焦点に関する考察

まず、反事実“如果”文を p、q に分けて、ライテストを用いて、前提と情報的焦点を検証する。具体的には、(179)に示すように、B1では、“不是这样的，p(違う、pである)”を用い、反事実を表す $\neg p$ は前提であるか否かを検証する。また、B2では、“不是这样的， $\neg q$ (違う、 $\neg q$ である)”を用い、話し手が主張する結果 q が前提であるか否かを検証する。

- (179) A: 如果 p, 就 q
$\neg p$ が前提であるかどうかを検証する。
B1: 不是这样的, p。
違う。 $\neg p$ だ。
$\neg p$ が前提であるかどうかを検証する。
B2: 不是这样的, $\neg q$ 。
違う。 $\neg q$ だ。

検証に用いる例文は、i類に属する(180)及び(182)、ii類に属する(184)及び(186)、iii類に属する(188)及び(190)である。

- (180) 如果当时马谡听从王平的劝告，街亭之战恐怕将是另外一番结局了。
(李晋霞 2010:李炳彦等《说三国话权谋》)

もしあの時、馬謖が王平の忠告に従っていたら、街亭の戦いは別の結末になっただろう。(拙訳)

- (181) 正因为当时马谡没有听从王平的劝告，街亭之战才没有成为另一番结局。

あの時、馬謖が王平の忠告に従わなかったからこそ、街亭の戦いは別の結末にならなかったのだ。

- (182) 孩子，咱们要是不抓小动物，那吃什么呀？(伊藤 2007:郭楚海《虎皮儿》)

おばかさん、私たちが小動物を捕まえないなら、何を食べるというのか。
(伊藤 2007:p.38)

- (183) 孩子，正因为咱们抓小动物，才有吃的。

おばかさん、私たちが小動物を捕まえるからこそ、食料を確保できるのだ。

- (184) (= (169)) 要是他能通过，太阳就从西边出来了。

あの人合格できるなら、太陽も西から昇るだろう。(拙訳)

- (185) *正因为他不能通过，太阳才不从西边出来。

*あの人合格できないからこそ、太陽は西から昇らないのだ。

- (186) 这一点我寿二爷要是看错了，张字倒过念，眼睛扒出来让你们当泡踩！（日中：《金光大道》）

このおれさまのいうことがあたんなかつたら、おれの苗字の張の字をさかさ
さに読もうが、目ん玉ほじくりだして踏みつぶそうが文句は言わないよ。
(日中:『輝ける道』・修正あり⁵²)

- (187) *这一点我寿二爷正因为没看错, 所以张字才不倒过念, 眼睛才不扒
出来让你们当泡踩!

*このおれさまのいうことが当たったからこそ、おれの苗字の張の字をさ
かさに読まなくていいし、目ん玉ほじくりだして踏みつぶさせなかったの
だ。

- (188) 如果不是亲眼看到, 他们谁也不会相信。(伊藤 2007:杜鸿《一个白痴
统治的村庄》))

もし実際に目で見なければ、彼らはだれも信じないだろう。(伊藤
2007:p.38)

- (189) ? 正因为亲眼看到了, 他们才相信。

? 実際に目を見たからこそ、彼らは信じたのだ。

- (190) 如果我多少成熟一些, 我会知趣地走开。可是我是如此珍视自己和
她相处的每分每秒, 根本就没想过主动离去。(伊藤 2007:王朔《动物
凶猛》))

もし私がいくらもう少し成熟していたら、私は物知り顔に離れただろう
が、私は彼女と一緒にいる時間の毎分毎秒をこのように貴重に思ってい
たので、全然自分から離れることは考えなかった。(伊藤 2007:p.35)

⁵² 主語をわかりやすくするように、「文句はねえ」を「文句は言わない」に
書き直した。以下も同じ。

(191) ? 正因为我不够成熟，所以我才没有知趣地走开。可是我是如此珍视自己和她相处的每分每秒，根本就没有想过主动离去。‘

? 私が未熟しているからこそ、物知り顔に離れることをしないのだが、私は彼女と一緒にいる時間の毎分毎秒をこのように貴重に思っていたので、全然自分から離れることは考えなかった。

以下、この6例に対する対照分析によって、i類、ii類とiii類に属する反事実“如果”文の前提部分と前提でない部分を明らかにする。

3.3.1.1 $\neg p$ に関する考察

まず、 $\neg p$ が前提であるか否かについて、ライテストで検証する。具体的な方法は、①pを否定し、話し手がRealityのスペース⁵³で真であると認識する $\neg p$ を得る。②ライテストを用いて、その $\neg p$ を否定し、“不是这样的，p。(違う、Pである。)”という文を得る。③その文の成立可否によって、 $\neg p$ が前提であるか否かを判断する。テストの結果は以下の(192)～(197)に示す。

(192) A:(=(180))如果当时马谡听从王平的劝告，街亭之战恐怕将是另外一番结局了。

B1:*不是这样的，当时马谡听从了王平的劝告。

A:もしあの時、馬謖が王平の忠告に従っていたら、街亭の戦いは別の結末になっただろう。

B1:*違う、あの時、馬謖は王平の忠告に従ったのだ。

(193) A:(=(182))孩子，咱们要是不抓小动物，那吃什么呀？

B1:*不是这样的，咱们不抓小动物。

⁵³ 樋口(1989:p.1)では、英語の反事実条件文“If p, q”の前節pが偽であることは話者のRealityのスペース(親スペース)において命題pが成立しないことと解釈されている。本研究もこの用語を援用する。

A:おばかさん、私たちが小動物を捕まえないなら、何を食べるというのか。

B1:*違う、私たちは小動物を捕まえないの。

(194) A:(=(184))要是他能通过，太阳就从西边出来了。

B1:不是这样的，他能通过。

A:あの方が合格できるのなら、太陽も西から昇るだろう。

B1:違う、あの方は合格できるの。

(195) A:(=(186))这一点我寿二爷要是看错了，张字倒过念，眼睛扒出来让你们当泡踩！

B1:不是这样的，你看错了。

A:このおれさまのいうことがあんなかつたら、おれの苗字の張の字をさかさに読もうが、目ん玉ほじくりだして踏みつぶそうが文句はねえよ。

B1:違う、当たらなかったの。

(196) (= (188)) A:如果他们不是亲眼看到，他们谁也不会相信。

B1:*不，他们没有亲眼看到。

A:もし実際に目で見なければ、彼らはだれも信じないだろう。

B1:*違う、彼らは実際に目でみなかった。

(197) (= (190)) A:如果我多少成熟一些，我会知趣地走开。可是我是如此珍视自己和她相处的每分每秒，根本就没想过主动离去。

B1:*不，你够成熟了。

A:もし私がいくらかもう少し成熟していたら、私は物知り顔に離れただろうが、私は彼女と一緒にいる時間の毎分毎秒をこのように貴重に思っていたので、全然自分から離れることは考えなかった。

B1:*違う、あなたはもう十分成熟した。

以上の各例からみると、i類に属するグループ(192)、(193)及びiii類に属するグループ(196)、(197)を否定すると、 $\neg p$ に対する否定は成立しない一方、ii類に属するグループ(194)、(195)を否定する場合、 $\neg p$ に対する否定文は成立する。即ち、i類とiii類の例における $\neg p$ は前提である一方、ii類の例における $\neg p$ は文の前提ではない。

その結果は文脈や文の意味から観察された結果と一致する。具体的に言うと、(192)の $\neg p$ の“王平没有听从马谡的劝告(あの時、馬謖は王平の忠告に従わなかった)”は歴史上の事実であるため、一般常識と判断される。(193)の $\neg p$ である“咱们抓小动物(私たちは小動物を捕まえる)”は動物である話し手の行動様式であり、普段の動作であるため、双方の共有知識であると判断されやすい。iii類に属する(196)、(197)も、文脈と文の意味から判断すると、 $\neg p$ である“他们亲眼看到了(彼らは実際に目で見た)”と“‘我’(现阶段)不能更成熟(今の段階で私はもう少し成熟することができない)”は会話双方にとって共有知識である。一方、(194)の $\neg p$ である“他不能通过(あの人は合格できない)”及び(195)の $\neg p$ である“我寿二爷没有看错(このおれさまのいうことは当たった)”は話し手の主張であり、(198)及び(199)のように相手に対する反論として使うこともできる。

(198) A:他能通过吗?/我觉得他能通过。

B:要是他能通过,太阳就从西边出来了。

A:あの人は合格できるのか。/あの人は合格できると思う。

B:あの人が合格できるのなら、太陽も西から昇るだろう。

(199) A:你没看错吗?/你看错了吧。

B:这一点我寿二爷要是看错了,张字倒过念,眼睛扒出来让你们当泡踩!

A:あなたのいうことは本当に当たったのか。/あなたのいうことは間違ったかも。

B:このおれさまのいうことがあたんなかつたら、おれの苗字の張の字をさかさに読もうが、目ん玉ほじくりだして踏みつぶそうが文句は言わないよ。

上述の分析から、i類とiii類の $\neg p$ は前提として扱われるが、ii類の $\neg p$ は前提ではないという結論が得られた。

3.3.1.2 qに関する考察

次に、qは前提であるか否かに関する考察を行う。具体的な方法は、①qを否定し、“不是这样的， $\neg q$ 。(違う、 $\neg q$ だ。)”という文を得る。②その文の成立可否によって、qが前提であるか否かを判断する。テストの結果は(200)～(205)のように示す。

(200) A:如果当时马谡听从王平的劝告，街亭之战恐怕将是另外一番结局了。

B2:不是这样的，街亭之战不会是另外一番结局。

A:もしあの時、馬謖が王平の忠告に従っていたら、街亭の戦いは別の結末になっただろう。

B2:違う、街亭の戦いは別の結末になりっこない。

(201) A:孩子，咱们要是 \square 不抓小动物， \square 吃什么呀？

B2:不是这样的，咱们有吃的。

A:おばかさん、私たちが小動物を捕まえないなら、何を食べるというのか。

B2:違う、ほかの食料がある。

(202) A:要是他能通过，太阳就从西边出来了。

B2:*不是这样的，太阳不会从西边升起来。

A:あの方が合格できるのなら、太陽も西から昇るだろう。

B2:*違う、太陽は西から昇らない。

(203) A: 这一点我寿二爷要是看错了, 张字倒过念, 眼睛扒出来让你们当泡踩!

B2: *不是这样的, 我们不能把张字倒过来念, 把你的眼睛扒出来当泡踩。

A: このおれさまのいうことがあだんなかつたら、おれの苗字の張の字をさかさに読もうが、目ん玉ほじくりだして踏みつぶそうが文句は言わないよ。

B2: *違う、張の字をさかさに読むこともできないし、あなたの目の玉をほじくりだして踏みつぶすこともできない。

(204) A: 如果不是亲眼看到, 他们谁也不会相信。

B2: 不, 他们会相信。

A: もし実際に目で見なければ、彼らはだれも信じないだろう。

B2: 違う、彼らは信じられる。

(205) A: 如果我多少成熟一些, 我会知趣地走开。可是我是如此珍视自己和她相处的每分每秒, 根本就没想过主动离去。

B2: 不, 你不会知趣地走开。

A: もし私がいくらかもう少し成熟していたら、私は物知り顔に離れただろうが、私は彼女と一緒にいる時間の毎分毎秒をこのように貴重に思っていたので、全然自分から離れることは考えなかった。

B2: 違う、あなたは物知り顔に離れることはできないはずだ。

i 類に属する (200)、(201) 及び iii 類に属する (204)、(205) を否定する場合、q に対する否定により話し手の観点を否定すると理解しうる一方、ii 類に属するグループ (202) 及び (203) を“不是这样的 (違う)”と反論しても、p に対する否定と解釈され、q に対する否定と理解しにくい。即ち、ii 類の文が否定されても、q が否定されにくいため、q が文の前提と認識される。一方、i 類、iii 類の文における q は前提ではない。

文の意味からみると、(200)のqの“街亭之战恐怕将是另外一番结局（街亭の戦いは別の結末になっただろう）”及び(201)のqの“咱们吃什么呀=咱们会没有吃的（何を食えるというのか/食料が確保できなくなる）”は話し手が反語を使って自分の主張をしているのであり、前提として考えられにくい。iii類に属する(204)、(205)も同じく話し手が提示している主張である。一方、(202)のqの“太阳从西边出来（太陽は西から昇る）”及び(203)のqの“张字倒过念，眼睛扒出来让你们当泡踩（張の字をさかさに読もうが、目ん玉ほじくりだして踏みつぶす）”のどちらも明らかに常識を反する内容である。即ち、qが偽であること（ $=\neg q$ ）は、会話双方の共有知識として認識することができ、文の前提と見なされる。

3.3.2 “否则”テストによる対比的焦点に関する考察

3.3.1では、ライトテストという前提テスト法を用い、反事実“如果”文の前提を考察し、以下の2点の結論を得た。

- ① 反事実“如果”文の $\neg p$ （pが偽であること）について、i類とiii類においては文の前提である一方、ii類においては文の前提でない。
- ② 反事実“如果”文のqについて、i類とiii類においては文の前提でない一方、ii類においては文の前提である。

従って、i類とiii類の $\neg p$ が会話双方のRealityのスペースで真であることは文の前提であり、qが同じスペースで真であることは文の情動的焦点である。それに対し、ii類のqが真であることは文の前提であり、 $\neg p$ が真であることは文の情動的焦点である。

一方、“因为……才”文のpのように、会話双方のRealityのスペースでの事実性に関わらず、ある情報は他の要素との対立が強調される場合、対比的焦点になりうる。そのため、“因为……才”文との交替可否により分類される3種の反事実“如果”文の $\neg p$ とqは対比的焦点であるか否かについても検証する必要がある。検証方法は1.2.2で述べた「“否则”テスト」法を用いる。具体的な方法は、まず(206)のように命題の対偶を取り、p、qを話し手のRealityのスペー

スで真である文である $\neg p$ と $\neg q$ に言い換える。次に、言い換えられる文を「“否则”テスト」により検証し、 $\neg p$ が対比的焦点になれるかを考察する。なお、“如果 p, 就 q, 否则 $\neg p$ ”という形式により、q が対比的焦点になれるかを検証する。

$$(206) \quad p \rightarrow q \Leftrightarrow \neg q \rightarrow \neg p$$

i 類に属する文を考察すると、その結果は(207)～(212)に示される。(207)～(209)組の中で、(208)は“如果 $\neg q$, 就 $\neg p$, 否则 q”という形式により、 $\neg p$ である“马谡没有听从王平的劝告（馬謖は王平の忠告に従わなかった）”が対比的焦点であることを明らかにした。即ち、 $\neg p$ という条件がなければ、 $\neg q$ が成立しないので、 $\neg p$ は $\neg q$ を成立させる排他的条件であることがわかる。(209)は“如果 p, 就 q, 否则 $\neg p$ ”という形式により、q である“街亭之战恐怕将是另外一番结局了（街亭の戦いは別の結末になっただろう）”が対比的焦点になれるかを検証した結果、 $\neg p$ が真であることは前提であるため、文の意味がおかしくなる。それゆえ、q は話し手が提示する結果であるが、情報的焦点のみであり、対比的焦点ではないことがわかる。(210)～(212)組も同様に、(211)の「“否则”テスト」による文が成立するため、 $\neg p$ である“抓小动物（小動物を捕まえる）”は文の対比的焦点であることを証明できる。一方、(212)の「“否则”テスト」による文が通じないため、q である“没有吃的（食料がない）”は文の対比的焦点ではないと認識しうる。

(207) 如果当时马谡听从王平的劝告, 街亭之战恐怕将是另外一番结局了。

もしあの時、馬謖が王平の忠告に従っていたら、街亭の戦いは別の結末になっただろう。

(208) 如果街亭之战没有成为另外一番结局(=没有赢), 当时马谡就没有听从王平的劝告。否则应该可以赢下来的。

もし街亭の戦いは別の結末にならなかつたら、あの時、馬謖は王平の忠告に従わなかったはずだ。さもなければ、その戦いは勝てたはずだ。

- (209) *如果当时马谡听从了王平的劝告，街亭之战恐怕将是另外一番结局了。否则马谡就没有听从王平的劝告。

*もしあの時、馬謖が王平の忠告に従っていたら、街亭の戦いは別の結末になっただろう。さもなければ、馬謖は王平の忠告に従っていなかっただろう。

- (210) 孩子，咱们要是不抓小动物，那吃什么呀？

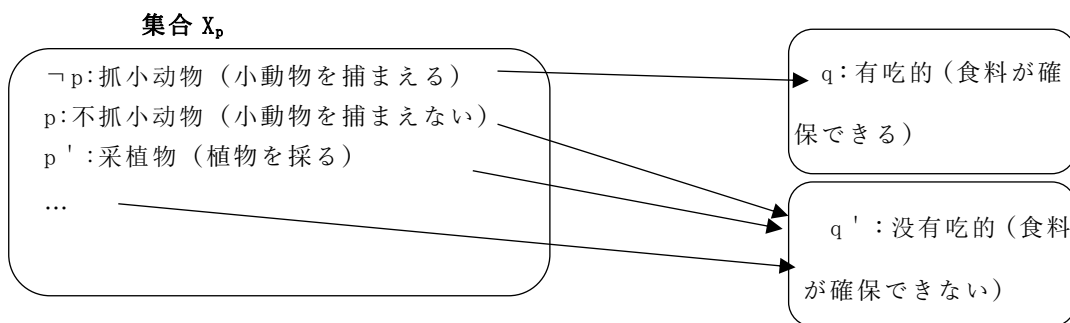
おばかさん、私たちが小動物を捕まえないなら、何を食べるというのか。

- (211) 孩子，咱们要是要有吃的，就要抓小动物。否则咱们就要饿死了。

おばかさん、私たちは食料を確保しようとするなら、小動物を捕まえる。さもなければ、私たちは餓死してしまうよ。

- (212) *孩子，咱们要是不抓小动物，那吃什么呀(=没有吃的)？否则我们就抓小动物了。

*おばかさん、私たちが小動物を捕まえないなら、何を食べるというのか。さもなければ、私たちは小動物を捕まえるだろう。



【図 9】(210) の対比的焦点である $\neg p$ の排他性の意味解釈

従って、i 類の反事実“如果”文は“因为……才”文と同じく、 $\neg q$ (=“因为……才”における q) が真であることが文の前提であり、 p が文の対比的焦点であるので、“因为……才”文と言い換えることができる。(210) を例として作る $\neg p$ の排他性の意味解釈装置について、【図 9】に示される。i 類の反事実“如果”の意味的解釈は、 $\neg q$ を成立させる必要条件は他の要素でなく、 $\neg p$ であることを表す。李晋霞(2010)は i 類を「 $\neg p$ を強調する文」と解釈しているが、以上の分析により、その結論をさらに限定し、i 類は対比的焦点である $\neg p$ の排他性を強調する文であると本研究が主張する。

ii 類に属する (213) 組と (216) 組では、i 類と逆に、 q のみが排他性という特徴を持ち、対比的焦点と見なされる。具体的に分析すると、(214) は“如果 $\neg q$, 就 $\neg p$, 否则 q ”という形式により、 $\neg p$ である“他不能通过(あの人が合格できない)”が対比的焦点になれるかを検証した。その結果、文の意味がおかしいため、「“否则”テスト」を通過しない。(216) 組の (217) も同じである。一方、“如果 p , 就 q , 否则 $\neg p$ ”という形式により q が対比的焦点になる可能性を検証する (215) と (218) は、どちらも文が成立し、「“否则”テスト」を通過した。

(213) 要是他能通过, 太阳就从西边出来了。

あの人合格できるのなら, 太陽も西から昇るだろう。

(214) *要是太阳不从西边出来, 他就不能通过。否则太阳就从西边出来了。

*もし太陽が西から昇らないのなら, あの人合格できない。さもなければ, 太陽は西から昇る。

(215) 要是他能通过, 太阳就从西边出来了。否则他就不能通过。

あの人合格できるのなら, 太陽も西から昇るだろう。さもなければ, あの人合格できない。

(216) 这一点我寿二爷[要是]看错了，张字倒过念，眼睛扒出来让你们当泡踩！

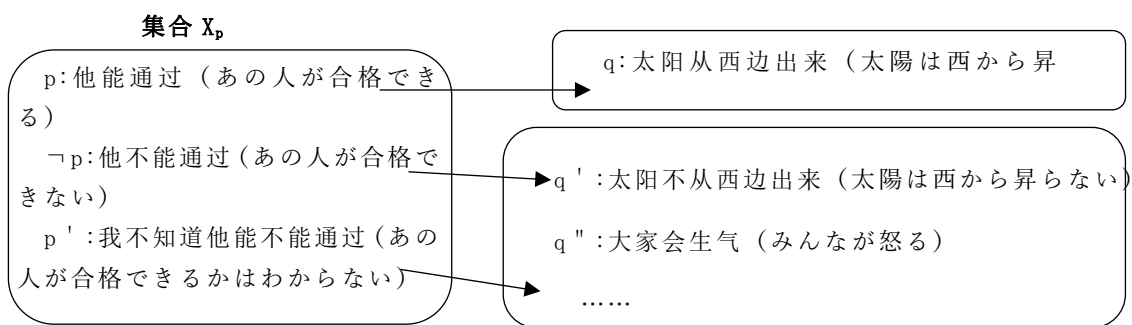
このおれさまのいうことがあたんなかつ[たら]、おれの苗字の張の字をさかさに読もうが、目ん玉ほじくりだして踏みつぶそうが文句は言わないよ。

(217) 要是我张字没倒过来念，眼睛没扒出来让你们当泡踩，我寿二爷就没有看错。否则我张字就倒过来念，眼睛就扒出来被你们当泡踩了。

おれの苗字の張の字をさかさに読もうが、目ん玉ほじくりだして踏みつぶさせないのなら、おれは当たったのだ。さもなければ、おれの苗字の張の字をさかさに読もうが、目ん玉ほじくりだして踏みつぶさせるのだ。

(218) 这一点我寿二爷[要是]看错了，张字倒过念，眼睛扒出来让你们当泡踩！否则我寿二爷就没有看错。

このおれさまのいうことがあたんなかつ[たら]、おれの苗字の張の字をさかさに読もうが、目ん玉ほじくりだして踏みつぶそうが文句は言わないよ。さもなければ、このおれさまのいうことは当たったのだ。



【図 10】 (213) の対比的焦点である q の排他性の意味解釈

ii 類の文の意味解釈は、【図 10】に示されるように、p である“他能通过 (あの人が合格できる)”が導いた結果はほかならぬ、q の“太阳从西边出来 (太陽は西から昇る)”であると強調することである。さらに、ii 類の文における q は

明らかに常識外れな内容または反事実の内容であるのが一般的である。そのため、q の排他性により、p が成立すると、明らかに常識外れな結果や反事実の結果になる。そのため、p が成立しないことが証明される。

iii 類に属する (219) 組と (222) 組を同じ方法で考察すると、i 類と同じ結果を得た。即ち、 $\neg p$ が対比的焦点になる可能性を検証する (220)、(223) は成立し、q が対比的焦点になる可能性を検証する (221)、(224) について、 $\neg p$ が真であることは前提であるため、文の意味がおかしくなる。従って、iii 類の文は i 類の文と同じく、 $\neg p$ は文の対比的焦点であり、q は対比的焦点ではない。

(219) 如果不是亲眼看到，他们谁也不会相信。

もし実際に目で見なければ、彼らはだれも信じないだろう。

(220) 如果他们相信了，就是亲眼看到了。否则他们谁也不会相信的。

もし彼らは信じたとすると、実際に目を見たのだろう。さもなければ、彼らは誰も信じないだろう。

(221) *如果不是亲眼看到，他们谁也不会相信。否则就不是亲眼看到的。

*もし実際に目で見なければ、彼らはだれも信じないだろう。さもなければ、実際に目を見てはいなかった。

(222) 如果我多少成熟一些，我会知趣地走开。

もし私がいくらかもう少し成熟してい**たら**、私は物知り顔に離れただろう。

(223) 如果我没有知趣地走开，我就没有多少成熟一些，否则我就走开了。

もし私が物知り顔に離れなかったなら、私はいくらかもう少し成熟したのだ。さもなければ、私を離れたのだ。

(224) *如果我多少成熟一些, 我会知趣地走开。否则我就没有多少成熟一些。

*もし私がいくらかもう少し成熟してたら, 私は物知り顔に離れただろう。さもなければ, わたしはもう少し成熟していなかった。

以上のことにより、「ライテスト」法と「“否則”テスト」法による検証結果を次のようにまとめる。

「ライテスト」法で前提を検証した結果、以下の2点が明らかにした。一つ目は、i類とiii類の文においては、 $\neg p$ (= p が偽であること) は文の前提であるが、ii類の文においては、 $\neg p$ は文の情動的焦点である。二つ目は、 q について、i類とiii類の文においては、 q は話し手が提示する内容であり、否定されやすいため、文の情動的焦点と見なされる。ii類の文においては、 q は明らかに常識や事実と反する内容であるため、文の前提である。

一方、「“否則”テスト」法により検証した結果、以下の2点を明らかにした。一つ目は、i類とiii類の文の $\neg p$ の事実性 (p が偽であること) は文の前提でありながら、 $\neg q$ を成立させる排他的条件 (= 対比的焦点) と認識されることである。二つ目は、ii類の文の q の事実性 (q が偽であること) は文の前提である一方、 p が導く排他的結果 (= 対比的焦点) と認識されることである。 q が明らかに事実または常識と反する内容を表しているため、それを導く条件 p が成立しないことが証明できる。

以上の結論に基づき、李晋霞(2010)の結論を修正すると、i類とiii類は $\neg p$ が対比的焦点であることを強調し、ii類は p が成立しないことを証明する。

しかし、この結論により解釈できないのは、i類とiii類の区別である。前提と焦点が一致する文をi類とiii類に分ける理由とiii類の文が“因为……才”文に言い換えられにくい理由について、以下の3.4節で詳しく分析する。

3.4 反事実“如果”文の会話の含意から生じる多義性

本節では、i類とiii類の反事実“如果”文の対照分析を行う。前提と焦点が完全に一致している2種の文を区別するために、会話の含意という概念を導入し、考察を行う。さらに、その会話の含意の区別によって生じる文の多義性について解明する。

3.4.1 i類とiii類の文における会話の含意

「会話の含意(Conversational Implicature)」という語用論の概念は、哲学者 Grice により提唱されている理論であり、聞き手が協力の原理⁵⁴にもとづいて話し手の主張することから推論によって獲得する内容であると定義されている(大江1975:p.3)。

i類とiii類の文の会話の含意を解明するために、筆者がi類とiii類の文及びそれに言い換える“因为……才”文にそれぞれ同じ文脈を付与して対照分析を行う。具体的に、 $\neg p$ を対比的焦点としての排他性を強調する文脈と捉え、 $\neg p$ が q を成立させる排他的条件であることを話し手が強調するかについて検証する。また、話し手は p がRealityのスペースで偽であることを知っている上で、その p が実現することに対する態度について分析する。

① $\neg p$ は排他的条件として強調されるか否かについて

まず、 $\neg p$ の排他性を強調する内容に当てはまる文脈と捉え、その結果は(225)～(232)に示される。i類に属する文(225)、(227)はそれに相応する“因为……才”文と同じく、 $\neg p$ の排他性を強調する文脈を付与しても文が成立し、違和感がない。従って、(225)組と(227)組の反事実“如果”文と“因为……才”文のどちらも、 $\neg p$ が $\neg q$ を成立させる唯一の条件であることを強調し、言い換えれば $\neg p$ が $\neg q$ を成立させる重要な役割を強調している。一方、iii類

⁵⁴ 会話はそれに参加するものが互いにその目的を達成することをめざして貢献するような協力的な行為であるとするもので、この協力的原理に連結する原則として、「量の原則」、「質の原則」、「関係性的原則」及び「仕方の原則」があげられている。

に属する文 (229)、(231) はそれに相応する“因为……才”文と異なり、 $\neg p$ の排他性を強調する文脈と捉えにくい。従って、iii類の文の $\neg p$ は〔+排他〕という特徴を持っているが、話し手の真意はその排他性、言い換えれば $\neg p$ が $\neg q$ を成立させる重要な役割を強調するのではない。

- (225) **如果**当时马谡听从王平的劝告，街亭之战恐怕将是另外一番结局了。
所以都是马谡不听王平的劝告导致了失败。

もしあの時、馬謖が王平の忠告に従って**いたら**、街亭の戦いは別の結末になっただろう。だから負けたのはすべて馬謖が王平の忠告に従わなかったせいだ。

- (226) **正****因为**当时马谡没有听从王平的劝告，街亭之战**才**没有成为另一番结局。所以都是马谡不听王平的劝告导致了失败。

あの時、馬謖が王平の忠告に従わなかった**から****こそ**、街亭の戦いは別の結末にならなかった**のだ**。だから負けたのはすべて馬謖が王平の忠告に従わなかったせいだ。

- (227) 孩子，咱们**要是**不抓小动物，那吃什么呀？所以抓小动物是生存必需。

おばかさん、私たちが小動物を捕まえない**なら**、何を食べるというのか。だから小動物を捕まえるのは生きるために必要だ。

- (228) 孩子，**正****因为**咱们抓小动物，**才**有吃的。所以抓小动物是生存必需。

おばかさん、私たちが小動物を捕まえる**から****こそ**、食料を確保できる**のだ**。だから小動物を捕まえるのは生きるために必要だ。

- (229) ? **如果**不是亲眼看到，他们谁也不会相信。所以都是亲眼见到使
他们相信。

?もし実際に目で見なければ、彼らはだれも信じないだろう。だから実際に目で見るのは彼らにこの事実を信じさせるためなのだ。

(230) 正因为亲眼看到了，他们才相信。所以都是亲眼见到使他们相信。

実際に目を見たからこそ、彼らは信じたのだ。だから実際に目で見るのは彼らにこの事実を信じさせるためなのだ。

(231) ?如果我多少成熟一些，我会知趣地走开。所以我多少成熟一些就可以使我知趣地走开。

?もし私がいくらかもう少し成熟していたら、私は物知り顔に離れただろう。だからもう少し成熟するのは私を物知り顔に離れさせるためなのだ。

(232) 正因为我不够成熟，所以我才没有知趣地走开。所以我多少成熟一些就可以使我知趣地走开。

私が未熟たからこそ、物知り顔に離れることをしないのだ。だからもう少し成熟するのは私を物知り顔に離れさせるためなのだ。

従って、i類の反事実“如果”文は焦点化された“因为”文と同じく、 $\neg p$ の〔+排除〕という特徴を強調し、他の条件が $\neg q$ を成立させる条件から排除される意味がもたらされている。そのため、 $\neg q$ という現実的な結果が望ましくない或いはよくないと認識される場合、「すべては $\neg p$ のせいだ」のように、 $\neg p$ の責任の大きさを強調し、 $\neg p$ を責める会話の含意が生じやすい。3.4.2で具体例を挙げ、iii類の文との対照分析をしながら詳しく述べる。

② pを実現することに対する態度

3.3ですでに述べたが、 $\neg p$ の会話双方のRealityのスペースでの事実性(=pが偽であること)は前提である。それゆえ、話し手はpが偽であることを知っている上で仮説の原因として提示する理由について探る必要がある。以下の(233)～(240)では、話し手がpに対する態度、即ちpの実現を望んでいる

か、p の未実現を望んでいるかまたは p の実現に無関心なのかについて検証する。具体的には、話し手が p の実現を望んでいることを表す文脈“p 多好啊 (p でよかった) ”、p の未実現を望んでいることを表す文脈“还好 \neg p (\neg p でよかった) ”をそれぞれつけて、文が成立するか否かによって判断する。

- (233) **如果**当时马谡听从王平的劝告，街亭之战恐怕将是另外一番结局了。
当时马谡听从王平的劝告多好啊/还好马谡没有听从王平的劝告。

もしあの時、馬謖が王平の忠告に従って**いたら**、街亭の戦いは別の結末になっただろう。馬謖は王平の忠告に従っていたらよかったのに/運よく、馬謖は王平の忠告に従わなかった。

- (234) **正因为**当时马谡没有听从王平的劝告，街亭之战**才**没有成为另一番结局。当时马谡听从王平的劝告多好啊/还好马谡没有听从王平的劝告。

あの時、馬謖が王平の忠告に従わなかった**からこそ**、街亭の戦いは別の結末にならなかったのだ。馬謖が王平の忠告に従ったらよかったのに/運よく、馬謖が王平の忠告に従わなかった。

- (235) 孩子，咱们**要是**不抓小动物，那吃什么呀？*咱们不抓小动物多好啊。
/还好咱们抓小动物。

おばかさん、私たちが小動物を捕まえない**なら**、何を食べるというのか。*
私たちは小動物を捕まえずによかったのに/私たちは運よく、小動物を捕まえた。

- (236) 孩子，**正因为**咱们抓小动物，**才**有吃的。*咱们不抓小动物多好啊。
还好咱们抓小动物。

おばかさん、私たちが小動物を捕まえるからこそ、食料を確保できるのだ。*私たちは小動物を捕まえてよかったのに/私たちは運よく、小動物を捕まえた。

- (237) 如果不是亲眼看到，他们谁也不会相信。*没亲眼看到多好啊/*还好亲眼看到了。

もし実際に目で見なければ、彼らはだれも信じないだろう。*実際に目で見なくてよかったのに/*実際に目で見てよかった。

- (238) 正因为亲眼看到了，他们才相信。没亲眼看到多好啊/还好亲眼看到了。

実際に目を見たからこそ、彼らは信じたのだ。実際に目で見なくてよかったのに/実際に目で見てよかった。

- (239) 如果我多少成熟一些，我会知趣地走开。*我多少成熟一些多好啊/*还好我不成熟。

もし私がいくらかもう少し成熟していたら、私は物知り顔に離れただろう。*私がもう少し成熟しなくてよかったのに/*未熟でよかった。

- (240) 正因为我不够成熟，所以我才没有知趣地走开。我多少成熟一些多好啊/还好我不成熟。

私が未熟たからこそ、物知り顔に離れることをしないのだ。私がもう少し成熟しなくてよかったのに/未熟でよかった。

以上の結果からみると、i 類に属する (233)、(235) 及びそれに相応する“因为……才”文 (234)、(236) においては、文の意味や話し手の立場によって、話し手は p が実現することまたは実現しないことを望んでいると判明する。例えば、(233) 組の場合、話し手の立場により、街亭の戦いが負けて悔しいと負け

てよかったという2つの方向で理解することができる。(235)組では、文の意味も含め、話し手は p である“不抓小动物（小動物を捕まえない）”が実現しないことを望んでいると理解されるのが妥当である。いずれにせよ、i 類の文には、話し手は自らの立場によって、p が仮想の世界で実現するかまたはしないかに対し、それぞれ望ましい気持ちを持っている。

それに対し、iii 類に属する (237)、(239) は相応する“因为……才”文 (238)、(240) と異なり、p の実現を望んでいることを表す文脈と捉えられにくい。従って、iii 類の文においては、話し手は p という Reality のスペースで偽である内容が仮想の世界で実現できるか否かに対し、無関心であることがわかる。例えば、(239) では、話し手は自分がもう少し成熟することを望まず、それが実現しづらいとしても「よかった」という気持ちを持っていない。

今回収集した iii 類の文をまとめてみると、p が (237)、(239) のような「実現しづらい」例と (241)、(242) のような「実現しやすい」例の2種類がある。

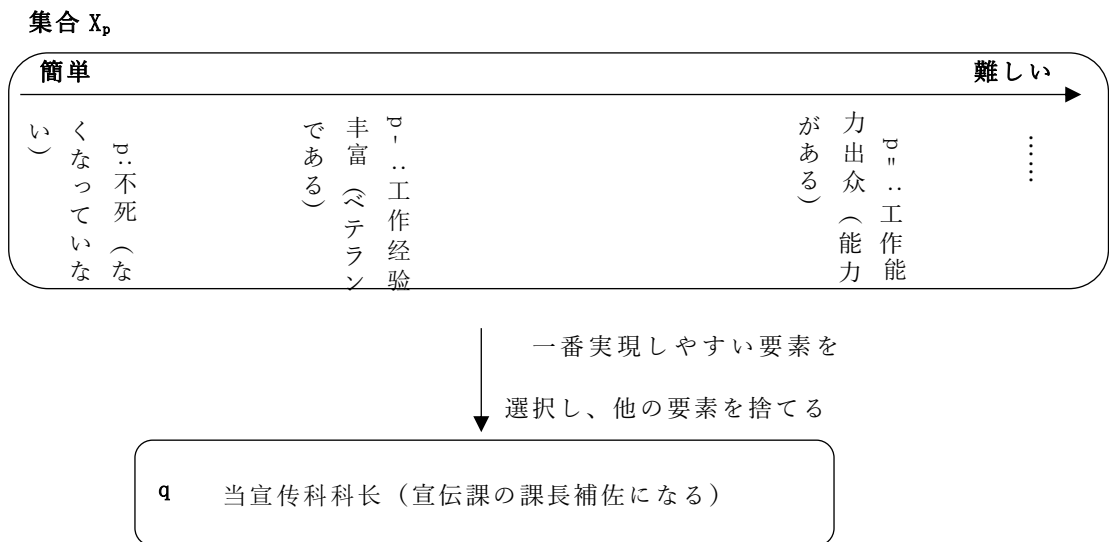
(241) を例として分析すると、話し手は p である“（凌凱）不死（凌凱がなくなっていない）”に対しても、 $\neg p$ である“（凌凱）死了（凌凱がなくなった）”に対しても、望ましい気持ちを持っていない。話し手は凌凱という二十代の若者も、“不死（なくなっていない）”という簡単な条件を満たせば、課長補佐になれることにより、q である“是宣传科的副科长了（課長補佐になる）”が簡単に実現できると強調し、ベテランである聞き手が課長補佐になれない無能さを言外で主張している。(242) も、話し手は p である“（矿工们）在北京城里（炭坑夫たちが北京の街に住んでいる）”の実現可否に無関心であるが、他の難しい条件を要らず、この条件さえ実現すれば、q である“也能把姑娘们迷得魂飞神散（娘たちを夢中にさせる）”も実現できると強調し、炭坑夫たちは才能と魅力があることを言外で主張している。

(241) 看看人家凌凯，来矿才四年的学生，二十多岁，要是不死，过不了三个月，就是宣传科的副科长了。（日中：《盖馆》）

あの凌凱をみてごらん。学生あがりでこの炭鉱にやってきてまだ四年にしかならないが、もしこんなことにならなければはたちを少し過ぎた若さで、三か月後には宣伝課の課長補佐になるはずだった。(日中:『棺を蓋いで』)

- (242) 这里面，有劳动模范，有革新能手，也有吹拉弹唱样样精通的。要是在北京城里，也能把姑娘们迷得魂飞神散呢。可他们是在京西，他们是井下挖煤的，是矿工。(日中:《丹凤眼》)

その中には労働模範あり、革新の旗手あり、また、音楽なら吹く、弾く、歌う何でもござれの万能選手もいる。もし彼らが北京の街中に住んでいれば娘たちを夢中にさせずにはおくまい。だが残念ながら彼らは北京の西郊に暮らし、地底にもぐって石炭を掘っている、そう、彼らは炭坑夫なのだ。(日中:『鳳凰の眼』)



【図 11】 iii類の文の意味解釈その 1 ((241) を例として)

(241) のような文の意味解釈について、【図 11】で示される。この図を解釈すると、集合 X_p に属す q を成立させることが可能である様々な要素の中で、一番実現しやすい要素を選択し、 q を成立させる条件とする。会話の含意は、他

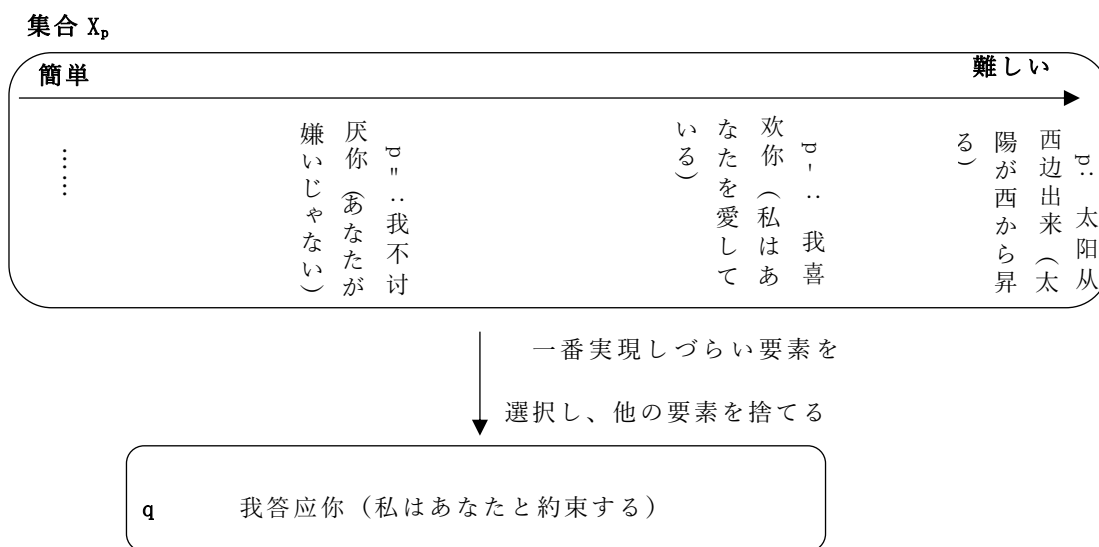
の難しい条件はいっさい要らず、最も簡単な条件 p のみで q を成立させることが可能であるため、q が実現しやすいことである。

(237)、(239) や (243) のような李晋霞 (2010) が指摘している q を否定する例は、(241) と逆に、p が実現しにくい iii 類の文である。

(243) (= (170)) **如果**太阳从西边出来, 我**就**答应你。

もし太陽が西から昇**れば**, 私はあなたと約束するよ。

このような文は【図 12】に示されるように、集合 X_p に属す q を成立させることが可能である様々な要素の中で、一番実現しづらい要素を選択し、q を成立させる条件とする。会話の含意は、最も難しい条件 p しか、q を成立させることができないため、q が実現しづらいことである。



【図 12】 iii 類の文の意味解釈その 2 ((243) を例として)

上述の分析をまとめると、i 類の文における p に対し、話し手が実現するまたは実現しないことを望んでいる一方、iii 類の文における p に対し、話し手が実現の難易度に注目している。その p の実現の難易度の選択操作によって、q の実現の難易度という会話の含意が付いてくる。それは i 類と iii 類の文の意味

上の大きな相違点である。その相違点によって、一つの文は二つの意味が表されるといふ文の多義性も生じてくる。以下の 3.4.2 で具体的に分析する。

3.4.2 反事実“如果”文の多義性

i 類の文と iii 類の文の大きな区別は会話の含意であるが、具体的には以下の 2 点である。

① i 類の文においては、p の排他性が強調され、 $\neg q$ という現実な結果がよくない結果と認識されると、「すべては $\neg p$ の責任である」といふ会話の含意を持つこと

② iii 類の文においては、q の実現の難易度といふ会話の含意を持つこと

しかし、前述のように、i 類の文と iii 類の文には、前提と焦点が一致し、構文形式からも区別されにくい。そのため、一つの文に対し、i 類として解釈しても iii 類として解釈しても可能である例が散見される。例えば、(244) は 3.2.1 に述べたように事実文または反事実文として認識されるだけでなく、以下の (245) 及び (246) に示したように、会話の含意の違いにより、i 類または iii 類の反事実文として解釈することも可能である。

(244) (= (163)) 如果巴治奥踢进了那个点球，意大利队就可以进入半决赛。

もしバジジョ選手があのペナルティキックを決めていたら、イタリア代表が準決勝まで進出したのに。

(245) 如果巴治奥踢进了那个点球，意大利队就可以进入半决赛。所以巴治奥是意大利队没进半决赛的罪臣。

もしバジジョ選手があのペナルティキックを決めていたら、イタリア代表が準決勝まで進出したのに。だからイタリア代表が準決勝まで進出できないのはすべてバジジョ選手のせいだ。

(246) 如果巴治奥踢进了那个点球，意大利队就可以进入半决赛。明明意大利队那么强，应该能进半决赛才对。

もしバッジョ選手があのペナルティキックを決めていたら、イタリア代表が準決勝まで進出したのに。イタリア代表がとても強いチームなので、準決勝まで進出できたはずだ。

具体的にいうと、(245)のように、 $\neg p$ の対比的焦点としての排他性、即ちバッジョ選手がペナルティキックを決めることはイタリア代表の準決勝戦進出を成立させる重要な条件であったという文脈と捉えても、(246)のように、話し手が q の成立難易度、即ちイタリア代表の準決勝進出の実現可能性が高かったという文脈と捉えても、どちらでも成立する。前者はバッジョ選手が犯したミス的重要性について述べ、“巴治奥能踢进球就好了/还好巴治奥没进球(そのペナルティキックを決めていたらよかったのに/そのペナルティキックが外してよかった)”のような、話し手が p の実現または未実現を望んでいる気持ちを表す文脈も捉えられる。後者は p の実現または未実現に望んでいる気持ちがなく、「ペナルティキック」というサッカー選手にとって最も簡単なはずのゴールを決めるという条件を満たせば、 q が成立するので、 q が成立しやすいことを強調し、 $\neg q$ という現実的な結果に対して悔しい気持ちを言外で伝える。

また、この多義性により、コミュニケーションのずれを生む可能性もある。前述のように、i類の文に理解する場合、Realityのスペースでの結果 $\neg q$ が望ましくない結果或いはよくない結果と認識されたら、 p で言及した理由の責任が大きいと理解されやすい。例えば(244)をi類の文として理解する場合、“都是巴治奥没有踢进球的错(すべてはバッジョ選手がペナルティキックを外したせいだ)”という言外の意味が生じてくる。それに対し、iii類の文として理解する場合、「イタリア代表が簡単に準決勝まで進出できるはずなのに」という悔しい気持ちだけを言外で伝える。従って、たとえ話し手が悔しい気持ちで(244)を言っても、聞き手がバッジョ選手のサポーターであれば、i類の文として解読する場合、怒る可能性もあると考える。

(247) も (248) または (249) のどちらかに解釈することができる。(248) として解釈すると、話し手が自分の発表の失敗を相手のせいにするが、(249) として解釈すると、聞き手のプレゼン力など自分を救う要素がすでにそろっているので、ただ帰るだけで話し手を助けてもらうことができると主張し、聞き手の能力を肯定している。

(247) 今个晌午我是老太太吃柿子，噁了瘰子。你要是早回来两个小时，不就救了我吗？(日中:《金光大道》)

今日の昼は、歯の悪いバアさまに吸われた柿みたいに、クタクタになっちゃまって。あんたが二時間も早く帰ってきたら助けてもらえたらうに！(日中:『輝ける道』)

(248) 你要是早回来两个小时，不就救了我吗？你没有再回来导致我没有被救，噁了瘰子。

あんたが二時間も早く帰ってきたら助けてもらえたらうに！あんたが早く帰ってこなかったせいで私の発表はクタクタになっちゃまって。

(249) 你要是早回来两个小时，不就救了我吗？你回来就可以救我了，太可惜了。

あんたが二時間も早く帰ってきたら助けてもらえたらうに！帰ってきてくれていたらきっと私を助けてくれたらう。残念だね。

(250) のように文脈が足りない場合、(249) のように伝えたい話し手と (248) に理解してしまう聞き手の間に誤解を招き、“怪我吗 (私のせいにするか)” のような流れになり、コミュニケーション失敗の可能性もある。

(250) A: 今个晌午我是老太太吃柿子，噁了瘰子。你要是早回来两个小时，不就救了我吗？

B: 这能怪我吗？

A:我没有要怪你的意思,是说你能帮我。

A:今日の昼は、齒の悪いバアさまに吸われた柿みたいに、クタクタになちまって。あんたが二時間も早く帰ってきたら助けてもらえたらうに!

B:私のせいにするか。

A:違う。あなたが私をたすけてくれたらうと言いたいただけだよ。

さらに、上述の i 類の文における $\neg p$ の排他性により生じる会話の含意を意識的に活用し、特に i 類の文として理解しうる文脈を付与すると、新たな会話の含意を表すことも可能である。以下の (251) 及び (253) はその用法に当てはまる。

- (251) 这时候,凌凯说话了,一本正经的:“是啊,您哪儿熊啊,您可不熊!不就比咱刘书记差条破裤子吗!当年您要是有条裤子,如今不也是我们的书记了?”小青年们又拍巴掌又跺脚,笑得更凶了。(日中:《盖棺》)

この時、凌凱が大真面目な調子で口をはさんだ。「そうさ。あんたは能無しなんかじゃない。ただ、劉書記にくらべるとズボンが足りなかった⁵⁵だけさ。もし、その当時、ズボンがあつたら、今じゃわれわれの党書記さまだ」若い連中は手をたたき、足を踏みならして笑い続けた。(日中:『棺を蓋いて』)

- (252) 正因为你当年没有裤子,如今才不是我们的书记。

その当時、ズボンがなかったからこそ、今は我々の党書記さまにならなかったのだ。

- (253) 鸦片原来是救命的烟!请想想,如果倪维德的父亲吸鸦片,他还能去主张什么变法维新,参加什么公车上书,提倡什么天足大脚吗?他还可能自缢身亡、死于非命吗?吸鸦片的人即使活得不如猪狗,

⁵⁵ ズボンの数が足りないという意味である。

也不会自己结果自己的性命。不愿苟活的人只能是疯子。(日中:《活动变人形》)

アヘンこそが救いの神やってか! そうよのう、爺さまがアヘンを吸うていし
なしたら、変法維新とやらを説き、直訴とやらに加担し、自然足⁵⁶をふれ
回るような大それた事はせなんだろう。縊死などという非業の死に様され
たるか。アヘン吸いはたとえ生きては犬畜生に劣ろうとも、自ら命を断つ
ことはようせん。無為な生を望まん者は発狂するよりなからう。(日中:『応
報』、修正あり⁵⁷)

- (254) 正 因为 倪维德的父亲不吸鸦片，他 才 会去主张什么变法维新，参加
什么公车上书，提倡什么天足大脚。他 才 会自缢身亡，死于非命。

爺さまがアヘンを吸わなかった から こそ、変法維新とやらを説き、直訴と
やらに加担し、自然足(反纏足)をふれ回るような大それたまね事が起き
たのだ。縊死(首つり自殺)などという非業の死になったのだ。

(251) では、文脈の“不就比较咱刘书记差条破裤子吗(ただ、劉書記にくらべるとズボンが足りなかつただけさ)”から、 $\neg p$ である“当时您没有裤子(その当時、ズボンがなかった)”が対比的焦点としての排他性を強調し、話し手が p の実現を望んでいると判断しうる。(252) のように“因为……才”文に言い換えても、意味はあまり変化しない。

(253) も文脈から、話し手は $\neg p$ である“倪维德的父亲不吸鸦片(爺さまがアヘンを吸わない)”が $\neg q$ を成立させる唯一の条件として強調し、 p の実現を望んでいると判断できる。“因为……才”文の(254)に言い換えても、文の意味に変わりはない。

⁵⁶ 反纏足のことを指す。

⁵⁷ 以下のように訳文の誤訳を修正した。

修正前:「崩き」 修正後:「説き」

修正前:「回るよな」 修正後:「回るような」

しかし、波線部の“小青年们又拍巴掌又跺脚，笑得更凶了（若い連中は手をたたき、足を踏みならして笑い続けた）”のような聞き手の反応や“吸鸦片的人即使活得不如猪狗，也不会自己结果自己的性命。不愿苟活的人只能是疯子。（アヘン吸いはたとえ生きては犬畜生に劣ろうとも、自ら命を断つことはようせん。無為な生を望まん者は発狂するよりなかろうてや）”のような話し手が表す態度からみると、話し手は“您有条裤子（ズボンがあった）”または“倪维德的父亲吸鸦片（爺さまがアヘンを吸う）”を反語として示していると考えうる。

その理由を具体的に分析すると、(251)の Reality のスペースでの結果である $\neg q$ の“没有当书记（党書記にならなかった）”は聞き手にとって望ましくない結果であると認識しうるためである。(253)の $\neg q$ である“（倪维德的父亲）自缢身亡，死于非命（爺さまは縊死などという非業の死になった）”も望ましくない結果と認識できる。そのため、i 類の文では、 $\neg p$ が排他性を持つため、 $\neg p$ の責任が大きいという会話の含意が生じる。従って、 $\neg q$ という望ましくない結果に対して、 $\neg p$ である“没有裤子（ズボンがない）”や“没有吸鸦片（アヘンを吸わない）”の責任が大きい、「すべては $\neg p$ のせいだ」と言外で解釈することができる。しかし、一般的な認識からみると、“当书记（党書記になる）”を成立させる条件は、“有水平（能力が高い）”や“你受欢迎（人気がある）”などである。“没有当书记（党書記にならなかった）”は“没有裤子（ズボンがない）”のせいにするのは普段考えられにくい。従って、話し手が言及している人（＝聞き手）は自己認識が不足であり、自分のせいにせず、“没有裤子（ズボンがない）”のようなおかしい理由にすべての責任を担わせるといふ心理に対し、皮肉な気持ちを言外で示す。そのため、この場にいる他の人も“又拍巴掌又跺脚，笑得更凶了（手をたたき、足を踏みならして笑い続けた）”という会話の含意に相応する反応が現れた。

(253)においても、公民が非業の死になる条件は“治安不好（治安が悪い）”や“国家制度不完善（国家の管理体制は整えない）”などと考えられるが、“不吸鸦片（アヘンを吸わない）”という一般人にとって当たり前の行動のせいにするのは考えられにくい。この当たり前の行動が“死于非命（非業の死になる）”に

対し、すべての責任を負うことはでたらめ極まりないが、他の理由はすべて言及できず、この理由のせいにしないといけないという状況が言外で現れる。言い換えれば、公民たちはこの国の治安や管理体制に責任を担わせることができず、仕方なくアヘンを吸わないことのせいにするという意味が含まれる。その後ろに続く文脈である“吸鸦片的人即使活得不如猪狗,也不会自己结果自己的性命。不愿苟活的人只能是疯子(アヘン吸いはたとえ生きては犬畜生に劣ろうとも、自ら命を断つことはようせん。無為な生を望まん者は発狂するよりなかるうてや)”も同じ意味を表すものである。

以上をまとめると、反事実“如果”文における i 類と iii 類の文は、前提と焦点が一致しているが、意味解釈について完全に一致するものではない。

まず、i 類の文は① $\neg p$ の排他性を強調する、②話し手は p の実現または未実現を望んでいる態度を持っている、③ $\neg q$ という現実的な結果が、望ましくない或いはよくないと認識される場合、「すべては $\neg p$ のせいだ」という排他性により生じる会話の含意があるという3つの特徴を持つ。一方、iii 類の文は、① $\neg p$ の排他性を強調しない、話し手は p の実現に対して無関心な態度を表す、②p は q を成立させる可能性がある様々な条件の中に、最も実現しやすいまたは最も実現しづらい条件であると話し手が想像し、排他的な条件として強調している。その p という条件のみを満たせば、q が成立するので、q の実現しやすさまたは実現しにくさを言外で強調するという2つの特徴を持つ。

また、i 類と iii 類における会話の含意の区別により生じた多義性を意識的に活用すると、言外で皮肉という意味を表すことも可能である。

3.5 本章のまとめ

本章では、反事実“如果”文を取り上げ、“因为……才”文との交替可否によって3種類に分けてそれぞれの前提と焦点を探り、さらに i 類と iii 類の区別による多義性について分析し、以下のようにまとめた。

まず、3.2 では、反事実“如果”文の表現形式及び前提と焦点に関する先行研究をまとめた上で、反事実“如果”文の焦点の違いにより、反事実“如果”文は最低

2 種類に分けられると主張した。さらに、李晋霞(2010)における分類を再考察し、問題点を示した上で、“因为……才”文との交替可否により、1) “因为……才”文に言い換えても文の意味がほとんど変わらない i 類、2) “因为……才”文に言い換えると非文になる ii 類、3) “因为……才”文に言い換えると、非文にはならないが意味の変化が大きい iii 類の 3 種類に再分類することにした。

3.3 では、前提と情報的焦点を検証するテスト法である「ライテスト」及び対比的焦点を検証するテスト法である「“否则”テスト」を用いて 3 種の反事実“如果”文の前提と焦点を検証した。「ライテスト」で検証した結果、i 類と iii 類の文においては、 $\neg p$ (= p が偽であること) は文の前提であり、 q は文の情報的焦点であるが、ii 類の文においては、 $\neg p$ は文の情報的焦点であり、 $\neg q$ は文の前提であるという結論を得た。

また、「“否则”テスト」法により検証した結果、i 類と iii 類の文の $\neg p$ の事実性 (会話双方の Reality のスペースでの p が偽であること) は文の前提でありながら、 $\neg p$ は $\neg q$ を成立させる排他的条件 (= 対比的焦点) と認識される。一方、ii 類の文の q の事実性 (q が偽であること) は文の前提でありながら、 q は p が導く排他的結果 (= 対比的焦点) と認識される。さらに、ii 類の文の q を観察すると、明らかに反常識や反事実的な内容を表すことが一般的である。そのため、それを導く条件 p は成立しないことが証明できる。

3.4 では、前提と焦点が一致する i 類と iii 類の文を会話の含意の視点から考察し、i 類の文は $\neg p$ の対比的焦点としての排他性を強調するので、 $\neg q$ は望ましくない結果と認識される場合、「 $\neg p$ の責任が大きい」という会話の含意が含まれる。一方、iii 類の文においては、 p は q を成立させる可能性がある様々な条件の中に、最も実現しやすいまたは最も実現しづらい条件であると話し手が想像し、その p という条件を満たせば、 q が成立するので、 q の実現しやすさまたは実現しにくさを言外で強調する。

i 類と iii 類は構文形式及び前提と焦点が一致するため、同一文に異なる会話の含意が含まれるので、理解のずれを生む可能性がある。さらに、i 類の会話

の含意を意識的に用いると、皮肉という意味が含まれ、語用論的な機能が実現できる。

以上の結論をまとめると、李晋霞(2010)の分類に基づき、反事実“如果”文を以下の3種類に再分類し、それぞれの前提、焦点及び会話の含意を【表 6】にまとめる。

- ① i 類： $\neg p$ の排他性を強調する文
- ② ii 類： p が偽であることを証明する文
- ③ iii 類： q の実現難易度を強調する文

そのうち、ii 類の文は p が偽であることを証明する点において、次の章で論じる疑念を表す“既然”文と共通点がある。そのため、次の章で、疑念を表す“既然”文を考察しながら、ii 類の反事実“如果”との異同についても詳しく分析する。

【表 6】反事実“如果”文の分類及び前提・焦点・会話の含意のまとめ

分類	前提	情報的焦点	対比的焦点	会話の含意
i 類	$\neg p$	q	$\neg p$	$\neg p$ の責任が大きい
ii 類	$\neg q$	$\neg p$	q	-
iii 類	$\neg p$	q	$\neg p$	q の実現の難易度

第4章 疑念を表す“既然”文における焦点及び語用論的特徴⁵⁸

第2章と第3章では、“因为”文の原因節焦点化及び反事実“如果”文の p、q に対する選択操作による焦点移動及びそれによる文の意味的変更について考察を行い、文の情動的焦点だけでなく、対比的焦点も文の意味に対する影響が大きいことを明らかにした。本章では、先行研究で“因为”文と“如果”文との交替可能性及び区別についてよく触れている“既然”文のうち、疑念を表す“既然”文という特殊形式を取り上げ、焦点構造及び語用論的特徴に関する考察を行い、“因为”文と“如果”文との交替可能性及び区別についても解明する。

4.1 はじめに

“既然”文は、中国語における推論因果複文の代表的文型であり、代表的構文形式は“既然 p，就 q”である。(255) に示されるように、“既然”文は一般的に、確認済みの理由 p、未確認或いは推測された結果 q 及び関連詞により構成されている。ある事実 p を認め、その事実を原因として、未確認或いは推測された結果 q を説明するものである。原因節 p を導く関連詞は“既然”、“既”などがあり、結果節 q を導く関連詞は“就”、“那么”などがある(徐阳春 2002、鳥井 2004、王 2010 など)。

(255) 既然 我去， 他 就 会去。(鳥井 2004:p.80)

関連詞	p	関連詞	q
-----	---	-----	---

私が行ったからには、彼も行ったはずだ。(鳥井 2004:p.80)

「複文二分系統」説においても、「複文三分系統」説においても、“既然”文は“因为”文と同じく因果類複文に分類されているのが一般的である。さらに、先行研究では、“因为”文との区別について、①“既然”文の p 節は既知情報を表し、“因为”文の p 節は既知または未知情報を表す、②“既然”文の p 節は前提であり、

⁵⁸ 本章は王(2020)を加筆修正したものである。

“因为”文の p 節は文の前提とは限らない⁵⁹など、“既然”文の p 節が既知及び会話双方の共有情報であるとの主張が多くみられる(徐阳春 2002、刘月华 2004、鳥井 2004 など)。(256) はその例である。波線部の文脈である“城墙(壁)”から、(256) の p である“一堵墙已经修了出来/墙存在(壁はすでに建てられた/壁は存在する)”は確認済みの情報であることがわかる。

- (256) 久而久之，城墙上就被刮出了好多白斑，好像脸上长了癣。我不明白，既然一堵墙已经修了出来，为什么不能让它好好呆着。(BCC:王小波《青铜时代》)

やがて、白癬が顔に出てきたかのように、壁に多くの白い斑点が削り取られた。壁はすでに建てられているのに、なぜそのままにしておいてはいけないのか、私にはわからない。(拙訳)

しかし、黄文龙(1998)、邢福义(2001)などは、(257) と (258) のような、p が会話双方の共有情報 (= 前提) ではない反例を指摘している。

- (257) 我常常自问：既然爸爸是“坏蛋”，那么，什么样的人才是好人呢？(邢福义 2001:p.506)

父が「悪者」なら、どんな人がいい人なのかと私はよく自問する。(拙訳)

- (258) 只这“无所恨”真是怪，真是怪！……既无所恨，为什么要索索地抖，泪水直淌呢？(黄文龙 1998:p.87)

ただ、この「何も恨んでいない」は非常におかしい、非常におかしいのだ！…何も恨んでいないのなら、どうして震えて涙も止まらないのか。(拙訳)

⁵⁹2.3.1 を参照。

(257) の p である“爸爸是‘坏蛋’ (父は「悪者」だ)”と (258) の p である“无所恨 (何も恨んでいない)”は文の意味や文脈から判断すると、会話双方の共有情報でなく、話し手にとって疑念を抱くまたは否定したい情報であることがわかる。例えば、(257) の文の意味から、話し手が $\neg p$ である“爸爸不是坏蛋 (父は悪者ではない)”を主張したいことがわかる。

本章では、このような p 節に対する疑念または否定を表す“既然”文を「疑念を表す“既然”文」と呼び、p 節に対する疑念を表さない“既然”文 (一般“既然”文とする) と対照しながら、文の前提、焦点及び語用論的特徴について分析する。

また、中国語の複文研究においては、“既然”文と他の複文との対照分析が多く見られる。その理由の一つは、“既然”文は“因为”文や“如果”文など、他の「因果類複文」との意味上の共通点があるからである。例えば、(259) では、“既然”を仮定文の接続詞に相当する「なら」と訳している。

(259) 既然你那老余这么可爱, 你就去爱吧! 我可不敢拆散你们。(日中:
《青春之歌》)

そんなに余さんを愛してるのなら、どうぞ自由に、あたしだって、あなたたちの仲を裂く気はないわよ。(日中:『青春の歌』)

熊(2015)と彭(2018)は、“既然”文と日本語表現との対応関係について、コーパスを通して考察し、「以上」、「なら」、「から」、「のに」という日本語表現が比較的高い使用率を占めることを指摘している。具体的には【表 7】に示される。

【表 7】“既然”に対応する日本語表現(熊 2015:p.16)

順位	訳語	出現数	使用率 (%)
1	以上	62	27.4%
2	なら	27	12.0%
3	から	27	12.0%
4	のに	18	8.0%

【表 7】からみると、“既然”文は“如果”文に相当する「なら」や“因为”文に相当する「から」など対訳することが多く見られる。特に疑念を表す“既然”文の場合、(259)のように「なら」と訳した用例が多数であり、その文は“如果”文との共通点及び相違点を分析する必要がある。

さらに、前述のように、刘月华・潘文娉・故韡(2004)などの先行研究は、“既然”文と“因为”文の区別を p が前提となるか否かであると見なしているが、p が前提ではない疑念を表す“既然”文は「因果類複文」に属する“因为”文との区別を明らかにする必要もある。

4.2 先行研究及び問題点

具体的な考察を行う前に、まず疑念を表す“既然”文の定義を明らかにした上、先行研究における問題点を提示する。

4.2.1 疑念を表す“既然”文の表現形式に関する先行研究及び問題点

疑念を表す“既然”文に関する研究は管見の限り少ないが、このような“既然”文を“质疑性推断（疑念を表す推論）”と名付けているものに邢福义(2001)がある⁶⁰。邢福义(2001)は“既然”文を“断果句（結果を推定する文）”（例（260））と“断因句（原因を推定する文）”（例（261））に分けているが、どちらも p はすでに発生した既知の事実であり、q は p に基づいた推論である。

(260) 既然奖金这么多, 报名的人一定不少。(邢福义 2001:p.358)

賞金がこんなに多い以上、応募者が決して少なくはないだろう。(拙訳)

(261) 既然报名的人这么多, 奖金一定不少。(邢福义 2001:p.358)

応募者がこんなに多い以上、賞金は決して少なくはないだろう。(拙訳)

⁶⁰ 邢福义(2001:p.505~506)を参照。

一方、(257) または以下の (262) のような“反証疑据 (疑われる原因・根拠が成立しないことを反証する)”⁶¹を表す例も提示されている。このような例では、p は既知の事実を表しているように見えるが、実際には話し手が p に対する疑念或いは否定を表すと邢福义(2001)が指摘している。

(262) 我惊愕地望着她：既然这几年她真的有了属于她的星座，她为什么不拒绝调来这个农场呢？(邢福义 2001:p.506)

私は驚いて彼女を見つめた。彼女が近年本当に自分の星座を手に入れたとすれば、なぜこの農場に転勤することを拒否しなかったのか。(拙訳)

邢福义(2001)では、(262)のような“既然”文を“质疑性推断(疑念を表す推論)”と呼び、以下のように説明している。

姑且容认某个说法、某种情况为事实，通过推论对其真实性表示怀疑甚至否定。

「ある見解またはある状況をとりあえず事実として認め、そして推論を通して真実性に対する疑念ひいては否定を表す。」(邢福义 2001:p.506 拙訳)

黄文龙(1998)も、(258) と (263) を例として、p がすべて既知情報であることに反論している。

(263) 既然是商品，为什么没有商标？技术部门初步研究了一下，他们的意见认为不像是西方国家的民用商品。(黄文龙 1998:p.87)

商品であるのなら、なぜ商標がないのか？技術部は初歩的な調査を行ったが、西洋の一般の商品と違うようだという意見を持っている。(拙訳)

⁶¹ 邢福义(2001:p.369)を参照。

徐阳春(2002)も同じ観点を持っている⁶²。

しかし、疑念を表す“既然”文は構文上、明確な特徴を持っておらず、一般“既然”文とは表現形式により区別されることが難しい。黄文龙(1998)では、疑念を表す“既然”文における q が疑問文または否定文が多いと指摘されているが、(264) と (265) のように q が疑問文または否定文である一般“既然”文も散見される。

- (264) 既然寻你的姑娘这么多，可你为什么偏偏跟我过不去？(邢福义 2001:p.367)

あなたに憧れている女性はこんなに多いのに、どうして私だけにしつこく付きまとうのか。(拙訳)

- (265) 我跺了一下脚说：“我说不要送了你就不要送了！”他说：“那好吧，既然你不高兴我就不送了。”(BCC:莫言《红树林》)

「見送りは結構だって言ったのだからもういい！」と私は足を踏み鳴らして言った。「わかった。君がうれしくないのなら私はもう君を見送らない。」(拙訳)

そのため、文脈がなければ、一つの文を疑念を表す“既然”文として解釈しても一般“既然”文として解釈しても可能な例が散見される。(266)はその例である。“就是你当年发表出来了……也足以把它抵消得干干净净嘛！（当時発表されたとしても、…プラス・マイナスで帳消しになりそうなものだ）”という後続文から判断すると、p である“你有这么多优势（あなたはそれだけの強みを持っている）”に対する疑念や否定でなく、疑問文 q を構成する命題である“在乎诗稿（詩の原稿に拘らなくてもいい）”に対する疑念または反論を表すのは話し手の真意であることが明らかになっている。一方、その例の後続文がなければ、疑念を表す“既然”文と解釈することもできる。

⁶² 徐阳春(2002:p. 132)を参照。

- (266) 韓一潭冷笑着说：“既然你有这么多的优势，又何必在乎几首没有发表出来的诗稿呢？就是你当年发表出来了，你这么多的优势，也足以把它抵消得干干净净嘛！”（日中：《钟鼓楼》）

韓一潭は冷やかに切りかえした。「あんたはそれだけの強みをもっているんだろう？発表されなかった詩の原稿なんかにこだわらんでもいいじゃないか？たとえ、当時発表されたとしても、いま書いたそれだけの強みがあるんだから、プラス・マイナスで帳消しになりそうなもんだがな……」（日中：『鐘鼓楼』）

それに対し、構文形式に特徴がないとはいえ、(257) や以下の (267) のような、一般“既然”文と解釈しにくい文も存在する。

- (267) 你既然永远不死，还需要保什么险呢？（语料：蔡威林《在动物寿命保险公司里》）

君が永遠に生き続けるのなら、保険なんかに加入する意味がないじゃない。（拙訳）

さらに、q が疑問文であっても、(268) と (269) のような、p に対する疑念または否定として解釈されにくい例もある。

- (268) 既然还在咳嗽，为什么却又来加班？（邢福义 2001:p.368）

まだ咳をしているのに、なぜ休日出勤するのか。（拙訳）

- (269) 既然群众需要，为什么不能办起个饮食店？（语料：《中国青年报》）

大衆の必要とするものなのに、なぜ飲食店を経営しないのか。（拙訳）

そこで、a) 疑念を表す“既然”文であるか否かに対する判断は、なぜ文脈に影響されるか、b) 文脈に頼らない文の特徴は何かという二つの疑問が生じる。

4.2.2 “因为”文、“如果”文との比較に関する先行研究及び問題点

2.3.1 ですでに述べた情報の新旧による区別のほかに、黄文龙(1998)は、疑念を表す“既然”文と“因为”文の区別についても分析している。黄文龙(1998)によれば、疑念を表す“既然”文の場合、q は疑問文あるいは否定文であることが多く、q の内容は p が導く結果と正反対であることまたは常識外れの内容であることがよく見られる一方、“因为”文の場合、q はほとんどが陳述文であり、q の内容は決して p が導く結果と正反対であることはない。例えば、疑念を表す“既然”文である (270) においては、常識に基づいて判断すると、p である“一点也不好吃 (全然おいしくない)”が導く一般的な結果は「食べない」であるが、現実的な結果 q である“不断地吃 (食べ続ける)”はその一般的な結果と正反対である。一方、同じく q が疑問文である“因为”文の (271) においては、p の“碰到她(あの子に会った)”は話し手が想定している q を構成する命題の“他如此倒霉 (彼はあんなに不運だった)”を導く原因であり、一般常識に違反することもない。

(270) 既然一点也不好吃, 为什么却不断地吃? (邢福义 2001:p.366)

全然おいしくないのなら、なぜ食べ続けるの。(拙訳)

(271) 难道是因为碰到她, 他才会如此倒霉? (语料:王民嘉《惜楼烟云》)

あの子に会ったからこそ、彼はあんなに不運だったのか。(拙訳)

しかし、(272) は“因为”文でありながら、p の“一时过分心软 (一瞬気弱になった)”が q を構成する命題の“永远充当奴隶 (永遠に奴隷にならなければいけない)”を導くことができないと話し手が判断している。即ち、第 2 章で述べた原因節が焦点化されると意味的变化が大きい文である。このような“因为”文は p という原因が q という結果を導くことに対する疑念または否定を表すため、

疑念を表す“因为”文と本研究で呼ばれる。このような“因为”文と疑念を表す“既然”文との区別も明らかにする必要がある。

- (272) 难道他因为一时过分心软便要永远充当奴隶吗？(BCC:帕斯捷尔纳克《日瓦戈医生》)

彼は一瞬気弱になったがために、永遠に奴隷にならなければいけないのか。(拙訳)

なお、“既然”文と“如果”文が一定の条件のもとで言い換えられると指摘しているのは、黄文龙(1998)、邢福义(2001)、王麦巧(2008)などがある。

黄文龙(1998)は、疑念を表す“既然”文の“既然”を“如果”に言い換えても、意味はほとんど変わらないと指摘している。例えば(273)の“既然”を“如果”に置き換えても、文は成立し、“那个人可能不是徐邦呈的领导人(あの人は徐邦呈の上司ではないかも)”というpを疑う意味もほとんど変わらない。

- (273) 从间谍工作的常识看,接头时,应当由身份高的一方处于主动地位,以便能视现场情况自由进退。既然/如果去接头的那个人是徐邦呈的领导人,为什么要安排那个人持有识别标志呢?这样,被领导者岂不是比领导者更安全了吗?(黄文龙 1998:p.89)

スパイという仕事の常識からみると、現場の状況から進退の判断を自由にするためには、連絡を取るとき、上司に主導権を持たせるべきだ。連絡を取って来た人が徐邦呈の上司であるのなら、どうしてあの人に識別マークを持たせたのか。そうしたら、部下のほうが上司より安全になるではないか。(拙訳)

さらに、疑念を表す“既然”文の“既然”を“如果”に置き換えることが可能であるため、以下の(274)に“既然”、“如果”のどちらを入れても可能であると主張している。

(274) 至于舆论,在未庄是无异议,自然都说阿Q坏,被枪毙便是他的坏的证据,(? 既然/如果)⁶³不坏又何至于被枪毙呢?(黄文龙 1998:p.89)

世論についていえば、未荘では、一人の異議もなく、当然、阿Qが悪いということであった。銃殺に処せられたのは、その何よりの証拠である。悪くもない のに、銃殺にされるわけがないではないか。(日中:『呐喊』)

しかし、母語話者10人に対するアンケート調査結果によると、“如果”を入れると違和感を持つと回答した人数は0である一方、“既然”を入れると違和感を持つと回答した人数は6人いる。そのため、ここで「？」を入れ、疑念を表す“既然”文と反事実“如果”文の交替性について再考察し、両複文の使い方の相違点により、疑念を表す“既然”文の独特な特徴を洗い出す。

以上をまとめると、疑念を表す“既然”文は以下の特徴を持つことがわかる。

- ① 意味上、pは既知の事実を表しているように見えるが、実際には話し手がpに対する疑念或いは否定を表す“既然”文である。
- ② 表現形式上、明確な特徴がないが、qが疑問文または否定文であることが多く見られる。

しかし、表現形式上一般“既然”文と区別することが難しいため、前提及び焦点のような語用論的視点から区別する試みが必要である。

さらに、先行研究で指摘されている疑念を表す“既然”文と“因为”文の区別及び疑念を表す“既然”文と“如果”文の交替可能性について、以下の問題点がある。

- ① 疑念を表す“既然”文と“因为”文について、前者におけるqはpが導く結果と正反対である内容または常識外れの内容を表しているが、後者におけるqの内容は決してpが導く結果と正反対であることはない、黄文龍(1998)が主張している。しかし、“因为”文では、(272)のような反例が存在するため、このような“因为”文と疑念を表す“既然”文の区別を再考察する必要がある。

⁶³ 括弧の中の内容は、筆者によるものである。

- ② 疑念を表す“既然”文と“如果”文について、黄文龙(1998)は両者が基本的に交替可能であると主張しているが、(274)のような、言い換えると違和感がある例も存在しており、両複文の異同について詳しく分析し、疑念を表す“既然”文の独特な特徴を明らかにする必要がある。

次の 4.3 では、一般“既然”文との対照分析を行い、疑念を表す“既然”文の特徴を明らかにする。4.4 では“如果”文との対照分析を行い、4.5 では、疑念を表す“因为”文との対照分析を行う。その両複文との対照分析により、疑念を表す“既然”文の複文としての独特性及び語用論的機能を明らかにする。

4.3 疑念を表す“既然”文の特徴及び前提と焦点

本節では、一般“既然”文と比較しながら、疑念を表す“既然”文の特徴について論じており、前提と焦点に関する分析を行う。

表現形式からみると、疑念を表す“既然”文の場合、p が陳述文であり、q が疑問文・命令文または陳述文の否定表現である例は圧倒的に多い。しかし q が陳述文の肯定表現である例は、少ないながらも存在する。今回、コーパスから収集した疑念を表す“既然”文 100 例の中で、q が疑問文、命令文、陳述文の否定表現と陳述文の肯定表現である用例数は、それぞれ 62、19、15、4 であった。従って、p、q の構文形式から疑念を表す“既然”文と一般“既然”文との区別が付かない。

それゆえ、疑念を表す“既然”文の特徴を考察するには、構文形式ではなく、文の意味的表現に注目すべきだと考える。

定義からみると、疑念を表す“既然”文と一般“既然”文の最も大きな相違点は話し手が p に対する態度である。一般“既然”文では、話し手は p を会話双方の共有知識または聞き手が反論しない事実、即ち、文の前提であると見なしている。一方、疑念を表す“既然”文では、話し手が p に対して疑念を抱くまたは否定したいため、p は文の前提と認識されにくい。

この区別については、黄文龙(1998)、邢福义(2001)、徐阳春(2002)などがすでに述べている。さらに、钟小勇・张霖(2013)は、ライテストを用い、一般“既然”文の p が前提であることを証明している⁶⁴。

本節では、钟小勇・张霖(2013)と同じ研究方法を用いて、疑念を表す“既然”文の p、q が文の前提であるか情報的焦点であるかについて考察する。

また、“因为”文及び反事実“如果”文に対する考察と同じく、「“否则”テスト」を用いて、p、q が文の対比的焦点になる可能性を検証する。

さらに、その結論を通して、疑念を表す“既然”文と一般“既然”文の区別を明らかにし、両者の情報構造から区別される条件をまとめ、同一文に多義性が生じる理由と多義性による曖昧さを回避する方法についても分析する。

4.3.1 ライテストによる考察

まず、ライテストを用いて、疑念を表す“既然”文の p、q が前提であるかについて検証を行う。その方法は、钟小勇・张霖(2013)と同じく、文を否定し、否定されるのは p であるか q であるかについて判断する。しかし、以下の 3 点を補足する。

- ① 定義によると、話し手は p に対する疑念を抱くまたは否定したいので、ライテストで疑念を表す“既然”文を否定する際に、p を否定するのではなく、 $\neg p$ (= p が偽であること) を否定すべきである。即ち、 $\neg p$ は前提であるか否かについて検証を行う。
- ② 疑問文と命令文は命題ではないので、q が疑問文または命令文である場合、q を構成する命題を否定する。しかし、記述上便宜のため、「q を否定する」という表現に統一する。
- ③ 前述のように、ライテストにより検証するのは p、q の事実性である。

さらに、検証を行う前に、p、q の関係により、疑念を表す“既然”文を以下の 2 種類に分類する。

⁶⁴ 1.2.2 を参照。

① q が p の推論と正反対な内容を表す文

② q が p の推論と一致する文

前者は黄文龙(1998)で指摘されている疑念を表す“既然”文の特徴と一致する文であり、後者は、黄文龙(1998)で指摘されている疑念を表す“既然”文の特徴と一致しない文である。なお、構文形式からみると、前者の q は「疑問詞+命題」で構成される疑問文であるのが一般的であり、後者の q は命令文または陳述文であるのが一般的である。

4.3.1.1 q が p の推論と正反対な内容を表す文に関する考察

まず、(275) ~ (278) のような q が p の推論と正反対な内容を表す文について考察を行う。この 4 例では、一般常識に基づく p から推論された結果が $\neg q$ であるという慣習的前提⁶⁵を持っているが、文の論理関係に基づく結果は q である。例えば、(275) では、一般常識に基づく慣習的な前提は、p である“那么穷 (あんなに貧しい)”から $\neg q$ である“不能天天吃肉 (毎日肉を食べることができない)”という結果を推論する。一方、実際の文の論理関係に基づく結果は q の“天天有肉吃 (毎日肉が食べられる)”であり、一般常識に基づく結果と正反対である。

今回収集した用例を見ると、このような文のすべては、q が疑問文の例である。そのため、ライテストで検証する際に、 $\neg p$ と q を否定する。以下の各例の中で、B1 は $\neg p$ を否定する文であり、B2 は q を否定する文である。

(275) 既然那么穷, 为什么却天天有肉吃? (邢福义 2001:p.369)

B1:不是这样的, (虽然天天有肉吃, 但)我真的那么穷。

B2:*不是这样的, 我不是天天有肉吃。

あんなに貧しい なら、なぜ毎日肉が食べられるのか。(拙訳)

B1:違う, (毎日肉は食べられるが,) 本当にあんなに貧しいのだ。

⁶⁵ 加藤(2004)及び馬(2017)の用語を援用する。

B2: * 違う、毎日肉が食べられるのではない。

- (276) “她为啥要挑唆高二林分家呢？”“她想进门当家把钥匙，好拉着高二林‘发家致富’走歪门邪道。”“她**既然**打好了这样的如意算盘，为啥跟二林搞着搞着对象凉了、远了；忽一下子又热了、又近了呢？”
(日中:《金光大道》)

B1: 不是这样的，(虽然她跟二林搞着搞着对象凉了、远了；忽一下子又热了、又近了，但)她真的打好了这样的如意算盘。

B2: * 不是这样的，她没有跟二林搞着搞着对象凉了、远了；忽一下子又热了、又近了。

「銭彩鳳はなんで高二林をそそのかして分家させようとするんじゃ？」「あの人は嫁にいて所帯を握って、高二林を『身上作り』の邪道に引っぱり込む魂胆なんだわ」「あの女がそういうソロバンはじいてん**なら**、なんで二林との仲が冷めて、遠ざかってみたり、またいきなり繕いを戻して熱くなったりするのかね？」(日中:『輝ける道』・修正あり⁶⁶)

B1: 違う、(二林との仲が冷めて、遠ざかってみたり、またいきなり繕いを戻して熱くなったりするが、)本当にそういうソロバンをはじめていたのだ。

B2: * 違う、二林との仲が冷めて、遠ざかってみたり、またいきなり繕いを戻して熱くなったりしなかった。

- (277) 有的顾客不免就要嚷嚷起来，追究她的服务态度，先是她，后来又必然有其他同事凑拢来，向那顾客理直气壮地申明：“这是我们的业务，你懂吗？不清点行吗？清点的时候就没必要理你！”有的顾客或者还要质问：“你们**既然**清点的时候不接待顾客，那干吗不到后头清点去？”(日中:《钟鼓楼》)

⁶⁶ 誤訳を修正した。「いっぺんにふりかえして」から「いきなり繕いを戻して」に変更した。

B1:不是这样的,(虽然我们不去后头清点,但)我们清点的时候不接待顾客。

B2:*不是这样的,我们到后头清点去。

すると、サービスが悪いと言って怒る客も出てくる。はじめのうちは彼女一人で、しばらくするときっと仲間が応援にきて、正攻法に出る。“これはわたしたちの仕事のうちよ。わからないの？勘定しなくちゃいけないのよ。勘定のときはあんたたちの相手をする必要がないのよ”。客の中には、“勘定のときは客を対応しないんだ”たら、中でやればいいじゃないか”と、問い返す者もいるだろう。(日中:『鐘鼓楼』)

B1:違う、(中にやらなくても、)勘定の時は、客を対応していないのだ。

B2:*違う、中でやる。

(278) 既然对那儿如此情深,又何必委屈到北京来呢?用你的北京户口换一个陕西户口还不容易吗?(日中:《插队的故事》)

B1:不是这样的,(虽然我到北京来了,但)我对那儿真的情深。

B2:*不是这样的,我没到北京来。

そんなにそこが恋しいのなら何も北京で我慢していることはない。きみの北京の戸籍を陝西へ移すのは簡単だ。(日中:『遙かなる大地』)

B1:違う、(北京に来たが、)本当にそこが恋しいのだ。

B2:*違う、私は北京に来なかったのだ。

ライテストの結果によると、以上の4例はいずれも文を否定する際に、 $\neg p$ が否定され、 q が否定されないという特徴を持つ。従って、 $\neg p$ は文の情報の焦点であり、 q は文の前提であると認識しうる。具体的に分析すると、この4例の q は、いずれも否定されにくい特徴を持っている。例えば、(275)では、 q を構成する命題である“天天有肉吃”はすでに発生した上で確認済みの事実であると文の意味から判断しうる。(276)と(278)の q を構成する命題である“跟二林搞着搞着对象凉了、远了;忽一下子又热了、又近了(二林との仲が冷めて、

遠ざかってみたり、またいっぺんにふりかえして熱くなったりしている)”及び“到北京来(北京に来た)”も同じく、すでに発生した事実であることは文の意味や波線部の後続文から判断できる。なお、(277)のqを構成する命題である“不到后头清点(中でやらない)”はすでに発生した事実ではないが、店員である聞き手が営業時間内にカウンターから去って店の中で勘定することはルール違反になるという一般常識を踏まえた上で、聞き手が“我可以去后头清点(中でやるよ)”のように反論することが難しい。さらに、(278)のqである“委屈到北京来(北京で我慢している)”もすでに確認済みの事実であるほかに、聞き手が北京の戸籍を手に入れるには相当な苦勞が必要であり、一旦転出すると再び北京の戸籍を入手するのは困難であるなどの常識を踏まえて考えると、“我不要北京户口了(北京の戸籍を放棄する)”のように反論することが難しいと考える。

一方、qが疑問文である一般“既然”文の場合、(279)と(280)に示されるように、上述の疑念を表す“既然”文の用例と同じくqはpから推論される内容と正反対である条件を満たしているが、pは否定されなく、qは否定されることが可能である。

(279) 既是全村的公路，怎么咱们抬着棺材过一下都不行？(黄文龙 1998:p.88)

B1: *不是这样的，这不是全村的公路。

B2: 不是这样的，你们可以抬着棺材过。

村の公道であるのたから、なぜ棺桶を運んで通過してはいけないのか。

(拙訳)

B1: *違う、ここは村の公道ではない。

B2: 違う、君たちは棺桶を運んで通過してもいい。

(280) 既然说谎不对，为什么却老是说谎？(邢福义 2001:p.368)

B1: *不是这样的，说谎对。

B2: 不是这样的, 我没有老是说谎。

嘘をついてはいけないの**だから**, なぜよく嘘をつくのか。(拙訳)

B1:*違う、嘘はついてもいい。

B2:違う、私は嘘をついていないのだ。

具体的に分析すると、(279)における一般常識に基づく慣習的な前提は、pである“这是全村的公路（村の公道である）”から $\neg q$ である“我们可以抬着棺材过一下/我们可以正常使用（棺桶を運んで通過してもいい/村人は普通に使用することが可能である）”という結果を推論する。一方、実際の文の論理関係に基づく結果はqの“抬着棺材过一下都不行（棺桶を運んで通過してはいけない）”であり、一般常識に基づく結果と正反対である。(280)も同じ論理関係を示している。

しかし、ライテストで検証した結果、この2例のpは、どちらも否定することができない。その理由は、pが反論されにくい特徴を持っていることである。例えば、(279)のpである“这是全村的公路（村の公道である）”は確認済みの事実であることは、文の意味からの判断であり、(280)のpである“说谎不对（嘘はついてはいけない）”は一般常識であるため、どちらも反論することが難しい。それに対し、qは確認済みの事実ではなく、聞き手により否定することも可能であるので、情報の焦点であると判断しうる。

以上をまとめると、qが疑問文である場合、疑念を表す“既然”文の $\neg p$ は情報の焦点であり、qは文の前提である。一方、一般“既然”文の場合、たとえqはpから推論される内容と正反対である内容を表しても、钟小勇・张霖(2013)の結論と同じく、pは前提であり、qは文の情報の焦点である。

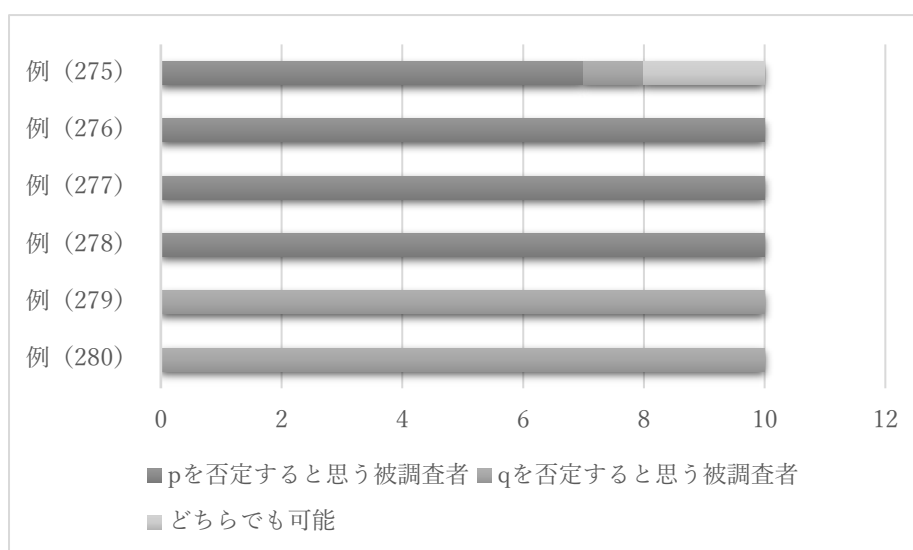
一方、この結論に対し、問題点は以下の2点がある。

- ① 以上の疑念を表す“既然”文の例に対するアンケート調査からみると、被調査者10人のうち、全員は(276)～(278)を否定すると、qと認識しているが、(275)を否定すると、pを否定すると判断する被調査者が1人

おり、どちらを否定することも可能であると判断する被調査者が 2 人いる。具体的な調査結果は【図 13】に示す。

- ② (280) では、 p を構成する命題である“你老是说谎（よく嘘をついている）”は、確認済みの事実である可能性もあるが、なぜこの文は疑念を表す“既然”文と認識されることができないのか。

以上の 2 点について、次の 4.3.2 及び 4.3.3 節で詳しく分析する。



【図 13】(275) ~ (280) のライテスト結果に関する調査

4.3.1.2 q が p の推論と一致する内容を表す文に関する考察

次に、黄文龙(1998)など伝統的研究で指摘されている一般“既然”文が持つ特徴と同じく、 q が p から得られた推論と一致するが、疑念を表す“既然”文に属する用例を考察する。このような疑念を表す“既然”文は、以下の(281)~(283)のように、 q が命令文や陳述文であるのが一般的である。

この 3 例では、いずれも q が p の推論と一致する用例である。例えば、(281)では、 p である“不肯现身（ここで出てきてくれない）”から、 q である“强请（強制的に出てきてもらう）”を推論するのは、慣習的前提による推論であると見なされる。

従って、この3例は、話し手が疑うまたは否定したい命題 p から q を推論できるため、反事実“如果”文と同じく $p \rightarrow q$ の対偶を取り、 $\neg q \rightarrow \neg p$ という形式で、ライテストを受ける必要がある。

以下の各例の A~B2 はそれぞれ対偶を取る文、 $\neg p$ を否定する文、 $\neg q$ を否定する文である。4.3.1.1 で用いる方法と同じく、対偶文 A を否定する時、 $\neg p$ に対する否定を表す B1 の成立可否により、 $\neg p$ が前提であるか情報的焦点であるかを検証し、 $\neg q$ に対する否定を表す B2 の成立可否により、 $\neg q$ が前提であるか情報的焦点であるかを検証する。

(281) 姑娘**既**不肯就此现身，小王只好强请了。(徐阳春 2002:p.126)

A:**既然**不让我强请，姑娘就要就此现身。

B1:不是这样的，我不现身。

B2: *不是这样的，你可以强请。

あなたがここで出てきてくれないの**なら**、強制的に出てきてもらうよ。(拙訳)

A:私が強制的にあなたを出させるのを許さないの**なら**、ここで出てきなさい。

B1:違う、私は出て行かない。

B2:*違う、強制的に出させてもよい。

(282) **既然**教师的职责只是教大家怎样去做不用对结果负责任，**那么**教师就可以放心地胡说八道了。(BCC:谢德军《大智慧》)

A:**既然**教师不可以放心地胡说八道，教师的职责就不只是教大家怎样去做不用对结果负责人。

B1:不是这样的，教师的职责就只是教大家怎样去做不用对结果负责任。

B2:*不是这样的，教师可以放心地胡说八道。

教師の責任とは専ら、結果に責任を負わないでいい方法を教えるであるの^{なら}、でたらめ言い放題になるよ。(拙訳)

A:教師がでたらめを言うことができないの^{なら}、教師の責任は結果に責任を負わないでいい方法をみんなに教えることだけではない。

B1:違う、教師の責任は結果に責任を負わないでいい方法をみんなに教えることしかないのだ。

B2:*違う、教師はでたらめを言ってよい。

(283) ^{既然}你们医院这么不肯帮忙，咱们就熬着吧。(徐阳 2002:p.125)

A:^{既然}不愿意熬着，你们医院就要肯帮忙。

B1:不是这样的，我们医院真的不能帮忙。

B2: *不是这样的，咱们可以熬着。

あなたたち病院側がこれっぽっちも助けてくれないの^{なら}、この対立を続けよう。(拙訳)

A:この対立状態を続けたくないの^{なら}、あなたたち病院側は助けてくれないといけない。

B1:違う、私たち病院側は本当に助けられないのだ。

B2: *違う、この対立は続けてもよい。

ライテストからみると、以上の3例の $\neg q$ はどちらも否定しにくい。その理由は q が疑問文である例と同じく、文脈や文の意味から判断すると、 $\neg q$ はすでに確認済みの事実であるか、一般常識であるか、または聞き手にとって否定すれば不利益な状況をもたらすかの内容を表しているからである。例えば、(283)では、患者と対峙するのが病院側にとって名誉損害になるという慣習的な前提に基づいて、“咱们就熬着吧(この対峙状態を続けよう)”は病院側にとって明らかに不利な場面であるため、聞き手は $\neg q$ を否定する、言い換えれば q を認めることが難しいと判断しうる。

以上の分析をまとめると、疑念を表す“既然”文は q の構文形式と表される内容により分類すると、以下の 2 種がある。

① q が p の推論と正反対な内容を表す文

このような文では、 $\neg p$ は文の情動的焦点であり、 q は文の前提である。

q が疑問文である用例は一般的にこの種の例である。

② q が p の推論と一致する文

このような文では、 $\neg p$ は文の情動的焦点であり、 $\neg q$ は文の前提である。

q が命令文または陳述文である用例は一般的にこの種の例である。

一方、钟小勇・张霖(2013)の結論及び本研究での考察によれば、一般“既然”文の p 、 q の関係とは関わらず、 p が文の前提であり、 q が文の情動的焦点である。即ち、疑念を表す“既然”文と一般“既然”文の前提と情動的焦点は逆であり、前者において否定されにくいのは q (または $\neg q$) である一方、後者において否定されにくいのは p である。

4.3.2 「“否则”テスト」による考察

4.3.1 では、ライテストを用いて、疑念を表す“既然”文の前提と情動的焦点について検証した。その結論として、 p は文の情動的焦点であり、 q の構文形式により、 q または $\neg q$ は文の前提であることが判明した。それは一般“既然”文と逆であることがわかる。即ち、疑念を表す“既然”文は、第 3 章で論じた ii 類の反事実“如果”文と似ている表現であり、反論されにくい $q/\neg q$ を前提とし、 p が偽であることを証明する文であると考えうる。

しかし、反事実“如果”文と同じく、その証明過程の解釈装置を明確にするには、文の対比的焦点も明らかにする必要がある。そのため、「“否则”テスト」を用いて、疑念を表す“既然”文の p と q は対比的焦点になれるか否かについて検証し、一般“既然”文との比較分析も行う。

4.3.2.1 q が p の推論と正反対な内容を表す文に関する考察

まず、q が p の推論と正反対な内容を表す文について考察を行う。対照分析を行うために、ライテストで検証する時と同じ例文を使用する。

前述のように、このような文はどちらも $\neg p$ と q が真であり、慣習的前提に基づく p からの推論は q ではなく、 $\neg q$ である。そのため、この種の文を意味的解釈により言い換えれば、(284) になる。

(284) 既然 p, 就 $\neg q$, 为什么 q?

*p*ならば $\neg q$ 、なぜ*q*なのか。

従って、以下、C文では、“p, 就 $\neg q$, 否则 q (pならば $\neg q$ 、さもなければ $\neg q$)”という構文により p が対比的焦点であるか否かについて検証を行う。また、D文では、“p, 就 $\neg q$, 否则 $\neg p$ (pならば $\neg q$ 、さもなければ $\neg p$)”という構文により $\neg q$ が対比的焦点であるか否かについて検証を行う。文が成立する場合、検証された部分は文の対比的焦点であり、文が成立しない場合、検証された部分は文の対比的焦点ではないと判断する。

(285) 既然那么穷, 为什么却天天有肉吃?

C: *既然那么穷, 就不会天天有肉吃, 否则就天天吃肉了。

D: 既然那么穷, 就不会天天有肉吃, 否则你根本不穷。

A: あんなに貧しいのに、なぜ毎日肉が食べられるのか。

C: *あんなに貧しいなら、毎日肉が食べられるわけがない。さもなければ毎日肉が食べられるのだ。

D: あんなに貧しいなら、毎日肉が食べられるわけがない。さもなければ全く貧しくないよ。

(286) 她既然打好了这样的如意算盘, 为啥跟二林搞着搞着对象凉了、远了; 忽一下子又热了、又近了呢? (日中:《金光大道》)

C: *她既然打好了这样的如意算盘, 就不会跟二林搞着搞着对象凉了、远了; 忽一下子又热了、又近了。否则她会跟二林这样做了。

D: *她既然打好了这样的如意算盘, 就不会跟二林搞着搞着对象凉了、远了; 忽一下子又热了、又近了。否则她根本就没有打什么如意算盘。

「銭彩鳳はなんで高二林をそそのかして分家させようとするんじゃ?」「あ
の人は嫁にいつて所帯を握って、高二林を『身上作り』の邪道に引っぱ
り込む魂胆なんだわ」「あの女がそういうソロパンはじいてんなら、なんで
二林との仲が冷めて、遠ざかってみたり、またいきなり繕いを戻して熱くな
ったりするのかね?」(日中:『輝ける道』)

C: *あの女がそういうソロパンはじいてんなら、二林との仲が冷めて、遠ざ
かってみたり、またいきなり繕いを戻して熱くなったりしないよ。さもなけれ
ば、二林との仲がきつこうなるのだ。

D: あの女がそういうソロパンはじいてんなら、二林との仲が冷めて、遠ざ
かってみたり、またいきなり繕いを戻して熱くなったりしないよ。さもなけれ
ば、全然そういうソロパンはじいていないよ。

(287) 有的顾客不免就要嚷嚷起来, 追究她的服务态度, 先是她, 后来又必然有其他同事凑拢来, 向那顾客理直气壮地申明: “这是我们的业务, 你懂吗? 不清点行吗? 清点的时候就没必要理你!” 有的顾客或者还要质问: “你们既然清点的时候不接待顾客, 那干吗不到后头清点去?” (日中:《钟鼓楼》)

C: *你们既然清点的时候不接待顾客, 那就去后头清点吧。否则你们就别去后头清点。

D: 你们既然清点的时候不接待顾客, 那就去后头清点吧。否则你们就赶快接待顾客。

すると、サービスが悪いと言って怒る客も出てくる。はじめのうちは彼女一人で、しばらくするときっと仲間が応援にきて、正攻法に出る。“これはわたしたちの仕事のうちよ。わからないの？勘定しなくちゃいけないのよ。勘定のときはあんたたちの相手をする必要がないのよ”。客の中には、“勘定のときは客を対応しないんだったら、中でやればいいじゃないか”と、問い返す者もいるだろう。(日中:『鐘鼓楼』)

C: *勘定のときは客を対応しないんだったら、中でやりなさい。さもなえれば、中でやらないで。

D: 勘定のときは客を対応しないんだったら、中でやりなさい。さもなえれば、早く客を対応しなさい。

(288) 既然对那儿如此情深，又何必委屈到北京来呢？用你的北京户口换一个陕西户口还不容易吗？(日中:《插队的故事》)

C: *既然对那儿如此情深，就別委屈到北京来，否則你就委屈来北京。

D: 既然对那儿如此情深，就別委屈到北京来，否則你对那儿根本就没有这么情深。

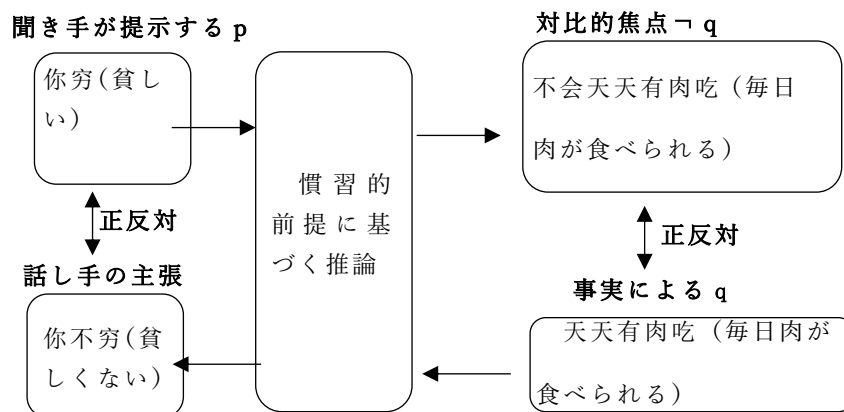
そんなにそこが恋しいのなら何も北京で我慢していることはない。きみの北京の戸籍を陝西へ移すのは簡単だ。(日中:『遙かなる大地』)

C: *そんなにそこが恋しいのなら北京で我慢していることはない。さもなければ、北京で我慢しなさい。

D: そんなにそこが恋しいのなら北京で我慢していることはない。さもなければ、そんなにそこが恋していないじゃない。

以上の各例に対するテストの結果から、 $\neg q$ は文の対比的焦点であることがわかる。(285)を例として分析すると、その意味的解釈は【図 14】に示される。具体的に解釈すると、話し手は聞き手が提示している p を理由として、慣習的前提に基づいて推論を行う。得られたのは〔+排他〕という特徴を持つ対比的焦点 $\neg q$ である。即ち、 p から推論される結果は $\neg q$ のみであり、 q を推論するこ

とが不可能であると強調している。しかし、この $\neg q$ は Reality のスペースで確認済みの事実である q と正反対であるので、 q が p から推論されない結果であるということを証明することができる。なお、 $p \rightarrow \neg q$ の対偶命題を取ることにより、 q という結果を得る理由は $\neg p$ しかないということが証明される。



【図 14】(285) の対比的焦点である $\neg q$ の排他性の意味解釈

従って、 q が疑問文である疑念を表す“既然”文の意味解釈の本質は、 $\neg q$ が対比的焦点であることを強調することにより、 p が偽であることを証明するものである。

4.3.2.2 q が p の推論と一致する内容を表す文

次に、 q が p の推論と一致する内容を表す文について検証を行う。対照分析を行うために、ライテストで検証する時と同じ例文を使用する。

前述のように、このような文は、一般“既然”文と同様に、慣習的前提に従って、 p から q を推論することが可能であるため、「否则”テスト」も一般“既然”文と同じ方法を用いる。即ち、C 文で“既然 p , 就 q , 否则 $\neg q$ (p ならば q 、さもなければ $\neg q$)”という形式で p が対比的焦点である否かについて検証する。D 文で“既然 p , 就 q , 否则 $\neg p$ (p ならば q 、さもなければ $\neg p$)”という形式で q が対比的焦点であるか否かについて検証する。

- (289) 姑娘既不肯就此现身，小王只好强请了。(徐阳春 2002:p.126)
- C:*姑娘既不肯就此现身，小王只好强请了。否则我就不强请。
- D:姑娘既不肯就此现身，小王只好强请了。否则就请快点儿出来吧。
- あなたがここで出てきてくれないのなら、強制的に出てきてもらいますよ。
(拙訳)
- C:*あなたがここで出てきてくれないのなら、強制的に出てきてもらいますよ。さもなければ強制的に出てきてもらわない。
- D: あなたがここで出てきてくれないのなら、強制的に出てきてもらいますよ。さもなければ早く出てきなさい。
- (290) 既然教师的职责只是教大家怎样去做不用对结果负责任，那么教师就可以放心地胡说八道了。(BCC:谢德军《大智慧》)
- C:*既然教师的职责只是教大家怎样去做不用对结果负责任，那么教师就可以放心地胡说八道了，否则教师不可以放心地胡说八道。
- D:既然教师的职责只是教大家怎样去做不用对结果负责任，那么教师就可以放心地胡说八道了，否则教师的职责就不只是教大家怎样去做不用对结果负责。
- 教師の責任とは専ら、結果に責任を負わないでいい方法を教えるであるのなら、でたらめを言い放題になるよ。(拙訳)
- C:*教師の責任が、結果に責任を負わないでいい方法をみんなに教えることしかないのなら、でたらめを言い放題になるよ。さもなければ、でたらめを言い放題にならない。
- D: 教師の責任が、結果に責任を負わないでいい方法をみんなに教えることしかないのなら、でたらめを言い放題になるよ。さもなければ、教師の責任は結果に責任を負わないでいい方法をみんなに教えるだけではない。
- (291) 既然你们医院这么不肯帮忙，咱们就熬着吧。(徐阳 2002:p.125)

C: ***既然**你们医院这么不肯帮忙, 咱们**就**熬着吧, 否则就不要熬着。

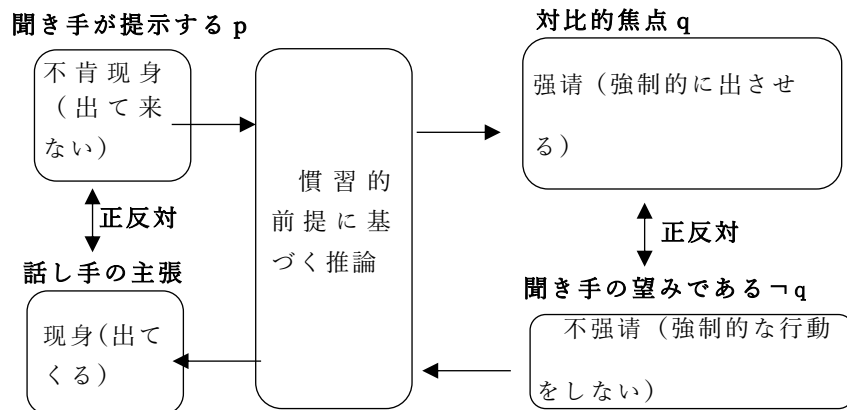
D: **既然**你们医院这么不肯帮忙, 咱们**就**熬着吧, 否则你们就得帮忙。

あなたたち病院側がこんなに助けてくれないの**なら**, この対立を続けよう。
(拙訳)

C: *あなたたち病院側がこんなに助けてくれないの**なら**, この対立を続けよう。さもなければ、この対立をやめる。

D: あなたたち病院側がこんなに助けてくれないの**なら**, この対立を続けよう。さもなければ、早く助けてくれ。

以上の (289) ~ (291) の 3 例に対する考察結果を見ると、p は文の対比的焦点になれず、q は文の対比的焦点になると判明した。それは q が疑問文である例とほぼ同じシステムで解釈することが可能である。ここでは、(289) を例として意味解釈装置を分析し、【図 15】になる。



【図 15】(289) の対比的焦点である q の排他性の意味解釈

この例では、聞き手の行動を表す p である“姑娘不肯现身（あなたは出て来ない）”から、q である“强请（強制的に出させる）”という話し手の行動を推論することが可能である。さらに、この q を対比的焦点とするため、p から q という結果しか導かないことが強調される。しかし、だれでも無理やりさせることをしたくないという慣習的な前提に基づき、この q は話し手の望みと正反対で

あることがわかる。そのため、 $p \rightarrow q$ の対偶命題を取ることににより、 $\neg q$ という結果を得るために、 $\neg p$ という条件を満たすしかないということが強調される。

従って、 q が命令文または陳述文である疑念を表す“既然”文の意味解釈の本質は、聞き手にとって認められにくい q を対比的焦点として強調することにより、 q を否定したいのなら $\neg p$ という条件を満たさなければならないことを強調するものである。

4.3.2.3 一般“既然”文に関する考察

本節の最後に、対照分析のため、一般“既然”文の対比的焦点について考察を行う。

実例からみると、一般“既然”文は疑念を表す“既然”文と異なり、必ずしも対比的焦点があるとは限らない。例えば、以下の (292) と (293) は q が p の推論と正反対な内容を表す文であり、(294) はそうでない文である。それぞれ疑念を表す“既然”文と同じ方法で検証した結果、C 文と D 文はどちらも成立せず、即ち、 p と q はどちらも対比的焦点になれず、〔+排他〕という特徴を持っていない。

(292) (= (268)) **既然**还在咳嗽，为什么却又来加班？

C: ***既然**还在咳嗽，就不该来加班。否则你就加吧。

D: ***既然**还在咳嗽，就不该来加班。否则你根本就没咳嗽。

まだ咳をしているの**なら**、なぜ休日出勤するのか。

C: *まだ咳をしているの**なら**、休日出勤はやめなさい。さもなければ、出勤してもいい。

D: *まだ咳をしているの**なら**、休日出勤はやめなさい。さもなければ、もう咳をしていないじゃない。

(293) **既然**人家没惹你，你为什么却总是惹人家？(邢福义 2001:p.368)

C: ***既然**人家没惹你，你就不该总是惹人家。否则你惹他也可以。

D: *既然人家没惹你, 你就不该总是惹人家。否则就是人家惹你了。

あの人とは君と喧嘩しないのに, なぜ君はあの人と喧嘩するのか。(拙訳)

C: *あの人とは君と喧嘩しないのだから, 君はあの人と喧嘩するのはいけないのだ。さもないれば、あの人と喧嘩してもよい。

D: *あの人とは君と喧嘩しないのだから, 君はあの人と喧嘩するのはいけないのだ。さもないれば、あの方は君と喧嘩したのだ。

(294) 白老太太长叹了一口气道：“既然是叫你去，你就去罢！”（徐阳春 2002:p.129）

C: *既然是叫你去，你就去罢！否则你就别去。

D: *既然是叫你去，你就去罢！否则就是没叫你去。

「あなたを行かせるのたから, 行きなさい。」と白ばあさんがため息をついて言った。(拙訳)

C: *あなたを行かせるのたから, 行きなさい。さもないれば、行かなくていい。

D: あなたを行かせるのたから, 行きなさい。さもないれば、あなたを行かせないのだ。

一方、今回収集した実例の中で、(295) と (296) のような“既然 p, 就 q, 不然 $\neg p$ ”の構文が 3 例ある。“不然”も“否则”と同じく「さもないれば/そうでなければ」の意味を表しているので、「“否则”テスト」とも見なされる。以下の 2 例のうち、(295) は q が p の推論と正反対な内容を表す文であり、(296) はそうでない文である。この 2 例のいずれも後続の“不然 $\neg p$ ”により、q または $\neg q$ が対比的焦点であることを判明しうる。

(295) 既然你参与抢救, 那干嘛不人工呼吸呀? 不然就不要参与。(BCC)

救急活動に参加したのに、なぜ人工呼吸をしないのか。さもないれば、参加する意味がない。(拙訳)

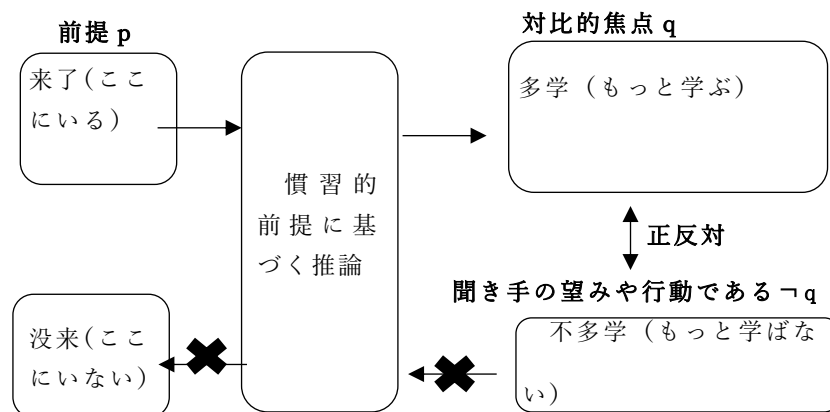
(296) **既然**来了就多学, 不然来干嘛呢?(BCC)

ここにいる**以上**, もっと学びなさい。さもなければ、なぜここにいるのか。

(拙訳)

しかしながら、この2例を観察すると、疑念を表す“既然”文と大きな区別がある。それは、“不然”により否定されたのは、pという事実ではなく、pの必要性である。

そのため、【図 16】に示されるように、 $\neg q \rightarrow \neg p$ という対偶を取れず、pが偽であることを証明することや、 $\neg q$ を成立させる唯一の条件 $\neg p$ を強調することなど、疑念を表す“既然”文の意味的機能を果たすことができない。一般“既然”文のqが対比的焦点である場合、pというすでに確認済みの前提からほかならぬ、qという結果を必ず導くということを表している。



【図 16】(296)の対比的焦点である q の排他性の意味解釈

4.3.3 疑念を表す“既然”文と一般“既然”文に関する理解のずれ

4.3.1 と 4.3.2 では、「ライテスト」及び「“否則”テスト」を用いて、疑念を表す“既然”文の前提、情報的焦点及び対比的焦点を検証した。一般“既然”文との対照分析によって、疑念を表す“既然”文は以下の2点の特徴があると判明した。

- ① 疑念を表す“既然”文の p の事実性 (=p が偽であること = $\neg p$) は文の情報的焦点であり、q の構文形式及び q と p の推論との関係により、q 或

いは $\neg q$ は文の前提とされる。前提となる q またははすでに確認済みの事実だけでなく、聞き手にとって、反論すると自分にとって不利になるという理由で反論されにくい内容を表す例も散見される。

その結論からみると、 p を前提とし、 q を情報的焦点とする一般“既然”文と逆である。

- ② 疑念を表す“既然”文の q または $\neg q$ は文の対比的焦点である。 q の構文形式により、その対比的焦点及び文の意味的機能は以下の2種類に分けられる。

q が疑問文である場合、対比的焦点は $\neg q$ である。 q が命令文及び陳述文である場合、対比的焦点は q である。この2種の文の本質は同じであり、 p から推論された排他的な結果は事実や常識に反し、または聞き手に不利な状況をもたらす等の理由で、聞き手にとって認められない内容である。聞き手が認めやすいのはその否定命題であるため、命題の対偶を取ることで、 p が偽であることが排他的存在であることを証明するのが、文の意味的解釈である。

一方、一般“既然”文の場合、対比的焦点を持っていない文が一般的である。 q または $\neg q$ が文の対比的焦点になる用例もあるが、 p が偽であることでなく、 q または $\neg q$ の排他性を強調するのみである。

以上の比較から、疑念を表す“既然”文と一般“既然”において、情報的焦点も対比的焦点も一致していないことがわかる。しかし、実際に発話の際には、聞き手の理解により、(297)のような疑念を表す“既然”文を一般“既然”に理解してしまう例が散見される。

- (297) 吴碧波笑道：“我正要找他，你有什么事托他没有？我可以转告。”杨杏园道：“我和他常常见面，有事可以当面说，何必又请你转告。”吴碧波道：“总有吧？你想想看。”杨杏园道：“你这话我真不懂。”吴碧波道：“既然不懂就算了，以后可不要托我。”杨杏园始终没有领悟他

的意思，答应不托他。吴碧波见他沒有口风，也就算了。(BCC:张恨水《春明外史》)

「私はちょうど彼のところに行くから、何か彼に頼みたいことがあるのか。あれば私は伝えてあげるよ。」と吳碧波が笑いながら言った。「私は彼とよく会うから、何かあったら直接言えばいいよ。あなたに伝えてもらう必要がないじゃないか。」と楊杏園が言った。「絶対あるじゃないか。よく考えてみて。」と吳碧波が言った。「あなたが何を言いたいのか、本当にわからないのだ。」と楊杏園が言った。「わからなければいいのだ。今後は私に頼まないでよ。」と吳碧波が言った。しかし楊杏園は吳碧波の意図を理解できなかったから、今後は頼まないと約束した。吳碧波は彼の口裏を探れないため、あきらめた。(拙訳)

(297) では、吳碧波 (=話し手) は楊杏園 (=聞き手) が $\neg q$ である“以后要托我 (今後自分に頼みたい)”を前提とするため、 q である“以后不托我 (今後は私に頼まない)”は楊杏園にとって不利であると想定している。それゆえ、楊杏園が $\neg q$ を望んでいることにより、 $p \rightarrow q$ の対偶を取り、 $\neg p$ である“你这话我懂 (あなたが何を言いたいのがわかる)”を認めることは、話し手の意図である。一方、楊杏園にとって、今後は呉に頼みたいことは前提として認めず、 q を構成する命題である“以后不托吳碧波 (今後は呉に頼まない)”という p から導く結果を受け入れた。即ち、話し手は疑念を表す“既然”文によって p を否定したいが、聞き手はこの文を一般“既然”文として理解し、 q という結果を認めることになる。その理解のずれによって、聞き手に $\neg p$ を認めさせるという目的が失敗し、波線部の後続文に示したように、話し手があきらめた。

(297) から、疑念を表す“既然”文における以下の特徴がわかる。

- ① 疑念を表す“既然”文は話し手と聞き手の理解のずれによって、一般“既然”文と認識される可能性がある。

- ② 疑念を表す“既然”文を一般“既然”文との理解のずれを回避するために、 q または $\neg q$ が前提であることについて、会話双方の認識が一致することが必須である。

例えば、以下の (298) と (299) は聞き手の理解によって、E1 のように疑念を表す“既然”文の意味的機能を果たす場合と E2 のように一般“既然”文の意味的機能を果たす場合に分けることができる。

- (298) 既然你这么慢，就不要怪我咯！（徐阳春 2002:p.139）

E1.好好好，我快点儿走。

E2.好，不怪你，你先走吧，我慢慢走。

あんなに遅いのなら、わたしを責めないでよ。

E1.わかった、わかった、速く歩くから。

E2.いいよ、あなたを責めないから。ゆっくり歩かせて。(拙訳)

- (299) “……既然方丹不喜欢，那我拿去看吧。”说着，他向黎江挤挤眼睛，伸手就把《牛虻》抢了过去。(日中:《轮椅上的梦》)

E1.谁说我/方丹不喜欢了！

E2.好的，你拿去吧。

「…方丹がきらいだっというなら、おれが読む」そう言って、彼は本を引いたくろうとした。(日中:『車椅子の上の夢』)

E1.私/方丹はこの本が好きなのだ。

E2.いいよ、どうぞ。(拙訳)

具体的に分析すると、(298) の $\neg q$ である“怪我（私を責める）”と (299) の $\neg q$ である“我不拿去看（俺が本を持ち帰らない）”は、聞き手の理解によって、反論できない内容（＝反論すると自分自身に不利な状況をもたらす内容）(E1) と反論できる内容（＝反論しても自分自身に不利な影響を与えない内容）(E2)

に分かれる。前者は疑念を表す“既然”文の機能を果たし、後者は一般“既然”文の機能を果たす。

以上の結論を踏まえて、疑念を表す“既然”文の特徴を以下のようにまとめる。

- ① $\neg p$ を情報的焦点とし、聞き手に不利な状況をもたらす q または $\neg q$ を前提とする。
- ② 聞き手にとって不利な状況をもたらす q または $\neg q$ は文の対比的焦点であり、聞き手は自分にとって不利な状況を回避するため、 q または $\neg q$ を否定することにより、やむを得ず $\neg p$ を認める。それは疑念を表す“既然”文の意味的機能である。

4.4 “如果”文との比較

前述のように、“既然”文は“如果”文に相当する「 p なら q 」に訳された用例が多く見られる。前掲の疑念を表す“既然”文の諸例の訳文からも、疑念を表す“既然”文は「なら」と訳されやすいことがわかる。さらに、黄文龙(1998)、邢福义(2001)も、疑念を表す“既然”文と“如果”文の交替可能性を指摘している。

黄文龙(1998)は、疑念を表す“既然”文と反事実“如果”文に交替性があると指摘している。まず、前掲の(273)(= (300))と(301)のように、疑念を表す“既然”文を“如果”文に言い換えることが可能である。

- (300) (= (273)) 从间谍工作的常识看, 接头时, 应当由身份高的一方处于主动地位, 以便能视现场情况自由进退。既然/如果去接头的那个人是徐邦呈的领导人, 为什么要安排那个人持有识别标志呢? 这样, 被领导者岂不是比领导者更安全了吗?

スパイという仕事の常識からみると、現場の状況から進退の判断を自由にするためには、連絡を取るとき、上司に主導権を持たせるべきだ。連絡を取って来た人が徐邦呈の上司であるのなら、どうしてあの人に識別マークを持たせたのか。そうしたら、部下のほうが上司より安全になるではないか。(拙訳)

- 。
- (301) 阿秀真的不肯同有龙睡觉？她**既然/如果**不肯同他睡觉，为什么又答应嫁给他呢？(黄文龙 1998:p.89)

秀ちゃんは本当に有龍と一緒に寝ることを拒否したのか。本当に有龍と一緒に寝ることをしたくないの**なら**、どうして有龍と結婚することに同意しただろう。(拙訳)

黄文龙(1998)では、その理由について以下のように指摘されている。

正因为某些推论因果复句的正句部分产生了与偏句内容相反或不合理的结果，所以，在这种情况下，偏句部分的内容实际上只是一种假设而已，这种推论因果复句与假设复句中的“如果 p”句属于同一性质，两者可以相通。(黄文龙 1998:p.89)

一部の推論因果複文の結果節には、原因節の内容と正反対であるまたは常識外れな結果が生じる。その場合、原因節で表されている内容は仮定の意味しかない。このような推論因果複文は仮定文である“如果 p”文(=“如果”文)と同じ性質を持っているので、お互いに交替性がある。(拙訳)

即ち、疑念を表す“既然”文の p は仮定の意味を表しているため、“如果”と言い換えられる。

また、“如果”文も疑念を表す“既然”文に言い換えることが可能であると指摘されている。

- (302) **如果/既然**不是幽会，为什么会有那样的举动，你给我解释清楚！
(黄文龙 1998:p.89)

デートではなかつ**たら**、どうしてあんな行動があるのか。はっきり説明しなさい！(拙訳)

なお、(303) のような関連詞が省略された文でも、“既然”と“如果”のどちらかを用いて補完することができる。

- (303) (既然/如果) 你没受贿, 你没和叶小娅乱搞, 怎么会三番五次地为西街个协说情? (黄文龙 1998:p.89)

収賄もせず、葉小亞と恋愛関係もないのなら、何回も西町の個人協会のために詫びを入れるなんてしないだろう。(拙訳)

邢福义(2001)も、“质疑性推断(疑念を表す推論)”文、即ち疑念を表す“既然”文を“如果”文に言い換えることが可能であると指摘している(邢福义 2001:p.506)。

本稿で検証したように、疑念を表す“既然”文は反事実“如果”文に言い換えられることを認める。ただし、反事実“如果”文と疑念を表す“既然”文は完全に言い換えられるわけではない。

まず、第3章ですでに述べたように、反事実“如果”文は $\neg p$ の排他性を強調するi類、 $\neg p$ を証明するii類と $\neg p$ を対比的焦点としているが、qの成立可能性という言外の意味を強調するiii類の3種類に分けられる。そのうち、 $\neg p$ を証明するii類のみが疑念を表す“既然”文に言い換えられる。以下の(304)～(306)はそれぞれi類、ii類とiii類の例であるが、(305)のみが疑念を表す“既然”文に言い換えても成立する。

- (304) (= (191)) (如果/*既然) 当时马谡听从王平的劝告, 街亭之战恐怕将是另外一番结局了。

もしあの時、馬謖が王平の忠告に従ってい**たら**、街亭の戦いは別の結末になっただろう。

- (305) (= (151)) (要是/既然) 他能当班长, 母猪也能上树! (李艳洵 2006:p.154)

もし彼が班長になれば、雌の豚も木に登ることができるだろう。

- (306) (= (190)) 如果/*既然我多少成熟一些，我会知趣地走开。可是我是如此珍视自己和她相处的每分每秒，根本就没想过主动离去。

もし私がいくらもう少し成熟していたら、私は物知り顔に離れたらうが、私は彼女と一緒にいる時間の毎分毎秒をこのように貴重に思っていたので、全然自分から離れることは考えなかった。

その理由は、i類とiii類の反事実“如果”文では、対比的焦点が $\neg p$ であるため、疑念を表す“既然”文に言い換えると、対比的焦点は q または $\neg q$ になってしまい、 $\neg p$ が $\neg q$ を成立させる唯一の条件であることを強調する意味から、 p は q という排他的条件しか導かず、 q は事実と反するなどの理由で聞き手にとって認められにくいから、しかたなく p が偽であることを聞き手に認めさせる意味に変えてしまうからである。しかし、i類とiii類の反事実“如果”文の p が偽であることは文の前提であり、証明する必要がないので、文の意味がおかしくなる。

次に、ii類に属する反事実“如果”文の中でも、(307)、(308)のような、疑念を表す“既然”文に言い換えられない文が散見される。

- (307) (= (152)) 没啥意思，说说罢了。如果/*既然我的每条微博都有用意，那就该去死。(BCC)

別に何の意味もないよ。もしすべてのつぶやきに意味があるのなら、私は死ぬべきだろう。

- (308) (= (186)) 这一点我寿二爷要是/*既然看错了，张宇倒过念，眼睛扒出来让你们当泡踩！

このおれさまのいうことがあだんなかたら、おれの苗字の張の字をさかさに読もうが、目ん玉ほじくりだして踏みつぶそうが文句は言わないよ。

この2例の共通点は、下線部で示したように、qは聞き手にとって不利な状況だと認識されにくいいため、 $\neg q$ を認めさせることにより、 $\neg p$ が真であることを認めさせるという機能を果たすことも難しい。例えば、(307)のqである“(我)该去死(私は死ぬべきだ)”は聞き手に不利な状況をもたらす機能が果たせず、聞き手に $\neg p$ を認めざるを得ない状況に陥らせるという話し手の望みも実現できない。

それに対し、以下の(309)のqを構成する命題及び(310)の $\neg q$ を構成する命題は、聞き手にとって不利な状況をもたらす内容を表しているため、疑念を表す“既然”文に言い換えられる。

- (309) 你要是/既然不感兴趣你就别看!你要是/既然这么厉害就你上去表演!(BCC)

興味がなければ見なくていいのに。君があんなに凄いのなら君は舞台に登ってやってみせろ。(拙訳)

- (310) 倘若/既然真的没有杀人，就据理力争，为什么要逃跑呢?(黄文龙 1998:p.90)

本当に殺人していなかったら、理詰めで押し通せばいいのに、なぜ逃げたのだ。(拙訳)

さらに、母語話者に対するアンケート調査の結果からみると、以下の(311)のqは明らかに常識に反する文であるが、疑念を表す“既然”文に言い換えにくいと認識する被調査者が10人の中の7人を占め、圧倒的に多い。

- (311) (= (169)) 如果/*既然他能通过，太阳就从西边出来了。

あの人が合格できるのなら、太陽も西から昇るだろう。

その理由について、疑念を表す“既然”文を成立させるために、話し手が提示する $p \rightarrow q$ は聞き手も認める関係と想定しているものである。そうでなければ、

聞き手は q に反論されにくくても、 $p \rightarrow q$ に反論されやすいため、 $\neg q \rightarrow \neg p$ という推論を通して p が偽であることを認める必要がなくなる。例えば、(312) の $\neg q$ である“不回火星去（火星に戻らない）”は聞き手にとって反論しにくい内容であるが、 $p \rightarrow q$ である“不吃香菜 \rightarrow 要回火星（パクチーを食べないなら火星に戻る必要がある）”という論理関係は F のように反論されやすいため、“我爱香菜（私（=聞き手）はパクチーが好きだ）”という $\neg p$ を聞き手に認めさせることが難しい。

- (312) 既然你们不爱香菜，那你们就回火星去吧，地球不合适你们。(BCC)
F:凭什么我们不喜欢吃香菜就要回火星？

君たちはパクチーが好きじゃないのなら、火星に戻れ。地球にいるのは君たちにふさわしくないのだ。

F:なぜパクチーが好きじゃないくらいで、火星に戻らなくてはいけないのか。(拙訳)

以上の分析からみると、反事実“如果”文は、 q が常識や事実などに反し、聞き手にとって認められにくいことを話し手が求めているという点について、疑念を表す“既然”文と共通している。しかし、疑念を表す“既然”文は、聞き手により $p \rightarrow q$ の対偶を取り、 $\neg p$ を認めることが求められるため、 p が反事実でも常識に反する状況でもない場合、必ず聞き手にとって反論しにくい内容を提示することが必須である。その q が聞き手にとって反論できるか否かによって、コミュニケーションが成立するか否かに大きな影響を与える。

一方、反事実“如果”文の場合、話し手が提示する p は反事実、常識に反する以外に、話し手、聞き手或いは話題に関わる第三者のいずれかにとって不利であるため、事実になる可能性が低いことを聞き手に認められると、文が成立する。(309)、(310) の 2 例ともに、 q である“去死（死に行く）”または“张字倒过念，眼睛扒出来让你们当泡踩（おれの苗字の張の字をさかさに読ませるか、目ん玉ほじくりだして踏みつぶされる）”が話し手にとって不利なことを表し、

事実にならないことを聞き手が認めると、話し手は p である“每条微博都有用意（すべてのつぶやきに意味がある）”と“看错了（当たらなかった）”が偽であることを証明しようとする意図が伝えられる。

まとめて言うと、疑念を表す“既然”文は、聞き手に p が偽であることを証明させるため、q 及び p→q を提示する時、聞き手に配慮する必要があり、より客観的である。一方、反事実“如果”文は話し手が ¬p を証明しようとする意図のみを表し、聞き手の参加度が低いため、q 及び p→q を提示する時、主観的な考えを表してもよい。

そのため、疑念を表す“既然”文の p はほとんど聞き手が示した観点であり、話し手はその観点到に反論する態度は文や文脈の中に表さないことが一般的である。例えば、(313) と (314) は黄文龙(1998)で“如果”と“既然”のどちらかが入っても違和感がない例として挙げられた用例であるが、母語話者 10 人に対するアンケート調査結果によると、“如果”を入れると違和感を持つと回答した人数は 0 である一方、“既然”を入れると違和感を持つと回答した人数は、両例とも 6 人である。

- (313) 冷铁冰打断他的话：“既然在会上征求意见，那就是没有成熟，(? 既然/如果) 成熟了，何必征求意见。”(黄文龙 1998:p.89)

「会議で意見を求めるのだから、未熟である何よりの証拠だ。成熟していたら、意見を求める必要がないだろう。」冷鉄氷はあの人のお話を中断させて言った。(拙訳)

- (314) (= (274)) 至于典论，在未庄是无异议，自然都说阿 Q 坏，被枪毙便是他的坏的证据，(? 既然/如果) 不坏又何至于被枪毙呢？

世論についていえば、未庄では、一人の異議もなく、当然、阿 Q が悪いということであった。銃殺に処せられたのは、その何よりの証拠である。悪くもないのに、銃殺にされるわけがないではないか。(日中:『呐喊』)

このような例を疑念を表す“既然”文とする時、違和感が生じる理由は、波線部で示したように、p を否定する観点が先に述べられたからである。反事実“如果”文は話し手が自らの観点を述べるものであるため、先に p に反論する本音を言っても、文の機能が果たせた。一方、疑念を表す“既然”文の場合、話し手が聞き手の観点である p を認めるふりをして、聞き手にとって認められにくい q を提示する。すると、聞き手が q を否定することにより、p を否定するという語用論的プロセスによって機能を果たす。そのため、先に $\neg p$ という話し手の本音を漏らせば、文の語用論的機能が果たせず、意味がおかしくなる。この区別によって、以下の (315)、(318) のような意味的に近い反事実“如果”文と疑念を表す“既然”文を比べると、疑念を表す“既然”文のほうが、皮肉なニュアンスが含まれ、反論の意味がより強く表される一方、反事実“如果”文の場合、話し手が聞き手の観点を認めるふりをするのがなく、p を否定しようとする自分の観点を言うだけという両複文のニュアンスの違いがわかる。

(315) (= (310)) 倘若真的没有杀人, 就据理力争, 为什么要逃跑呢?

本当に殺人していなかったたら、理詰めで押し通せばいいのに、なぜ逃げたのだ。

(316) 我怀疑他杀了人。倘若真的没有杀人, 就据理力争, 为什么要逃跑呢?

あの人が殺人しなかったことを疑っている。 本当に殺人しなかったなら、理詰めで押し通せばいいのに、なぜ逃げたのだ。

(317) ?我相信你说的, 他没有杀人。倘若真的没有杀人, 就据理力争, 为什么要逃跑呢?

?あの人が殺人していなかったというあなたの言葉を信じる。 本当に殺人しなかったなら、理詰めで押し通せばいいのに、なぜ逃げたのだ。

(318) 他**既然**没有杀人,为什么要潜逃呢?(黄文龙 1998:p.90)

あの人人は人を殺さなかった**なら**、なぜ逃げたのだろう。(拙訳)

(319) ?我怀疑他杀了人。他**既然**没有杀人,为什么要潜逃呢?

?あの人が殺人しなかったことを疑っている。人を殺さなかった**なら**、なぜ逃げたのだろう。

(320) 我相信你说的,他没有杀人。他**既然**没有杀人,为什么要潜逃呢?

あの人が殺人しなかったというあなたの言葉を信じる。人を殺さなかった**なら**、なぜ逃げたのだろう。

以上をまとめると、疑念を表す“既然”文は以下の 3 点で ii 類の反事実“如果”文に区別することができる。

- ① q を提示する際に、聞き手に対する配慮がより厳しく、必ず聞き手にとって認められにくい内容を提示する必要がある。
- ② $p \rightarrow q$ を提示する時、より客観的な関係を提示し、聞き手にも認めさせる必要がある。
- ③ 話し手は文脈や文の中で、p に対する疑念を抱くまたは反論する本音を漏らすことができず、聞き手に p が偽であることを認めさせるのが必要である。

以上の 3 点により、疑念を表す“既然”文を用いる場合、聞き手に p を否定しなければならない状況に陥らせることが目的である。一方、反事実“如果”文を用いる場合、話し手が p に対する否定の態度を表すのみである。

4.5 “因为”文との比較

本節では、疑念を表す“既然”文と“因为”文の違いについて考察する。

前述のように、「複文二分系統」説においても「複文三分系統」説においても、“因为”文と“既然”文は「因果類複文」に分類されている。同じ上位分類に属す

る理由で、“因为”文と“既然”文の区別に関する先行研究が多く見られる。その中で、刘月华・潘文娱・故韡(2004)、钟小勇・张霖(2013)など、pの違いにより区別されている先行研究があり、李晋霞等(2004)など、主観性の差から区別されている研究もある。しかし、これらの研究は、一般“既然”文のみに注目し、疑念を表す“既然”文に触れていないのが一般的である。

疑念を表す“既然”文と“因为”文の区別について研究しているのは、管見の限り、黄文龙(1998)のみがある。黄文龙(1998)は、疑念を表す“既然”文の場合、qはpの推論と正反対であること、または常識外れの内容であることがよく見られる一方、“因为”文の場合、qはpと正反対の内容を表さないと指摘している(黄文龙 1998:p.88)。

しかし、4.3では、qで表される内容がpからの推論と正反対ではない疑念を表す“既然”文の用例を挙げた。

(321) (= (283)) **既然**你们医院这么不肯帮忙，咱们就熬着吧。

また、次の(322)～(324)のような、qはpからの推論と正反対な内容を表す“因为”文も散見される。

(322) “就**因为**一个错误你就被扔出来了？”费雅生气地说。(BCC:索菲·金塞拉《家政女王》)

「一つの過失を犯したぐらい**で**、あなたは追い出されたのか」と費雅が怒りながら言った。(拙訳)

(323) “难道朋友之间**因为**不一致就自相残杀？(BCC:卡尔·麦《老母塔之夜》)

友達同士は意見のずれぐらい**で**、同士討ちするのか。(拙訳)

(324) 他欲哭无泪扪心自问：难道**因为**不敢正视自己的胆小怯弱就可以抽大烟吗？(BCC:王旭烽《茶人三部曲》)

自分の臆病を直視できないぐらいで、アヘンを吸うことが許されるのかと、彼は悲しくて、胸に手を当てて自問した。(拙訳)

以上の各例を観察してみると、いずれも話し手は p から q を推論することに對し疑念を抱くまたは反論したい態度を持っている例である。(322) を具体例として分析すると、p である“你犯了一个错误(あなたは一つの過失を犯した)”と q である“你被扔出来了(あなたは追い出された)”はすでに発生した事実であり、会話双方が共有している情報である。“费雅(=話し手)生气地说(費雅が怒りながら言った)”という後続文から、話し手は p である“犯了一个错误(一つの過失を犯した)”を事実として認める一方、q である“被扔出来了(追い出された)”という結果を導く理由にならないと認識し、(325) のように“即使犯了一个错误也不应该被扔出来(一つの過失を犯しても、追い出されるべきではない)”という観点を表している。即ち、このような例は、肯定的な語気を強調するのではなく、疑念を表す“既然”文と同じく、q は p から推論した結果と正反対であり、疑念を表している文である。このような“因为”文も疑念を表す“既然”文と同じく、q が疑問文である構文形式が多く見られる。本節では、疑念を表す“因为”文と称する。

(325) 即使犯了一个错误,你也不应该被扔出来。你为什么被扔出来了?

一つの過失を犯しても、追い出されるべきではないのだ。なぜ追い出されたのか。

しかし、疑念を表す“因为”文は、疑念を表す“既然”文と言い換えることができない。(326) と (327) はその例である。

(326) *既然一个错误,你就被扔出来了?

*一つの過失を犯したのなら、あなたは追い出されたのか。

(327) *既然不敢正视自己的胆小怯弱就可以抽大烟吗?

*自分の臆病を直視することができないのなら、アヘンを吸うのか。

この理由については、(328)～(331)に示すように、疑念を表す“因为”文と疑念を表す“既然”文に関する以下の2点の違いで解釈することができる。

- ① 疑念を表す“既然”文の場合、pの事実性を疑うまたは否定する一方、疑念を表す“因为”文の場合、pの事実性を疑うまたは否定する気持ちを表していない。
- ② qが疑問文である場合、疑念を表す“既然”文における対比的焦点は $\neg q$ であり、qはpから導く排他的な結果とRealityのスペースで発生した事実が一致しないことに対する疑念を表している。一方、疑念を表す“因为”文は、 $\neg q$ という対比的焦点を持たず、pがqを導く排他的な理由であること(=pが文の対比的焦点であること)に対する疑念または否定を表している。

具体的に分析を行うと、以下の(328)～(331)においては、G1はpの事実性に対する否定を表す内容である。一方、G2は、pは対比的焦点としての排他性を否定するものである。そのうち、疑念を表す“既然”文の場合、 $p \rightarrow \neg q$ の対偶を取り、 $q \rightarrow \neg p$ という話し手がRealityのスペースで真であると認識する形式でテストを行う⁶⁷。

(328) **既然**是真丝, 为什么看不到一条蚕儿呢? (语料:李学健《同意接受订货》)

G1:真丝必须看得到蚕儿, 这不是真丝。

G2:*产品是真丝, 不会导致看到蚕儿。(如果实际上导致了就是奇怪的。)

真綿であるのなら、なぜ蚕は一匹も見つけれないのか。(拙訳)

G1:真綿なら蚕が見える。これは真綿ではない。

⁶⁷ テスト法について、4.3.2.1を参照。

G2: *真綿であることは、蚕を見つけるという結果を導くべきではない。
(実際にそういう結果を導いたのならおかしい。)

- (329) (不服) 既然它毫无益处, 又为什么世界上大多数的男子都喜欢这一套呢? (语料:熊慧玲《残了的蔷薇》)

G1:毫无益处, 世界上大多数男子就不会喜欢了。它不是毫无益处。

G2:*不, 它毫无益处, 不会导致世界上大多数的男子不喜欢这一套。
(如果实际上导致了就是奇怪的。)

(納得できない)これは本当にメリットがなければ、なぜ世の中のほとんどの男子はこれが好きなのか。(拙訳)

G1:本当にメリットがなければ、世の中のほとんどの男子はこれが好きになるわけではない。これはメリットがないわけではない。

G2:*メリットがないという理由は、世の中のほとんどの男子が好きではないという結果を導くべきではない。(実際にそういう結果を導いたのならおかしい。)

- (330) 就因为一个错误你就会被扔出来了?

G1:* 不, 这不是一个错误。

G2:不, 被扔出来不应该是由于犯了一个错误这种小事导致的。(如果实际上导致了, 就是奇怪的。)

一つの過失を犯したぐらいで、あなたは追い出されたのか。

G1:* 違う。過失を犯さなかった。

G2:違う。追い出されたという結果は、一つの過失を犯したという小さなことから導かれるべきではない。(実際にそういう結果を導いたのならおかしい。)

- (331) 难道因为不敢正视自己的胆小怯弱就可以抽大烟吗?

G1:*不敢正视自己的胆小怯懦就不会抽大烟。他敢于正视自己的胆小怯弱。

G2:不, 抽大烟这样的事情, 不应该只是因为不敢正视自己的胆小怯弱导致的。(如果实际上导致了, 就是奇怪的。)

自分の臆病を直視できないぐらいで、アヘンを吸うことが許されるのか。

G1:*自分の臆病を直視できないのならアヘンを吸わないよ。自分の臆病を直視することができるのだ。

G2: アヘンを吸うことは、自分の臆病を直視することができないという理由だけで導かれるべきではない。(実際にそういう結果を導いたのならおかしい。)

G1 と G2 のようなテストを行った結果、疑念を表す“既然”文は、p の事実性、即ち現実世界で p が真であることまたは現実から接近可能な世界すべてで p が真であることを否定することが目的である。一方、疑念を表す“因为”文は、p が対比的焦点として q を導く排他的理由であることに対する疑念または否定を表すのが目的である。例えば、(328) では、p である“这是真丝 (これは真綿だ)”が偽であることを証明されている。一方、(331) では、p である“不敢正视自己的胆小怯弱 (自分の臆病を直視できない)”の事実性に対し、話し手は疑うまたは反論する態度を持たず、p が q である“抽大烟 (アヘンを吸う)”という結果を導く唯一の理由であることに対し、疑念または反論という態度を表したい。即ち、「p という理由のみで q を成立させることはおかしい」という態度が見える。

即ち、p の事実性に対する疑念を表したい場合、疑念を表す“既然”文を用い、p が排他的な理由であることに対する疑念を表したい場合、疑念を表す“因为”文を用いる。

4.6 本章のまとめ

本章では、疑念を表す“既然”文を取り上げ、特徴を見てきた。一般“既然”文、“如果”文及び“因为”文との比較を通して、以下の問題点を明らかにした。

① 疑念を表す“既然”文の推論過程について、4.3で「ライテスト」及び「“否則”テスト」を通して、明らかにした。

疑念を表す“既然”文の前提と情報的焦点は、一般“既然”文とは逆に、 p が情報的焦点である。前提は、構文形式により、 q または $\neg q$ になる。前提となる q または $\neg q$ は、必ず聞き手にとって反論しづらい内容を表している。具体的には以下のようにまとめる。

A) q が疑問文である場合、文の形式は「既然 p , (就 $\neg q$), 为什么/何必/怎么などの疑問詞 + q を構成する命題」である。その時、 $\neg q$ は文の前提である。

B) q が命令文または陳述文である場合、文の形式は「既然 p , 就 q 」である。その時、 q は文の前提である。

さらに、その前提部分の否定命題は文の対比的焦点にもなる。そのため、 p から推論された唯一の結果は聞き手にとって、事実や常識に反する、または自分に不利な状況をもたらすなどの理由で認められなく、 $p \rightarrow q$ (疑問文の場合は $p \rightarrow \neg q$) という慣習的な前提に基づく論理関係も反論しにくいため、仕方なく、 p という理由が偽であることを認めることである。

しかし、事実や常識に反する内容を表す場合を除いて、「聞き手に不利な状況であるか否か」については、話し手の主観的な判断によるものであるため、聞き手との認識のずれが生じ、疑念を表す機能が果たせず、コミュニケーションがうまくいかなくなる場合もある。

② 疑念を表す“既然”文の独特な特徴について、4.4で明らかにした。

疑念を表す“既然”文は反事実“如果”文に言い換えられると主張している先行研究を踏まえて、両複文の対照分析を行った。その結果、疑念を表す“既然”文と反事実“如果”文に以下の相違点があるとまとめた。

- A) 疑念を表す“既然”文と言い換えられるのは ii 類の反事実“如果”文しかない。
- B) 疑念を表す“既然”文では、聞き手に p が偽であることを認めさせるため、 $p \rightarrow q$ 及び q は文の前提でなければならない一方、反事実“如果”文の場合、p を否定しようとする話し手の観点を述べるだけであり、聞き手にやむを得ず認めさせるという機能がないので、 $p \rightarrow q$ は必ずしも文の前提であるとは限らない。
- C) さらに、疑念を表す“既然”文の場合、聞き手に p が偽であることを認めさせるため、対比的焦点である $q/\neg q$ を聞き手にとって認められにくい内容と設定する必要があるが、反事実“如果”文ではそういう制限がない。
- D) 疑念を表す“既然”文は反事実“如果”文より、客観性が強い。
- ③ 対比的焦点の違いにより、疑念を表す“既然”文と疑念を表す“因为”文との区別を明らかにした。

4.5 では、疑念を表す“既然”文を、同じく q は p からの推論と正反対な内容を表す“因为”文と比較した結果、両複文の一番大きな区別は対比的焦点の違いであるという結論を得た。

疑念を表す“因为”文では、p が対比的焦点であることに対し、疑念または否定を表す一方、疑念を表す“既然”文は p の事実性に対する疑念または否定を表し、 $q/\neg q$ という対比的焦点を通してそれを証明する。そのため、p の事実性に対する疑念を表したい場合、疑念を表す“既然”文を用い、p が排他的な理由であることに対する疑念を表したい場合、疑念を表す“因为”文を用いるという両複文の使い分けについて明らかにした。

第5章 結論

本研究は中国語の広義的な因果複文に属する説明因果複文“因为 p, 所以 q”、反事実仮定文“如果 p, 就 q”及び疑念を表す推論因果複文“既然 p, 就 q”の特徴を分析するものである。ここで、第1章 1.1 節で示した研究課題を再び挙げてみる。

- ① 中国語における因果複文の焦点の確定
- ② 焦点移動による文の多義性が生じる理由
- ③ 焦点を移動させる条件

本章では、この3つの課題について本研究を通して具体的にどの程度明らかにできたのかを、要約しつつ述べる。

5.1 本研究の要約

中国では、『馬氏文通』(1898)以来、複文の研究が盛んになり、現在も毎年2、3冊の複文に関する研究著作が出ている。この中で、説明因果複文“因为 p, 所以 q”と推論因果複文“既然 p, 就 q”及び仮定文“如果 p, 就 q”の区別と交替性に関する研究がよく見られる。一方、1990年代以来、哲学から来た前提・焦点など、意味論や語用論的な諸概念が導入され、中国語における焦点研究に関する研究も多く見られてきた。それに対し、複文の焦点構造に関する研究は遅れていると言わざるを得ない。なぜなら、中国語における複文は、同一構文でも違う意味解釈が生じることが多く、焦点構造が極めて複雑になるからである。本研究では、上述の3種類の広義的な因果複文に対する個別研究を行いながら、お互いの対照分析も行った。各複文の前提、情報的焦点及び対比的焦点における共通点と相違点を明らかにした上で、各複文の使用目的、使用条件、焦点移動の条件及び多義性が生じる原因など、種々の現象を語用論的な視点から分析を試みた。

本研究は5章に分かれており、各章をまとめると以下ようになる。

第1章では、本研究の目的、研究対象、背景、用語及びデータの収集方法について述べた。中国語における因果複文の分類方法を再検討し、邢福义(2001)

が指摘している「複文三分系統」説に従い、本研究の研究対象である“因为”文、反事実“如果”及び疑念を表す“既然”文を広義的な因果類複文に分類し、比較・対照の理論的可能性を確認した。

第2章から第4章にかけては、研究対象とする3種類の複文の焦点構造及び焦点移動条件に関する諸問題点について分析を行った。

第2章では、“因为”文の原因節焦点化条件及び焦点移動による意味変更について論じた。考察する際に、副詞“才”により原因節を焦点化した“因为……才”文と副詞“才”がq節を導かない一般“因为”文に分けて、それぞれについて考察を行った。副詞“才”は中国語における焦点マーカーの一つであり、意味により、焦点は“才”の左側にある文と右側にある文に分けられる。そのうち、“因为……才”文と言い換えられるのは“x才(是)y”という構文形式であり、焦点指向は左側であることがわかる。即ち、“因为……才”文は“p, 才(是)q”という単文に言い換えられ、対比的焦点はpである。次に、“因为……才”文との交替性により、一般“因为”文を①交替可能②交替不可③交替すると意味が大きく変更するという3種類に分けて、pという対比的焦点の有無という視点から解釈した。特に、③類の文は、焦点化されると、pは対比的焦点になり、〔+排他〕という特徴が付与されるため、他の可能な条件をすべて排除したという言外の意味が生じ、コミュニケーションのずれを生む可能性もある。なお、“因为”文における原因節焦点化の本質はpを対比的焦点とし、即ちpがqを成立させる唯一の条件として強調することである。そのため、話し手が $p \rightarrow q$ (pがqを成立させる)を支持することが原因節焦点化の必要条件であるとの結論を得た。さらに、この対比的焦点であるpが話し手自ら提示する内容であれば、焦点マーカー“是”が用いられ、pが聞き手から提示される内容であれば、焦点マーカー“正”が用いられるのは一般的であるという使い分けについても明らかにした。

第3章では、反事実“如果”文の前提、焦点及び焦点移動による多義性を考察した。従来、英語の影響を受けて、反事実“如果”文の $\neg p$ (pが偽であること)を前提トリガーと見なしている研究が一般的であった。しかし中国語における反事実“如果”文は英語の「if p, q」文より複雑であるため、本研究では“因为…

…才”文との交替性により、交替可能な i 類、交替すると非文になる ii 類、交替しても非文にはならないが意味の変化が大きい iii 類に分けて、比較分析を行った。その結果は以下の通りである。

1) i 類の文の場合、前提は $\neg p$ 、情報的焦点は q である。さらに、“因为…才”文と同じく、対比的焦点 $\neg p$ を持っているため、“因为……才”文に言い換えられる。

2) ii 類の文の場合、前提は $\neg q$ であり、焦点は p の事実性 ($=\neg p$) である。さらに、対比的焦点は明らかに事実または常識に反する q であるため、 p が導く唯一の結果はその q であると主張することにより、 p が偽であること ($=\neg p$) を証明している。

3) iii 類の文の前提、情報的焦点及び対比的焦点は i 類と一致している。しかし、iii 類の文における p は難しい条件及び実現しやすい条件として設定されている。その条件の難易度操作を通して、 q の実現の難易度を強調するという言外の意味が含まれているという結論を得た。なお、i 類と iii 類の言外の意味における相違点は、多義性が生じる原因であることを明らかにした。

第 4 章では、推論因果複文のうち、 p に対する疑念または否定の態度を表す「疑念を表す“既然”文」を取り上げ、焦点及び焦点移動による多義性について考察した。まず、疑念を表す“既然”文に関する先行研究が少なく、定義もまだ明確ではないため、定義を明らかにした。次に、ライテスト及び“否则”テストで疑念を表す“既然”文の前提、情報的焦点及び対比的焦点を明確にした。その結果、疑念を表す“既然”文の前提と情報的焦点は p の事実性は文の情報的焦点であり、聞き手にとって反論しにくい内容 $q/\neg q$ は文の前提であることを明らかにした。それは一般“既然”文とは真逆である。さらに、疑念を表す“既然”文は必ず対比的焦点 $q/\neg q$ を持っているが、一般“既然”文の場合、対比的焦点がない文が一般的であり、たとえ対比的焦点を持っている文においても、対比的焦点は p である。疑念を表す“既然”文は、 p から推論されるのは聞き手にとって認められにくい $q/\neg q$ のみであることを強調した上で、聞き手に p を否定させる。それは、第 3 章で論じた ii 類の反事実“如果”文と似ており、互いに交替

可能であると先行研究で指摘されている。しかし、疑念を表す“既然”文の推論過程には聞き手の参加が必要であるので、反事実“如果”文より客観的であるという独特な特徴を持っている。最後に、疑念を表す“因为”文も存在するが、疑念を表す“既然”文と比較することにより、話し手が疑念または否定を表したい部分が異なるという両複文の区別を明らかにした。

5.2 本研究の意義と今後の展望

以上の本研究の目的と要約を基に、本研究の意義は以下の3点にまとめられる。

- ① 実際のデータ用例に基づき、中国語における因果関係を表す複文の中の特殊形式とみられる原因節を焦点化された“因为”文、反事実“如果”文及び疑念を表す“既然”文の構文上・意味上の特徴を明らかにした。
- ② 従来の中国語の因果複文の研究で注目されている情報的焦点以外、対比的焦点も研究する価値があることを主張し、対比的焦点の違いは文の意味変更及び多義性による理解のずれにつながるとの見解も示した。
- ③ 語用論的視点から、焦点構造及び焦点移動による意味変更の活用に関する分析の試みを行った。特に対比的焦点が〔+排他〕という特徴があるため、位置変更により、文の言外の意味も大きく変わることを明らかにした。

最後に、本研究の結びとして、残された課題を述べる。

- ① 研究対象を拡大する必要がある。本研究では、邢福义(2001)が指摘している「広義的な因果類複文」の中で、“因为”文、“如果”文と“既然”文を取り上げて対照研究を行った。しかし、同じ「広義的な因果類複文」に属する“只有 p, 才 q”文、“只要 p, 就 q”文、“为了 p, q”文に触れなかった。李晋霞(2010)でも、一部の反事実“如果”文と“只有 p, 就 q”文にも交替可能であると指摘している。今後、“只要 p, 就 q”文などの複文も研究し、「広義的な因果類複文」を全体的に把握していくことを目指したい。

- ② 言語横断的な展開も必要である。本研究では、“既然”文の意味上の複雑性を述べた際に、日本語との対訳研究に少し触れたが、基本的に中国語における各類の因果類複文の対照分析に注目した。今後は、日本語との対照分析を行い、特殊形式の因果類複文と日本語との対訳の方法に関する分析を試みたいと考えている。

参考文献

〔中国語文献(ヒンソ順)〕

- [1] 陈国华(1988):<英汉假设条件句比较>，《外语教学与研究》73期,p.10-18。
- [2] 陈中干(1995):《现代汉语复句研究》，语文出版社 1995 年版。
- [3] 丁爱群(2006):<预设的触发语研究>，《长治学院学报》2006 年第 6 期,p.77-81。
- [4] 方梅(1995):<汉语对比焦点的句法表现手段>，《中国语文》(4),p.279-288。
- [5] 郭继懋(2008):<“因为所以”句和“既然那么”句的差异>，《汉语学习》2008 年 6 月第 3 期,p.22-29。
- [6] 李晋霞(2010):<反事实“如果”句>，《语文研究》2010 年第 1 期,p.53-55。
- [7] 李晋霞·刘云(2004):<“由于”与“既然”的主观性差异>，《中国语文》(299),p.123-128。
- [8] 李萌(2013):《现代汉语反事实假设句研究》，河南大学硕士学位论文。
- [9] 李艳洵(2006):<汉语假设复句预设浅析>，《湘潭师范学院学报》第 28 卷第 4 期,p.153-155。
- [10] 何兆熊主编(1999):《新编语用学概要》，上海:上海外语教育出版社。
- [11] 胡裕树主编(1979):《现代汉语(重订本)》，上海:上海教育出版社。
- [12] 黄伯荣·廖旭东主编(2002):《现代汉语(增订三版下册)》，北京:高等教育出版社。
- [13] 黄文龙(1998):<“既然 P,就 Q”句质疑>《贵州师范大学学报》(社会科学版)总第 100 期,p.87-91
- [14] 蒋严(2000):<汉语条件句的违实解释>，《语法研究和探索(十)》: p.257-279
- [15] 蓝纯(1999):<现代汉语预设引发项初探>，《外语研究》1999 年第 3 期:p.11-19。
- [16] 黎锦熙(1924):《新著国语文法》，长沙:湖南教育出版社。

- [17] 刘林(2013):《现代汉语焦点标记词研究~以“是”、“只”、“就”、“才”为例~》,复旦大学博士论文。
- [18] 刘鑫民(1995):<焦点、焦点的分布和焦点化>,《宁夏大学学报(社会科学版)》(17),p.79-84。
- [19] 刘勛宁(2018)<一套表示语法关系的演算符号>,付録日本語訳文と英語訳文,『明海大学外国語学部論集』第30集,p.83-94。
- [20] 刘月华·潘文娉·故韡(2004):《实用现代汉语语法(增订本)》,北京:商务印书馆。
- [21] 吕叔湘(1999):《现代汉语八百词(增订本)》,北京:商务印书馆。
- [22] 吕叔湘(2002):《吕叔湘全集第一卷:中国文法要略》,沈阳:辽宁教育出版社。
- [23] 沈家煊(1986):<语用学论题之一:预设>,《国外语言学》(1),p.29-36。
- [24] 石安石(1986):<句义的预设>,《语文研究》(19),p.27-32。
- [25] 王芳(2015):<反事实条件句语义理论的发展>,《宜春学院学报》第37卷第2期,p.91-95。
- [26] 王麦巧(2008):<“既然 p,那么 q”与“如果 p,那么 q”(新)之比较>,《语言应用与研究》2008年第8期,p.59-61。
- [27] 王群(2005):<试论“才”和“就”语义变化的双向性和不平衡性>,《语言科学》第4卷第6期,p.18-26。
- [28] 王维贤(1997):《现代汉语语法理论研究》,北京:语文出版社。
- [29] 王芸嫒(2017):「“如果”句的反事实表达浅析」,『お茶の水女子大学中国文学会報』(36),p.1-14。
- [30] 王芸嫒(2019):「副词“才”与“因为”句焦点化问题浅析」,『お茶の水女子大学中国文学会報』(38),p.21-36。
- [31] 邢福义(1993):《现代汉语》,北京:高等教育出版社。
- [32] 邢福义(2001):《汉语复句研究》,北京:商务印书馆。
- [33] 徐阳春(2002):《现代汉语复句句式研究》,北京:中国社会科学出版社

- [34] 袁毓林(2003):<句子的焦点结构及其对语义解释的影响>,《当代语言学》第五卷 2003 年第 4 期,p.323-338。
- [35] 袁毓林(2012):《汉语句子的焦点结构和语义解释》,北京:商务印书馆。
- [36] 袁毓林(2015):<汉语反事实表达及其思维特点>,《中国社会科学》2015 年第 8 期,p.126-144。
- [37] 袁毓林·张弛(2016):<简析中国大学生反事实思维及其表达的替代方案>,《现代中国语研究》第 18 期,p.1-14。
- [38] 章敏(2016):<“要不是”反事实条件句的情态问题研究>,《中南大学学报(社会科学版)》,p.206-212。
- [39] 郑郁汀(2012):《现代汉语因果复句焦点研究》,华中师范大学硕士论文。
- [40] 钟小勇·张霖(2013):<“既然”句和“因为”句主观性差异探>,《汉语学习》第 4 期:p.35-40。
- [41] 朱斌等(2013):《汉语复句句序和焦点研究》,广州:世界图书出版公司。

〔日本語文献(五十音順)〕

- [42] 飯島周(1983):「機能的文構成における焦点化について」,『跡見学園女子大学紀要』(16), p1-12。
- [43] 稲田俊明(2010):「疑問文の簡略応答と焦点化について」,『文学研究』(107),p.115-136。
- [44] 伊藤さとみ(2006):「中国語における条件文～『如果』と『无论』の比較分析～」,『日本東洋文化論集(13)』,p.31-57
- [45] 井上優(2014):「対照研究と通言語的研究」,『日本語学と通言語的研究との対話』,p165-205。
- [46] 大江三郎(1975):「『会話の含意』をめぐって」,『文学研究』72,p.1-14.
- [47] 奥坊光子(1990):「『前提』と『断定』——述語補文をめぐって」,『山梨英和短期大学紀要 24』,p.248(55)-229(74)。
- [48] 王芸嬾(2020):「疑念を表す“既然 p, 就 q”文について」,『お茶の水女子大学中国文学会報』(39), p.57-75。

- [49] 王麗英(2010):「中国語の複文について」,『言語文化』第 18 号,p.1-10。
- [50] 加藤重広(2004):『日本語語用論のしくみ』,研究社。
- [51] 神郡悦子(1990):『文芸言語研究 文芸篇』(18), p45-64。
- [52] 坂口真理(2014):「条件文の時制解釈についての覚え書き」,『ノートルダム清心女子大学紀要.外国語・外国文学編,文化学編, 日本語・日本文学編』第 38 卷,p.76-86。
- [53] 中山康雄(2004):「前提と信念」,『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第 30 卷:p.92-112。
- [54] 新田小雨子(2013):『因果関係を表す接続表現の日中対照研究』,駿河台出版社。
- [55] 田窪行則(1987):「統語構造と文脈情報」,『日本語学』6(5),p.37-47。
- [56] 田子内健介・足立公也(2005):『右方移動と焦点化』研究社。
- [57] 田林洋一(2010):「モダリティと焦点化・話題化の関連についての認知言語学的考察」,『学苑 総合教育センター・国際学科特集』NO.835,p.89-102。
- [58] 董雪嬌(2016):「原因を表す“是…的”構文の用法」『現代社会文化研究』NO.63,p.185-195。
- [59] 富永善視(2012):『発話文の前提の推定に関する研究』北陸先端科学技術大学院大学学位論文。
- [60] 鳥井克之 2004:「再論 中国語の複文について——新しい中国語教学文法の再構築を目指して」,『外国語教育研究』第 8 号,p.75-97。
- [61] 樋口万里子(1989):「反事実文の前提」『九州工業大学情報工学部紀要 2』,p.1-13。
- [62] 福本陽介(2020):『中国語の時量詞構文における焦点について』,『東アジア国際言語研究創刊号』,184-94。
- [63] 彭穎秋(2018):『因果関係と条件関係の連続性——“既然”の訳文を中心に』,湖南大学修士学位論文。
- [64] 馬穎瑞(2017):『日本語疑問文の統語語用論的研究』,北海道大学博士(文学) 甲第 12512 号。

[65] 熊兆忠(2015):『コーパスから見る中国語の“既然”と日本語における対応表現』,湖南大学修士学位論文。

[英語文献(アルファベット順)]

[66] Bloom(1981):*The Linguistic Shaping of Thought: A Study in the Impact of Language on Thinking in China and the West*, Hillsdale.

[67] Erteshik-Shir, N. & S. Lappin (1979): Dominance and the Functional Explanation of Island Phenomena, *Theoretical Linguistics* 6, p.41-85.

[68] Frege(1892): Sense and Reference, *The Philosophical Review*,Vol.57, No.3 (May,1948), p.209-230.

[69] Genette(1972):*Figures III*, Seuil, 1972。

[70] Gundel(1999): On different kinds of focus. *Focus: Linguistic, Cognitive, and Computational Perspectives*, p.293–305.

[71] Halliday(1967): *Intonation and Grammar in British English*. The Hague, Mouton.

[72] Jackendoff(1972): *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, Cambridge, MA., MIT Press.

[73] Karttunen(1973): Presuppositions of Compound Sentences, *Linguistic Inquiry Volume IV Number 2*, p.169-193.

[74] Karttunen(1974): Presupposition and Linguistic Context. *Theoretical Linguistics*1, p.181-193.

[75] Levinson(1983): *Pragmatics*, Cambridge university press.

[76] Rooth(1985): Association with focus. Doctoral Dissertation, *University of massachusetts*, Amherst.

[77] Stalnaker(1972): Pragmatics. *Semantics of Natural Language*, p.380-397.

[78] Stalnaker(1973): Presuppositions. *Journal of Philosophical Logic* 2, p.447-457.

謝辞

本研究を遂行し学位論文を作成するにあたり、指導教官である伊藤さとみ教授より終始多大なご指導ご支援を賜りました。小論の不適切な箇所等について、伊藤先生は逐一ご指摘のうえ、修正方法等をご提案下さり、熱心にご指導下さいました。本研究はまさに伊藤先生の丁寧なご指導のおかげで成し遂げたものと存じ、心より感謝の意を申し上げます。

ならびに、学位論文の作成等にあたって、宮尾正樹教授、和田英信教授、中西公子准教授、本林響子准教授及び伊藤美重子名誉教授にも多大なご指導ご助言を賜り、併せて心より感謝の意を申し上げます。

研究の進め方やそれに伴う多々の疑問点に関して、親身になってご相談にのっていただきました明海大学の曹泰和准教授、岡山大学の石井友美先生にひとかたならぬお世話になりました。学会発表の際、司会者の先生をはじめ先生方々からご質疑ご助言ご激励を多くいただき、本研究の進展、完成につながりました。立命館大学長谷川賢准教授より、本研究を進展させる大なるヒントを賜りました。そして、研究遂行にあたって中文研究室の皆様にも大いにご協力ご支援いただきました。併せて感謝申し上げます。

修士課程在学中、広島大学高永茂教授に研究方法及び学問の楽しさを教わりました。ご指導のおかげで、博士課程に進み更なる研鑽をする意欲と勇気が湧き、本研究を完成する運びとなりました。心より感謝の意を申し上げます。

博士課程在学中、留学生奨学金のご支援をいただきました三菱商事様、ならびに在職中の私が学術研究の道に進むことを許可して下さいました株式会社董董アカデミー代表取締役社長董菁氏に、心より感謝申し上げます。

最後に、これまで自分が目指した道を進むことに対し、温かく見守りそして根気強く支援してくれました両親と叔父叔母、私を明るく励まし続けてくれました従妹にも心より感謝します。

指導教官をはじめ、多くの方々よりご恩恵を承ったおかげで、本研究の成就に至ったものと認識しております。ここにて先生方々、皆様に重ねて心より感謝の意を申し上げます。